

転生したら轟焦凍くん
の幼馴染みだった。

室賀小史郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今頃になつてヒロアカにハマり、こんな展開ないかなとご都合主義満載な妄想を書き
ました。

本家のような血みどろの戦いは無い。

ただただ平和なヒロアカを書いていくだけです。

オリジナル主人公と原作キャラ（主に筆者が好きなキャラ）の絡みを書いていけたら
と。

ご都合主義や原作改変やキャラ崩壊が多分に含まれますので、ご注意ください。
気まま更新です。

pixivにも掲載しております。

目 次

どうやら今世は忙しくなりそうです。

1

ヒロアカ世界なのにヒロアカ世界と違う。

世間つて狭いのね。

被身子ちゃんをなんとかしよう。

42

色々踏まえて進路を決めよう。

雄英高校受験に行きました。

入学準備とショッピング。

雄英高校初登校。

エリート校つて半端ない。

136 107 85 69 55

25 12

240 228 215 199 186 171 156

ヒーローつて難しい。

相変わらず平和です。

平和つていいよね。

デデデデデ!?

気持ちが一番大事。

学期末試験の勉強をしよう!

夏休みつて控えめに言つて最高じゃね?

どうやら今世は忙しくなりそうです。

俺の名前は地毒白刃（ぢどく はくば）。

年齢は5歳。

5歳と言つても、産まれた時から前世の記憶を持つ所謂転生者つてやつ。

前世は平和な日本でのうのうと暮らし、ニートのまま病氣で苦しんで亡くなつた。
ぶつちやけ楽な人生で、死ぬ間際までニートをさせてくれてた前世の両親には感謝しない。

両親が亡くなつてから『もつと親孝行すればよかつた』なんて在り来りな後悔もした
が、感謝の気持ちは忘れたことない。これだけが俺の自慢かな。自己満とか自惚れだけ
ど。

だから前世は満足だった人生だ。

なのに俺は転生した。

何故？ そんなの神のみぞ知る。

転生とか前世の記憶とか、それはまあいいんだよ。

1 どうやら今世は忙しくなりそうです。

前世でこれでもかつてくらいそういったラノベやマンガを楽しんでいたんだから。でもなんでもつと平和な世界に転生させてくれなかつたかなあ。

「ここあれだよ？ 僕のヒーローアカデミアだよ？」 訳分かんない超能力者ばっかりの世界よ？

「ヴィランつていう敵が蔓延つて、それを倒すヒーローなんて職業がある世界よ？」 ならこの世界で自分は平和なところで暮らしていけば良くないか、と思つたそこのあなた！

「そうは問屋……というか神が卸してくれない訳だ。」

「何故つて？」

「何故なら、

「何の真似だ、小僧？」

「…………」

ヒロアカ世界のナンバー2ヒーローのエンデヴァーから、あの轟焦凍を庇いながら対峙しているからさ！

「それは少し前のことだ——」

3 どうやら今世は忙しくなりそうです。

5歳になつて早々、焦凍の稽古が始まつた。

マンガやアニメで見た通りで、エンデヴァーは容赦なかつた。分かるよ。エンデヴァーのどうしてもオールマイトを越えられずに絶望して、自分の

悲願を子どもに託すつてのは分かるよ。

でもさ、ヒーローがここまで家族内めちゃくちゃにするのつて、正直どうかと思うんだ。

だからさ、やつちやつたんだよね！

俺の個性、毒で！

いや、やつちやつたつて言つても、そういうやつちやつたじやないぞ！

産まれてからずつと個性を扱う特訓をしてたんだ！

危ない個性だからこそね！

大人が目を離している間とか、みんなが寝ているすきに、落ち葉とか庭に生えてる雑草とかに個性使つて調節したり出来るようにしてきた。

転生特典つて感じなのか、俺は毒を自分の考えた通りに生成出来るつぽい。

なので今日はどうどう俺の我慢も限界だつたから、稽古場へ忍び込んでエンデヴァー

に俺特性の麻痺毒を塗った針を転んだと見せかけて脚に。プスッとやつてやつたんだ。

「おじさん、俺言いたいことある。おじさんに。だから悪いけど個性使わせてもらつた

んだ」

「……何だ？」

「おじさんって本当にヒーローなの？」

「は？」

俺の質問の訳が分からず、間の抜けた声を零すエンデヴァー。

でも俺は言いたいことを言う。そうじやないと轟家は崩壊するから。

だつて嫌じやんそんなの。

俺はそもそも、出来ることならヒロアカの世界でも平和に暮らしたいと思つてた。

まあ誰だつて平和に暮らしたいと思うよな。

でもさ、多分神様かなんかが前世の俺に楽して暮らしてきた分、試練を与えたんだと思う。

だつて俺の両親はナンバー2ヒーロー・エンデヴァーの家、轟家のお抱え医師だから。

原作にそんなのいなかつたのも、俺がこの世界に転生したのも、きつとこういうことなんだと思う。

だつて思いつ切りお家騒動というか、家族問題に思いつ切り巻き込まれる前提じや

ん。

最初はふざけんなよつて思つてたさ。だつて赤ん坊の頃から、あのヒロアカ1、2を争うイケメンである轟焦凍が基本俺の隣にいる状態だつたんだから。
俺たちは同い年。誕生日は俺が5月で、焦凍が1月だから、数ヶ月先に俺が産まれてる。

んで赤ん坊の頃から轟家にはお世話になつてる。

両親は轟家のお抱えとはいつても、地毒病院つていう地域で一番デカい病院の医院長と副医院長だから。

因みに父が内科医でありつつ、その界隈じやトツプレベルの麻酔医。母は外科医でこつちも界隈でトツプレベルの腕を持つてる。

医者つてのはどの世界でも忙しく、俺の両親もそれは同じ。ヒロアカの世界だから怪我人も多いしね。

だから、俺は轟家に預かつてもらつてて、焦凍の母親である冷さんや焦凍の兄弟に面倒を見つめてる。

そして何故か焦凍は俺にべつたりだ。

まあイケメンつてさ、赤ん坊の時だとクソかわいいんだわ。

だからなんていうの？ 弟みたいに構つてたら、めっちゃ懷かれたんだよ。

そんな子、守れるなら守りたいじやん。

「自分の子どもをナンバー1ヒーローにしたいのは分かるよ。ずっとナンバー2だつたのは悔しいだろうし、オールマイトの強さを知つてゐるなら余計にその絶望とか壁の大きさに限界を感じたのも理解する」

でもさ、

「だからって自分の家族を守らないヒーローが、ナンバー1のヒーローを作り出そとかバカげてるんだよ。オールマイトは違うよ。自分の手の届く全てを守れるように強くなつたんだよ？ そんな人に敵う訳がない。自分の家族を平氣で傷付ける人がさ。俺から見れば、しそうちゃんたちや冷母さんを傷付けるエンデヴァーは敵と同じだよ」「貴様に何が分かる!!!!」

めっちゃキレてるー！

そりやあキレるわな。でも俺は言うぞ。エンデヴァーに何を言われたつて！

だつて焦凍……しそうちゃんの笑顔は最高だからな！ 冷さんもめっちゃ優しい、燈矢兄や冬美姉、夏雄兄だつてみんなみんな優しい。

なのに笑わなくなつた。

家族の笑顔を奪うヒーローなんて聞いたことない。

「分かんないよ。俺はエンデヴァーじゃないもん」

「なら——」

「——しようぢやんだつて分かんないよ。というかみんなエンデヴァージやないもん。分かるはずがない。全部家族に押し付けて、自分本意で行動してる。敵だよ。何が違うっていうの？ ヒーローは人々の笑顔を守る職業なんだろ？ 家族の笑顔は奪つていいんだ？」

ふざけんなよ

子どもながらに本気で低い声が出たと思う。

片膝を突いてるエンデヴァアーリーは俺の視線から逃れるように視線を逸らした。
「燈矢兄はサポートアイテムさえ使えばいくらだつて強いヒーローになれる。自分の理想と違うからつて勝手にはしがこ外してんなよ。冬美姉や夏雄兄だつてそうだ。自分の子どもだからつて勝手に評価下すな。なんだよハズレとか。自分がどれだけ偉いと思つてるんだ。自分だつてオールマイティに届かないハズレのくせに、棚に上げて語るなよ。今の地位や、財産とかだつて、全部エンデヴァアーリー一人で得てきた物じやないはずだ。代々受け継がれてきたものだ。こんなことじやエンデヴァアーリーの代で轟家は終わりだよ。それも自分のせいだ。自分のことしか考えてないせいだ！」

それからエンデヴァアーリーは麻痺毒の効果が切れたのか、立ち上がつてきた。
こうなつたら！と依存性のない幻覚を見せる毒をエンデヴァアーリーに浴びせて、しよう

ちやんたちのトラウマを味わわせてやる！

と思ったが、エンデヴァーは何も言わずにその場を去つていった。

「はくくん……」

「手当てしに行こう」

「でも……」

「また守つてやるよ」

「怖くないの？」

「怖いよ。でもしようちやんや他のみんなが傷付いてるの見るのはもつと嫌だ」

俺はそう言つてしまふちやんの手を引いて、冷さんのところへ連れて行つて、手当てした。

両親から手当ての仕方は教わつてたし、前世でも傷の手当てくらいは自分でしてたら。

その後、エンデヴァーは暫く家に帰つて来なかつたけど、帰つて來たと思つたらしうちやんの稽古も、燈矢兄たちにも冷たく当たるようなことはしてこなかつた。

後々分かつたけど、俺の両親にしこたま説教受けて、今後は家族に自分の考えを押し付けないと言つたそう。

俺の父さんはエンデヴァー……炎司さんの幼馴染みで親友なんだと。

9 どうやら今世は忙しくなりそうです。

なんでも『白刃に言われても分からんのなら、お前の家族は全員こつちが預かるぞ!』とまで言つたらしい。

父さんも母さんも前々から注意してたみたいで、子どもにまで言われたと聞かされて我慢の限界突破をしたんだろう。

まあうん。エンデヴァーが悪いよ。

これから頑張つて家族サービスしてくれ。

という訳で、俺はこんな世界で、今世を頑張つて生きていくこうと思つてます。
エンデヴァーサイド

俺は愚か者だ。

前々から親友に言われていたことを聞かず、家族を苦しめてきた。
それを焦凍と同じ、5歳の親友の子どもに現実を叩きつけられた。
愚か者だ。

本当にどうしようもないほどに。

でも親友は、

『分かつたなら、変える。そして態度で家族に示せ。どうせ炎司は言葉足らずなんだか
ら』

と言われた。

正直殴りたくなつたが、事実なので何も返せない。

寧ろ返したところで、また親友の子に『やつぱり敵じやん』と言われるだろう。あの心底俺を蔑むような、哀しい眼で。

家族にこれから俺がすることを見てもらい、許しを請うしか道はない。責任を取るんだ。でなければ、俺は英雄になんてなれないのだから。

焦凍サイド

お父さんが怖い。

お父さんが嫌い。

いつも僕だけを特別に扱つてくるし、他のみんなを無視するから。

どんなに痛いって言つてもやめてくれない。

もう嫌だ。なんでこんなことされないといけないの？ 僕が悪いの？

そんな時、

『おじさん、俺言いたいことある』

はくくんは僕を守つてくれた。

はくくんがお父さんと話してることは全然分からなかつたけど、お父さんは起き上がりつから何日も帰つて来なかつた。

帰つて来たと思つたら痛いことしない。今まで悪かつたつて謝つてくれた。

11 どうやら今世は忙しくなりそうです。

その時も僕ははくくんの後ろに隠れてたけど、はくくんが『良かつたじやん』って笑顔で頭を撫でてくれたから、安心して泣いちゃつた。

それからお父さんはお母さんたちとも少しずつお話しするようになつた。まだはくくんのお家みたいにみんなが笑顔で過ごすことは出来ないけど、前みたいな嫌な感じはしてない。

はくくんが守つてくれたから。

だからはくくんは

「僕の一番のヒーロー」
——かつこいい。

ヒロアカ世界なのにヒロアカ世界と違う。

ヒロアカの世界に転生してから、俺は10歳になつた。

今は冬休み。これまでで色々と分かつたことや発見があつたので、改めて家族のことや自分自身、俺の周りや原作と違う点についてまとめたいと思う。
まず家族。

父親の地毒修作（しゆうさく）。

個性は『毒物を自在に操れる』というもの。

既存の毒物を意のままに扱えるため、その個性を活かして医者の道に進んだ。
例えばマムシに噛まれてもその毒を抜くことが可能。抜く際は水や血液を抜くみたいに注射器を使い、個性を発動させると毒が出てくる。

しかし完全に血液と混ざり合つてしまつたら全てを取り除くことは不可能。
なので基本的には麻酔医として個性を発揮している。

エンデヴァーこと轟炎司と幼馴染みで同じ年。

幼馴染み故に少年時代の炎司さんの恥ずかしいエピソードやら、言葉足らずで周りと

誤解を生むことの多かつた炎司さんのフォロー役だったので、父さんにだけは頭が上がらないらしい。

母親の地毒刃子（やいこ）。旧姓は銳（するど）。

個性は『自身の指先を様々な刃物に変えられる』というもので、医者の道に進んで外科医になった。

自身の指先を刃物に変えられるため、医療ドラマとかの手術シーンにある「メス」「はい」というやり取りをしなくて済むし、刀身の微調整も出来るので手術時間がかなり短縮出来ているとか。

年齢は父さんより2つ年下。

実は両親も炎司さんたちと同じく個性婚。んでもって両家共医師を排出してきた名門らしい。毒にしろ刃物にしろ、使い方次第で敵になることも簡単な個性だからこそ、ヒーローも敵も関係ない医学に活路を見出したんだと思う。

問題だつたのは両親の両親。つまり俺の祖父母が互いの子どもを結婚させて、もし2つの個性を持つ子が産まれれば世界最高の医師に出来る。なんていう野望で結ばれた縁らしい。

しかしそんな祖父母も多忙な医者だったために婚期が遅れ、40手前になつてやつと子どもを授かつた。

そして父さんたちも医者という職業柄結婚は二人が30過ぎてからで、その頃にはもう祖父母は70代後半。

そのため俺が産まれてすぐにどつちの祖父母も他界してしまったため、当初の目的はなくなってしまった。

でも幸いお互い見合いの席で一目惚れしたとかで、夫婦仲は円満だつたという。

そして俺、地毒白刃。

小学校に通うようになつたが、相変わらず俺の隣には基本的にしようくんというイケメンオプションが付いている。まるでモン○ンのオトモアイ○ーみたいに、トイレ以外俺から離れない。仮にトイレでも俺は扉の前にいないと無言の圧力で訴えられるので、いてあげる以外選択肢がない。

そんな俺自身にも色々と変化があつた。

実は俺、ずっと個性は父親の個性から発展した毒生成だと思つてたんだけど、母親の個性も受け継いでいたことが6歳になる頃に分かつた。

個性の発現は4歳までつてのが通例なんだけど、その人が持つ個性によつては発現が遅れて出ることもあるらしい。極めて珍しい例だが、前例はあると父さんが話してくれた。

よつて俺の今の個性は――

毒生成：自身の体液を思い浮かべた通りの毒に出来る

デメリット：加減しないと簡単に人を死なせてしまう

刃物：指先を刃物に変えられ、最大刃渡り15センチまで変えられる

デメリット：変化させた刃が傷つくと戻した指も傷つく

——つてな感じになってる。

父さんや母さんに個性の手解きは受けているので、小学校にいる同世代よりも扱い方は慣れてる感じだ。

しようくんなんかは『2つの個性。俺と一緒に』なんて言つて抱きついてきた。かわいいなこのイケメン。

また学業の方も特に問題ない。所々忘れてしまった部分もあるが、一度は習つたことなので復習として丁度いいし、何なら数学や理科は得意だったのもあつて高校生と同じレベルでも余裕だつた。

唯一問題なのは現代史くらい。だつて俺がいた前世とヒロアカの歴史つてかなり違うからね。

そして俺の容姿は父さんから強く受け継いだらしく、顔は父親譲りのツリ目キリ眉のしようゆ顔で、左目の下にホクロではなく海賊とかのシンボルマークみたいな3ミリくらいのドクロマークがポチッとする。地毒家で強い個性が発現した者に出るらしいあ

る種の後継者の証つぽい。父さんにも同じ物がある。

でも首の左側……左から見て耳から首に視線を下にやると、頸動脈を跨ぐ形で10センチくらいの大きなドクロマークがある。俺の喉元へ向いて口を開けているドクロマークで、口からは鋭利な刃物と毒を表しているような煙を吐いてる。タトウーミたい。

でもこの世界じや珍しいことでもないらしいし、より強い個性の証ということで周りからは凄いなんて言われる。そして無駄に少年やちよつとヤンチャな青年たちの目を引く存在だ。精神年齢高い俺からすれば恥ずかしくて仕方ない。

次に髪の毛は毒々しい紫色で、所々メッシュみたいに母さんの髪色がある。

母さんの髪色はなんていうか難しい。黒つぽいのに銀で……うーん、刀の色つて言えば伝わるかな。いや伝わってくれ。俺自身もどう説明すればいいのか分からん。

髪質は母さん譲りのきめ細やかなストレートヘア。因みに父さんはパーマかよつてくらいかなりの癖つ毛。

髪型は家訓により伸ばしていて、毛先は腰辺りまである。邪魔なので髪紐かヘアクリップで項が見えるように一纏めにしている。

なんでも昔、地毒家は武家だつたらしく、男は子どもでも戦になると戦場へ行くため、髪を伸ばして女の子に見せて跡取りを守っていたそうだ。

もうそんな時代じゃないからやめてもいいだろうに、父さんから『父さんも子どもの頃は長かつたから』と俺の髪を伸ばすことを推し進めた。

いいですよ。俺の次の代から（出来れば）この家訓は消えますんで。そして身長は今のところしようくんとほぼ同じで、俺の方は家事や育児とか手伝つてからそこそこ筋肉もついてる。しようくんも俺の真似をしてお手伝いしてくれるけど、前世の記憶がある分俺は手際がいいから、簡単なことを頼んでるんだ。タオルをたたむとか雨戸を閉めるとか。

それに冬休みになつてからはしようくんと一緒にエンデヴァーから筋トレという稽古をつけられているため、周りの同い年と比べると段違いだ。

次に俺の周りのことや俺がいることによつて生じた（のかもしれない）変化。

7歳の時に妹の黒刃（くろは）が産まれた。

相変わらず母さんも育休は最低限しか取れなかつたので、産休明けは轟家で預かつてもらい、学校から帰つてきた俺が面倒を見ていた。

母親譲りの別嬪さんだからお目々クリクリでめつちやかわいい。あ、目の色は俺も黒刃も同じで母親譲りの刀色。光りの加減で黒や銀に見える。

前世一人っ子だったからめちゃくちや甘やかしてしまったんだよな。かわいいもん。かわいいは正義だ。

その結果、家にいる時は基本俺の背中に張り付いてたり、抱っこしている状態なので、しそうくんが嫉妬して引っ付いてくる。

うん、かわいいに囮まれるって死にそうになるね。マンガのネタだと思つてたけど、実際になつてみると分かつたよ。

今は3歳で舌つ足らずにも『にいた』と呼んでくれるし、抱っこもおんぶも自分からせがんでくる。因みに抱つこの時は『だ!』でおんぶの時は『ぶ!』。

母親譲りの刀色の毛先癖つ毛の髪の毛を俺が毎朝編んだり、結つたりしておめかしするのが日課。

対抗してしそうくんが『俺の髪も弄つていい』なんて言つてきた時は胸を押さえてしまつた。

ほんとに? このかわいいきもの。

そして原作ではオールマイトがオールフォーワンとの死闘を繰り広げて大怪我を負うんだが、そんなことはなかつた。

オールフォーワンはヒーローたちの連合組織で見事に倒されて絶命。

今もオールフォーワンの信者たちが毎日のようくに逮捕されている。
まあニユースではつてだけだから安心はしてないけどね。だつて原作じやあんだけ強かつたんだから、楽観視していけないと思うの。

あと轟家はこの5年でかなり再構築されたと思う。

最初はぎこちなかつたけど、炎司さんはいつも家族のことを考えて行動するようになつたし、燈矢兄に最適なサポートアイテムをスポンサーに開発依頼して稽古を再開。

今18歳で雄英高校3年生で主席だ。それも圧倒的な。

卒業後は現在もインターでお世話になつてゐるエンデヴァー事務所にサイドキックとして正式採用される予定。

でも将来的には自分の事務所を立ち上げたいって言つてた。

冬姉も夏兄も順調に明るい生活を送れでいるし、冷母さんに至つては毎日炎司さんから花束を贈られて幸せそう。

でも俺はしようくんたちを守るために敢えて炎司さんには冷たく当たつてゐる。冷たくと言つても弄る程度だ。だつてあれだけのことをしてきたんだから、俺にそれくらいされても自業自得だと思う。

あ、ちゃんとおじさんつて呼んでるよ。

ちよつと前に炎司さんから『そろそろ炎司おじさんと呼んでくれないか？　冷のよう

に炎司父さんでも……』なんて恥ずかしげもなく言つてきたから、照れ隠しに『天下の元児童虐待DVマンに、父さんと呼べと？』つて豪速球返したら見るからにしょんぼりされた。大型犬がしょんぼりしたみたいで不覚にもかわいいと思つてしまつたのは秘

密だ。

しようくんに至つては天然さは原作通りだが、人当たりはいい方。多少人見知りではあるが、挨拶されれば返すし、ヒーローらしく困つた人がいたら手を差し伸べる王子様系イケメン。

俺の真似をして一人称を『僕』から『俺』にしたが、背伸びしてる感があつてかわいくて心臓に悪い。

またヒーローのエンデヴァーは活動のし方が大きく変わった。

元々事件解決件数はオールマイトを抑えてダントツトップだった上に、態度や雰囲気が優しくなつたとして国民からかなり慕われるようになった。

あれだけ拗れていたのに今はオールマイトと頻繁にチームアップするようになつたし、ファンサービスも増えて、結果的にランキングはオールマイトと僅差の2位でナンバー1も夢じやない。

オールフォーワンの撃破にも大きく貢献している。

ということで今のところ、ヒロアカ世界でも俺の周りは比較的平和だ。

相変わらず敵はいるけど、ヒーローがいるから安心感が大きい。

しようくんに至つては火傷負つてないからイケメンまつしぐらだし、茶毘になるはずの燈矢兄が炎司と仲直りしたので敵になる未来が消えた。

良かつた良かつた。

の、はずなんだけど――

「うつ、ぐすつ、えぐつ」

「どうした？ 怪我したのか？」

――今俺の目の前に血だらけの同い年くらいの女の子がいるんだががががが。

エンデヴァーサイド

思えば白刃くんに言われてから、俺の人生は好転した。

目が合う度に怯えられていた家族たちから、温かく迎え入れられるようになつたし、一度己の執着を取り除いてしまえば、世界はこんなにも温かいものなのだと思い知った。

子どもたちがまだ怯えつつもまだ俺のことを『お父さん』と呼んでくれることが、どれだけ俺の救いになつたか。

あれだけのことをしてたのに妻がまだ『あなた』と出迎えてくれることに、どれだけ感謝したことか。

親友とその奥方にも本当に助けられた。二人には『お前の家族が受けてきた分だ』と思いつきり張り手を食らつたが、耐えた。親友の奥方に至つては今思い返しても脚が震えるくらいに怖かつた。

ええい、震えるな俺の脚！

またヒーロー活動においても切羽詰まつて活動することがなくなり、それ故余裕が生まれたことでいい方へ進んでいる。

前のストイックな俺を惜しむファンもいたが、みんな今の俺を応援してくれている。そしてあれだけ遠く感じていたオールマイトの背中も見えてきた。

しかし実際のところ、もうオールマイトを追い越そうとかはあまり思っていない。自分の家族にしてきた非道。そんなことをする自分がオールマイトを越えられるだなんて思えない。

でもそれでいい。妻や子どもたちの笑顔が戻つたのだからそれで。

だから本当に白刃くんには感謝している。

しかしこまだ彼には許されていない。

親友一家にはとことん弱いんだな、俺は。

でも俺はこれから行動で示していくしかない。

見えてくれ、白刃くん。

そしていつか、私にも妻のように『炎司父さん』と呼んでくれ。

焦凍サイド

白が俺と一緒にで2つの個性を持つてた。

嬉しかった。

髪の毛も一緒に伸ばそうとしたら、止められた。

白が言うには、俺は今ままが一番かっこいいんだって。嬉しい。

白は俺のヒーローだ。

オールマイトよりも好きだ。

白がいたから、俺たち家族はまた家族になれた。

最初は怖かったけど、父さんも俺たちに怯えられるのが怖かったんだと思う。

燈矢兄が雄英でトップなのも、冬姉が母さんと毎日楽しそうに台所で料理してのも、夏兄が自分の夢に向かつて勉強してのも、全部全部白が守つてくれたからだ。冬休みになつてからは父さんに稽古をつけてもらつてる。

父さんが言つたんだ。ヒーローになりたいなら俺に言えつて。

ヒーローになんかなりたくないつて思つてたけど、家族を守りたいしオールマイトがかっこよかつたからヒーローになりたいと思つた。

でもまた痛くて怖いのは嫌だ。

だから白に相談した。

そうしたら白は笑顔で、

『言つたろ。俺が守つてやるつて。俺も一緒にやるよ。そうすればおじさんだつてむ
ちやくちやなことしないだらうし』
つて言つてくれた。

嬉しかつた。

最近、白はいつも家にいる時は俺じやなくて自分の妹の黒刃を構つてる。
ズルい。

だから俺も白にくつつくと、白は困つた顔をして俺の頭を撫でてくれる。
嬉しい。

でも黒刃に足を踏まれる。

痛い。

黒刃より俺の方がずっと白と一緒にいたのに。
ぽつと出のくせに。

でもいいんだ。

稽古中は白と一緒にだから。

圧倒的に俺の方が白と一緒にいる時間は多い。
学校だつて一緒だ。

頑張つてヒーローになつて、今度は俺が守りたい人たちを守るんだ。

世間つて狭いのね。

「うつ、ぐすつ、えぐつ」

俺は図書館に宿題の読書感想文の本を返しに行き、轟家に帰る途中だつた。

当然のように俺の後ろにはしようくんがいる。

そもそも最初に声に気がついたのはしようくんで、まだ昼下りとはいえ敵がいる場合だつてあるから、すぐ逃げられるように注意しながら二人で路地へ入つた。

そして見つけたのは血だらけの女の子。

路地の中心で蹲り、嗚咽しながら、カツターナイフを片手に何かを刺している。

あまりの光景にしようくんは顔面蒼白。対する俺も同じだけど、しようくんのリアクションのお陰で少しだけ落ち着いていられた。

辺りを見る限り敵の気配はない。擬態とかの線も疑つたけど、そもそもここの地域はすこぶる調子がいいエンデヴォーの管轄区域なので犯罪率が日本でもトップレベルで低い。

それでも念の為いつでも個性を発動出来るようにしながら、

「どうした？ 怪我したのか？」

と平静を装つて声をかけてみる。

ピタリと動きを止め、暫くした後、くるりと上半身を俺たちの方へ向けた女の子。「普通つてなんですか？」

ん？ つと訳が分からず小首を傾げてしまう。

しようくんの方を見れば、しようくんも俺と同じだつた。かわいいなくそう。

改めて目の前の女の子に視線を戻す。

女の子は鳥を刺していた。

残酷だ。けれど、明らかにこの女の子は何かしらの問題を抱えているのだろう。

「普通つてのが俺にはよく分からぬけど、取り敢えずその格好をどうにかしよう。君の家はこの辺？」

俺の問いに女の子はただ首を横に振った。

マジかと思つたけど、今の世の中、子を捨てる無責任な親はいる。悲しいけどその子が持つ個性が自分の手に負えないとなると、育児を諦めて施設や協会に置いていく人がいるし、酷い場合は置き去りなんてこともある。理由は経済的とか親子間の問題や家庭事情だつたりと様々で、一概にどちらが悪いとも言い切れないのが厳しい現実。子ども産んだなら責任持てよとも思うが、子どもを産んだからってその人が親になれる訳じや

ない。子どもみたいな大人はいくらでもいてしまうのだから。

俺が先に上げた施設は児童保護施設で、協会は児童保護協会。

どちらも大きなくくりで見れば同じカテゴリだけど、施設は民間団体で協会は公的機関だ。入り易さと数の多さから施設の方が身近で選ばれがちだけど、入り易い分職員の数が足りず、年中アルバイトやパートを募集してて、でもそんなにいい時給ではないので人員確保が厳しいみたい。

一昔前には児童保護施設を装つて人身売買をしていた敵組織がいたくらいだ。今ではそんなことが出来ないように施設という看板を立てる以上、毎日警察が子どもの身の安全のため確認にやってくる。

それでいて施設を設けるにもその施設を運営する側や職員になる人が適切であるか国から厳しい審査を受ける必要があるので、悪質な施設はなくなっているのだとか。協会になると国家公務員試験が必要らしい。

「じゃあ、俺たちと行こう」

このまま置いていくなんてとても出来ないため、俺は手を差し出すと女の子はコクリと頷いて、俺の手を握った。

「あ、でもその前に」

「？」

「どうしたの、白？」

女の子としようくんが首を傾げる中、俺は徐ろに手提げ袋からいつも何かのために入
れてあるビニール袋を2枚取り出して、一枚を広げ、もう一枚はビニール手袋代わりに
して、鳥の死体を片付ける。

「ちゃんと埋葬してあげないとね」

俺が言えばしようくんはコクリと頷き、女の子は不思議そうにしながらも特に何を言
うでもなく、俺の空いている手をまた握つた。

必然的にしようくんは俺と手を繋げなくなつたが、俺の服の袖を掴んでいたので満足
そだつた。

俺は女の子を自分の家に連れてきた。

いつもなら黒刃が待つてから轟家に帰るのだが、こんな状況では帰れない。

「服、脱いで。洗濯するから。その間にお風呂入つて。あれがシャンプーで、その左がリ
ンス。ボディソープはあそこの青いボトル。体洗うタオルはこれ使つて」

「……うん」

「俺としようくんはここにいるから、何かあつたら呼んで」「
分かりました」

女の子はもぞもぞと服を脱ぎ始めた。

慌てて俺はしようくんと共に女の子に背を向け、女の子が浴室に入ったのを音で確認してから、洗面台に水を溜めた。

「しようくん、ぬるま湯にして」

「うん」

しようくんの個性で（本当は蛇口を捻ればすぐにお湯出せるんだけど、頼らないとしようくんが不機嫌になっちゃうから）ぬるま湯になつた水に、女の子の服を浸し、洗剤についてしまつっていた血を生地を痛めないように擦つて落としていく。幸いそんなに時間が経つてなかつたらしく、それはすぐに落ちた。

あとは洗濯機で濯ぎから乾燥までをお願いする。

「しようくん、俺はあの子の着換え持つてくるからここで待つて」

「分かった」

取り敢えず洗濯機が止まるまでは俺の長袖長ズボンを女の子に着てもらうことにしてた。

そして二人を連れて庭に移動し、鳥を庭に掘つた穴に埋め、黙祷する。
再び家の中に戻り、俺は取り敢えず二人に温かいココアを出して、まずは轟家に電話

した。

出たのは冷母さんだったので事情があつて女の子を保護したことを伝えると、父さんに連絡してくれるということでお礼を言つてお願ひしておいた。

電話を終えた俺がやつと女の子に集中すると、

「おい、それは白のだ。汚すなよ」

「ふひつ、いひひ、ごめんなさい、ごめんなさいい」

カオスが広がつていた。

女の子は何故だが余つた俺の長袖の袖口を口に含み幸せそうに笑つていて、それを引つ張りながら注意するしようくん。

「……あのさ」

「はい、ふひひ……」

「遅くなつたけど、俺の名前は地毒白刃。10歳。それでそつちは俺の幼馴染みで轟焦凍。同じ年ね。君の名前を教えてくれ。出来れば歳も」
「…………渡我被身子。12歳です」

「んんんんん?」

「とがひみこ?」

え、あのトガヒミコ?」

よく見れば髪型は違うけど、確かに女の子はトガヒミコだ。

にやけて開いた口から見える鋭く尖った犬歯に、腫れぼつたい目元。黄色い瞳と縦長の瞳孔はまさに本人。原作で見てた通りだ。

「あの……」

「あ、ごめん。年上なんだ。ならタメ口でいいよ。な、しようくん？　あ、俺たちもタメ口でいいかな？」

「しようくんに振ると、しようくんはなんか納得してない面持ちながらも頷いてくれる。

被身子ちゃんもタメ口でいいということで頷きを返してくれた。

「い、いいよ」

「ありがとう。それで、確認ね。被身子ちゃんは帰るお家がないってことであつてる？」

「はい。今日お家から出て来ました。私は普通じやないから」

「……なるほど」

12つてことはまだ殺人犯になる前。ならここで引き止められれば、この子が堂々と日の下で生活出来るようになるつてことか。

「普通じやないってどんなこと？　俺たちに話せる？」

「私、血が好きなんです！」　グチヤグチャのドロドロのボロボロの人人が大好きなんです

！」

「うわお。めっちゃいい笑顔。

「そ、そつか。確かにそれは普通じやないってなつちやうね」「ですよね……」

しょんぼりと項垂れてしまつた被身子ちゃん。

少しでも力になれることはないかと思案しつつ、被身子ちゃんの頭を撫でる。

「あ、あの……？」

「え、あ、ごめん。なんか癖で……」

「なでなで、してください」

「あ、ああ……」

目を細めて気持ち良さそうに頭を撫でられている被身子ちゃん。年相応でかわいい
なんて思つてたら案の定来ましたよ。嫉妬しょくくんが。
な。

「ん！」
「はいはい、しょくくんもな」

「ん♪」

「しょくくん、ちゃんと喋ろうよ……かわいいけれども。

「好きな物を我慢するのって辛いよなあ」

「はい……」

「そういうのが好きなのって被身子ちゃんの個性によるもの？」

「分かりません」

「個性聞いてもいい？　あとタメ口でいいからね？」

「その人の血を舐めると、その人に変身出来ま……出来るよ」

「あ、それでかもね」

原作じゃもう手遅れレベルだったけど、今ならまだ間に合うと思う。というか思った
い。あの壊れ具合は個人的にマンガのキャラとしては好きだつたけど、現実になると話
は別だ。なんとかしてあげたい。

後に敵になつたり、連続殺人犯になつたりするのは悲し過ぎるもんな。

「じゃあ、好きな物見つけようよ」

「好きな物を見つける？」

「うん。血とかじやない、別の好きな物。血が好きなのは個人の自由だからとやかく言
えないけど、それだけだと友達と会話続かないかもしれないから、他に好きな物見つけ
よう。例えば、俺は料理が好き」

「お料理？」

「うん」

「白の料理は美味しいんだ。特にオムレツ！」

「ようくんは目をキラキラさせて言うと、オムレツを思い出したのかお腹がくうと鳴る。」

「原作同様ざる蕎麦が好物だが、俺の料理も好物で特にオムレツがお気に召したようだ。」

「お腹減った……」

「そういうやなんだかんだもう夕方だもんな」

「色々やつてて時間はあつという間に過ぎていた。」

「洗濯機もとつくな止まっている。」

「被身子ちゃん、服乾いたから着替えよう」

「え」

「被身子ちゃんは小さく声をあげた。」

「心なしか残念がつてるように見える。」

「……その服気に入つた？」

「うん。いい匂いする♪ きつとあなたの匂いだから♪」

「わあ、いい笑顔。でも原作じや惚れっぽい性格だしその通りなんだろうな。」

「ん、じゃあそれあげるよ」

「ホント!?」

「うん。だけど、下着はちゃんと履いて」

「わかりましたーー！」

ドタドタと洗面所へ走つていく被身子ちゃん。

凄いな。もう俺ん家の間取り把握したのか。

しようくんはなんか被身子ちゃんが向かつた方をマジマジと見てるけど、うん、俺は
気にしないぞ。

それから下着を履いてきたであろう被身子ちゃんが戻つてきたので、ココアを飲み干
し、コップを洗い、今度はみんなで轟家へと向かつた。

「あなたが焦凍たちが連れてきた子ね？」

「俺は焦凍の兄で夏雄。よろしく！」

「よ、よろしくお願ひします……」

玄関で出迎えてくれた二人に、被身子ちゃんは俺の背中に隠れながらも挨拶を返す。
二人共優しいからね。大丈夫だよ。

ただ問題は、

「…………」

被身子ちゃんを見つめたまま何も言わない我が愛しい妹、黒刃だ。

でも仕方ない。自分で言うのもアレだけど、黒刃はお兄ちゃん子だ。

そして今、被身子ちゃんは俺の服を着ていて、俺が知らない女の子を連れてきたのだ

から戸惑うのも当然だろう。

俺は内心肩をすくめながら、

「黒刃、挨拶は？」

と言えば、不服そうにしながらも「ちや」と挨拶した。

すると夏兄の腕からスルスルと降りて、俺に「にいた、だ！」と抱っこをせがんでくる。

核兵器級のかわいさよ。マジで。

俺は即時抱っこを執行する。

「この子、白刃くんと同じ匂いがする」

「妹だからな。世界一かわいい、俺の妹」

頬と頬を付けながら被身子ちゃんに黒刃を紹介すると、黒刃は恥ずかしそうにしながらも、嬉しさが勝つてくしやりと破顔した。

「……かあいいねえ♪」

「だろ？ 僕の妹は世界一だ！」

「うんうん！ かあいい、かあいいねえ！」

やはりかわいいは世界共通なんだな。誇らしいぞ、我が妹よ。それに俺は同担バツチコイだ。

一方、

「ん！ ん！ ん！」

しようくんが語彙力をなくして自分のことを指さしながら『俺は!? ねえ、俺は!?!』と求めてくる。

「しようくんは世界一かつこいいぞ！」

「むふん♪」

俺の言葉に満足したのか、しようくんは鼻の穴を膨らませて胸を張り、俺の背中に抱きついた。

当然、それが気に入らない黒刃が「め！」と叫びながら、しようくんの頭をどかそようと小さい手でしようくんを押すが、しようくんは一步も退かない。

「かあいいねえ……みんなかあいい～！」

「白刃くんは相変わらず人を惹き付けるわね」

「実は人たらしの個性もあるのかもな♪」

夏兄、そんなこと言つてないでしようくんどかしてくれ。

俺は三人に引っ付かれながら、冷母さんに「取り敢えず中へいきましょう」と言われて、居間へ向かつた。

焦凍サイド

白がまた一人救つた。

小学校に通うようになつてから、色んな人と出会う。

白は気がつくと弱い人の味方になつてる。
かつこいい。

流石俺のヒーローだ。

みんな何かしら個性を持つてるのが当たり前な世の中でも、個性を持たない無個性の人
がいる。

そういう人は周りから浮いたりするけど、白はそんなの関係なく話しかけるし、困つ
てたら助ける。

今日だつてそうだ。

俺は怖かつたのに、白は相変わらず落ち着いてて、声をかけて、優しく手を差し伸べ
たんだから。

知らない子なのに。そんなのお構いなしに。

被身子つて女の子は自分の個性や趣向で悩んでたみたい。

俺にはそういうの分からぬけど、血が好きつてのが変わつてるのは俺だつて分かる。

でも白は被身子のそういうところを「普通じやない」と言いながらも、否定はしなかつた。

優しい。

何か考えながら被身子の頭を撫でてる。

ズルい。

俺もつて頭を白に向けたら撫でてくれた。
優しい。

そのあとで白は他の好きな物を探そうつて提案した。

やつぱり白はヒーローだ。

俺ならどうしたらいいか分からなくて何も提案出来なかつた。

白の料理は好きだ。

俺は和菓子が好きだけど、白の作るクッキーとか蒸しケーキとかホットケーキとか大好きだ。

特にオムレツは最高だ。

何も入つてないのも美味しいけど、納豆を入れてたり、チーズが入つてたり、色んなのがある。

お腹空いた……。

白のことだから、このあときつと何か作ってくれる。

白は俺のヒーローだから。

被身子サイド

私は普通じやない。

いつも周りから変な目で見られてた。

普通つてなんですか？

普通だと愛してもらえて、普通じやないから私は愛してもらえないんですか？

お母さんが家に全然帰つて来なくなつて、もういいやつて思つて朝から宛もなく彷徨つてたら、鳥の死骸を見つけて、血が見れるから嬉しくて、持つてきたカツターナイフでザクザクした。

血が見れて嬉しいのに、満たされなくて悲しくて、気がついたら私は泣いてた。

そんな私に声をかけて、手を差し伸べてくれた人。

思わず見惚れてしまうくらい、毒々しい紫色の髪にナイフが散りばめたような黒っぽい銀色の髪。

私が持つてゐるカツターナイフみたいな綺麗な目。

目の下と首に見えてゐる骸骨の模様。

かつこいい。つて思つた。

手を握つたら、バチバチつて電気が走つた。

この子の個性なのかなつて思つたけど、もう一人の子はなんともなさそだから違うんだろう。

じやあこのバチバチは何？

訳も分からず、手を差し伸べてくれた子のお家に案内されて、お風呂貸してもらつて、その子のお洋服を借りた。

袖を通した瞬間、分かつた。

この子は私の運命の人だつて。

まるで彼に全身を抱きしめられてゐみたいで、とつても幸せな気持ちになれる。なんか紅白帽子みたいな頭をした子が何か言つてくるけど、どうでもいい。私はやつと自分の幸せを見つけたの。

これから末永くよろしくね——

地毒白刃様♡

——私の運命の人（ヒーロー）。

被身子ちゃんをなんとかしよう。

慣れ親しんだ轟家の居間で少し落ち着いた後、冬姉も帰ってきたので一緒になつて晩飯の用意をするのにキッチンにやつてきた。

当然のようにしようくんも俺の隣にいるが、被身子ちゃんも反対側にいる。

何？ この二人？ いつの間にポジション決めたの？

ともかく黒刃は夏兄に任せ、俺は俺でしようくんからのリクエストでオムレツを作れる。

俺が料理するのも珍しくないので、キッチンには俺のためにお立ち台まで置いてくれているくらいだ。

それでもまだ火を使う時は冷母さんか冬姉、夏兄の立ち会いが必要。

「いつも食材使わせてもらつてすみません」

「気にしなくていいのよ。白刃くんは焦凍のお兄ちゃんみたいなもので、私たちの家族も同然なんだから」

「ありがとうございます。卵貰いますね」

俺の言葉に冷母さんは「どうぞ」と言つてくれたので、冷蔵庫から卵を一パツク取る。

前世は一人暮らしだつたので一回で一パツクを使うのに未だ抵抗があるけど、一パツク使わないと圧倒的に足りなくてオムレツの取り合い戦争が勃発する。

パツクを開ければ、しようくんが何も言わずともボウルを持つて待機してくれていた。ほんといちいち行動がわんこみみたいでかわいいんだよな、このイケメン。

「そのまま持つててね、しようくん」

「任せろ」

「はい、かわいい。」

しようくんが持つてくれているボウルに俺は卵を割つて落としていく。

全部入れたら塩と牛乳を加えて一先ず溶き卵にしていった。

あとは、

「冷母さん、賞味期限が切れそうな食材何がある?」

「オムレツの中身だ。」

冷母さんは「ちよつと待つてね」と言つて冷蔵庫の中を確認。

すると余つていた鳥挽き肉を出してくれた。

俺はお礼を言つてそれを受け取り、耐熱ボウルに挽き肉を移して電子レンジで加熱す

る。

こうすれば生焼け防止になるからだ。
レンジから挽き肉を取り出して、しようくんが持つてボウルに移し入れて、塊を崩すようにかき混ぜる。

「ねえ、かき混ぜるの私やりたい」

そこで被身子ちゃんが興味を持つたので交代。

グチャグチャとかき混ぜる被身子ちゃんは心なしかとてもいい笑顔だ。

「被身子ちゃん、もういいよ」

「分かつた！ お料理つて楽しいね！」

「そりや良かつた」

いい笑顔だ。思わず被身子ちゃんの頭を撫でる。待ってしようくん。無言で『俺もお手伝いした』って目で訴えて頭を寄せてこないで。撫でます。撫でますから。

「しようくんもありがとう」

「むふん♪」

「じゃあ俺は焼くから、しようくんと被身子ちゃんは居間でお茶碗とか出しどいて」

「分かつた」

「はい！」

「焦凍、被身子ちゃんのお茶碗は取り敢えずお客様用のを使つてね。夏雄が知つてゐるから」

「分かつた」

◇
そして俺は冬姉の立ち会いの元、オムレツを慣れた手付きで上手に焼きましたー。

料理を居間に運んでいると、ガラガラと玄関が開く音がする。

ただいまとんばんはの声がすることから、轟家の家主と燈矢兄。そして俺の両親だろう。

その証拠に黒刃がとてとてとお出迎えしにいつた。

「おかりーー！」

まだちゃんと「おかえり」って言えないけど、かわいさは天下一品だ。

「黒刃ちゃん、ただいまー♪」

「黒刃ー！　ただいま！　お父さんだぞー！」

「ただいま、私たちのかわいい黒刃♪」

黒刃のお出迎えに喜ぶ両親と燈矢兄。炎司さんも黒刃の可愛さにやられて微笑んでることだろう。睨んでたら殴る。

それから被身子ちゃんをみんなに紹介し、晩飯を終えてから、炎司さんの書斎に俺と

被身子ちゃんは呼ばれた。当然のようにしようくんも付いてきたが、炎司さんは特に何も言わない。

「さて、改めて自己紹介しよう。俺は轟炎司。焦凍たちの父で、エンデヴァーというヒーロー名でヒーロー活動をしている」

「私は白刃と黒刃の父で、地毒修作だよ。医者をしている」

「……渡我被身子です」

二人の大人を前に被身子ちゃんは俺の背に隠れつつも、自分の名前を告げた。
俺は被身子ちゃんを安心させるように頭を撫でてやる。

「急に大人に呼び出されたら不安だよね？　ごめんね。でも怖いことはしないから安心してほしい。私たちの質問に答えられる範囲で答えてほしいんだ」

父さんが優しい声色で被身子ちゃんに語りかけると、被身子ちゃんの表情が少し和らいだ。流石小児科も受け持つ医者だ。

それから父さんは被身子ちゃんに様々な質問をし、手帳にその答えを書いていく。

両親の名前、年齢、職業。通っている小学校の名前と通っていた期間。そして個性。「ふむ。随分と遠くから来たんだね。疲れたでしよう」

「いいえ」

「ではこれが最後の質問ね。お家に帰りたいかい？」

「いいえ」

迷いなく返した被身子ちゃんは俺の服の裾をギュッと握りしめる。

それを見た父さんは柔らかく微笑んだ。

「分かった。じゃあ取り敢えず、暫くは私の家にいなさい。今は白刃たちも冬休みだからね。その間に今後のことを私と決めよう」

「いいんですか？」

「子どもをこんな遅い時間に追い出すほど、私は外道ではないから安心してほしい。それに私は自分の病院の敷地内に君のような子を守るために児童保護施設を経営しているからね」

「父さん、そんなことしてたんだ」

「ああ、白刃には話してなかつたね。白刃が産まれる前からやつてるんだ。因みに炎司は出資者で、季節ごとのイベント事にはエンデヴナーとして子どもたちにサービスしてくれているよ」

「自分の家族にはあんなことしてたのに、他所様の子どもたちには優しいヒーロー出来るんだ？」

「やめてくれ白刃くん。俺のメンタルをえぐりにこないでくれ」「いいそもそもつと言つてやれ白刃。父が許す。忘れないように少量の毒でジワジワと攻め

るようになつてやらないとな」

「修作！」

するようになつてやらないとな」
すがるように父さんの名前を叫ぶ炎司さん。

しようくんめつちや笑うやん。ええで、最高やでイケメンショタの笑顔は。

「こほん。とにかく、被身子ちゃんは何も心配せずに今は取り敢えず自分のことを大切にしなさい。大人のことは大人に任せて、ね？」

父さんが被身子ちゃんの近くまでやつてきて同じ目線になつて言うと、被身子ちゃんは泣きながら何度も何度も頷いて返した。

それだけ今まで周りから優しくされることがなかつたんだと思う。

「さ、子どもはもう寝る時間だよ」

「事情が事情なだけに遅くまですまなかつた。今晚は泊まつて行きなさい。焦凍、お前の部屋には既に白刃くんの布団はあるが、被身子ちゃんのがないから、お母さんに言って出してもらえ」

「分かつた」

◇

それから俺としようくんは冷母さんに伝えて、布団を出してもらい、一緒にしようくの部屋まで運んだ。

そして俺としようくんがお風呂に入つてゐる間、被身子ちゃんはまだまだ寝る気配のない黒刃や母さんたちと一緒にいてもらい、俺たちが出たあとで冬姉が被身子ちゃんをお風呂に入してくれた。

今日は色んなことがあつたから疲れたな。
早く寝よう。

因みに俺が泊まるということは黒刃も泊まる。

「くう……くう……にいたあ……」

「癒やされる。俺の妹マジ天使」

「白、俺は？」

「しようくんは俺のヒーロー」

「むふん♪」

「かあいい♪」

「俺を真ん中にして右にいつものオプションしようくん。同じ布団のすぐ左に黒刃で、
その隣に被身子ちゃん。」

「まさか父さんが児童保護施設運営してるとは思わなかつたな」
「その児童なんとかつてどんな施設なんだ、白刃？」

「被身子ちゃんに悪いけど、親に育児放棄されちゃつた子たちを保護するところだよ。」

子どもが一人で生活するのは難しいし、敵に捕まつたりしたら大変だからね」「じゃあ被身子ちゃんはそこに行くのか？」

「……多分」

「私、もう白刃様に会えなくなるの？」

「いやいや、そんなことないと思うよ。そんな収容所みたいな施設じゃないから、安心して」

顔面蒼白の被身子ちゃんに俺がそう言えば、被身子ちゃんはほつとしたように息を吐いた。

暗い雰囲気を紛らわせるため、俺は明日あれしようこれしようと色々な案を出していくと、二人は楽しそうに頷きながら寝落ちしたので、俺も眠りにつくのだつた。

エンデヴァーサイド

渡我被身子ちゃんという育児放棄された少女を焦凍たちが連れてきて数日。

まだ親の庇護下にいなくてはいけない少女を疑うようで気が引けるが、ヒーローとして敵が送り込んできた構成員または擬態か操られている可能性を入れて冷や燈矢と共に見守っていた。

しかし敵らしい素振りも、怪しい動きも見せないのでホツと一安心だ。

少しばかり変わった趣味趣向を除けば、コミュニケーション能力もあるし、既に俺の

家族たちに溶け込んでいる。人見知りの気もあるにはあるが、それは焦凍や妻も同じだし許容範囲内だろう。少々白刃くんを焦凍と取り合うものの、その姿は年相応だ。

「うちの弁護士が被身子ちゃんの親と接触し、こちらが踏むべき手続きは終わつた。あとはどうするつもりだ？」施設に預けるのか？ それともお前か俺が里親にでもなるのか？ 僕はどちらでも構わん」

被身子ちゃんの件で大人のやるべきことは終わつた。

あとは親権を施設にするか、轟家や地毒家にするか、はたまた信頼出来る家に持ち掛けれるか。

ちようど所属ヒーローたちの健康診断でうちの事務所に来ている親友へ問うと、親友は少し悩む仕草をする。

昔から何か考える時は必ずする顎を擦る癖。

しかしその癖をする時は決まって何かを企んでいる時が多いため、俺は思わず身構えてしまつた。

「明日、施設でクリスマスパーティーするよね？」

「そうだな」

「オールマイト呼ぶんだよね？」

「頼んだら快く引き受けてくれた」

「ならそのパーティーに被身子ちゃんも参加させてみるのはどうだ？」勿論、お前とのこの子どもたちも都合がつくなら参加させれば、被身子ちゃんも安心だろう。白刃も参加させる。それで施設に馴染めそうなら、本人に最終確認をしてから話を進めよう。

「分かつた。しかし冬美と夏雄は友人たちとのパーティーがあると冷から聞いている。燈矢は夜になれば上がるから、燈矢は参加出来るだろう」

「そうか。なら私があとは引き受けよう」

「すまないな。俺も仕事が終わればすぐに向かう」

「ナンバー1とナンバー2が一箇所に集まるだなんて、子どもたちも喜ぶだろうよ」

「あの男には敵わんさ」

昔より大分若い層からの支持が増えたといつても、まだ奴に敵う気がしない。

弱気になつてているとかではなく、現実を受け止めることが出来ているからこそのだ。

「なあに気にすることはないだろう。白刃なんか普段はお前にあんな態度を取つてはいるけど、筆入れはエンデヴァーのを使つてるぞ？ 小学校に上がつて最初に買ってほしいって言われたのはエンデヴァーの筆箱だつたしな」

「そ、そうなの!? 何故もつと早く言わない!? 言つてくれれば——」

「——全部お前の写真付き文房具で一式揃えて持つてくるだろ？ 白刃は好きな物ほど

その一つを大切に使う性格なんだ。全部が全部お前になると流石に嫌がられるぞ。
何の嫌がらせだつて

「うぐつ」

確かに言われてみればそうだ。俺はいつも良かれと思つて一番大切な相手に確認を入れるのを忘れて、行動してしまつ。だから親友も敢えて俺には伝えなかつたんだろう。流石だ。

「大丈夫。お前はお前が思つてるよりも白刃に嫌われてない。寧ろ応援されてる。オーラマイドと僅差だつたのを見て、俺よりも悔しがつてたぞ？」

「そ、そ、そ、う、か……」

「その顔やめなよ。笑うか照れるかどつちかにしてくれ、暑苦しい」

「元々こんな顔だ」

「そうだな。私じやなきや喜んでいる顔だと分からない、分かりにくいや顔をしてる」

「……うるさい。黒刃ちゃんには怯えられたことはないぞ」

「黒刃は熊さんが好きだからな」

「そろそろ本気で火炙りにしてもいいか？」

「私の身に何かあれば、刃子と白刃を敵に回すがいいか？」

「……」いつ！』

「ははは、ナンバー2ヒーローのこんな顔を見れるなんて、いいポジションを持ったな私は♪」

「本当にいい性格をしているな、お前は」

だが、だからこそお前とは親友になれたのだと思う。

それから俺たちはそのまま少し明日のクリスマスパーティーの打ち合わせをして、解散した。

家に戻る前に事務員に言つて俺をモデルにしたぬいぐるみを白刃くんと黒刃ちゃんの手土産にしよう。

色々踏まえて進路を決めよう。

あれから俺は平和な日々を（じょうくん、被身子ちゃん、黒刃に揉みくちやにされながら）過ごしてきた。

今は6月で、俺とじょくくん、被身子ちゃんは中学3年生になつて、俺は晴れて15歳になつた。

なので一旦状況を整理しようと思う。

まずようやく分かつたのが、俺が転生したヒロアカ世界が、俺が原作で知つてたヒロアカ世界と全くの別ルートにあるということ。

そもそも原作ではヒーローが飽和状態になつていて、活躍の場を取り合うという本末転倒なことが解消されている。

大きいのはオールマイトがオールフォーワンを本当の意味で倒し、それによりオールフォーワン側に寝返つっていたヒーローたちがごつそりと逮捕されたことが大きい。

また公安がお抱えの直属ヒーローの数を大幅に増やし、今後そんな邪な思いで動くヒーローを監視することになつたので公安のスカウトに応じたヒーローも多かつた。

給料がいいらしい。

これによつてオールマイトたちのようなヒーローたちの数が激減して治安悪化が懸念されたものの、代わりに警察が人員を全国各地に派遣。

警察官たちも常日頃から敵に対しての捕縛術や対策アイテムの適切な使い方を訓練していたので、往生際悪く暴れる敵を無力化することに成功したのだ。

また地域ごとに自警団も設立し、警察と連携し、訓練してその練度を上げたことで人々は安心した。

因みに自警団はこれまで警察や公安と敵対していた指定暴力団とされる組織が名を変えたもの。

政府も国の危機を乗り越えるため、思い切つて過去のことは水に流し、現段階で違法行為をしていい暴力団限定で手を結んだそうだ。

暴力団の方も暴力団員というだけで肩身の狭い思いをしながら続けるのにも限界があつたし、国が動けない時に陰ながら地域住民たちを手助けしたのもあつて国と手を結ぶことにしたみたい。

手を結んだばかりの頃は互いに歪み合つてしまつていたが、日本がめちゃくちやになれば自分たちも生きてはいけないと考えを改めて少しずつ連携をしていった。

今のように互いを尊重し、歪み合うことなく事がスムーズに運べるようになつたの

は、闇組織を大きくまとめていた死穢八斎會が先頭に立つて国と足並みを揃えたのが大きい。

原作では主人公たちの障害として登場したのだが、原作で寝たきりだつた組長を俺の父さんと母さんが治療したことでの組は一大勢力を維持し続けることが出来たそうだ。父さんや母さんにとつて、ヤクザであれ誰であれ患者を救うのが医者なのだ。

オーバーホールこと治崎廻は組長を助けてくれた恩を返すため、父さんの児童保護施設を真似て育児放棄された子どもたちを保護する活動を始めたそう。

相変わらず潔癖症ではあるが原作ほど酷いものではなく、組長の影響を受けて仁義を重んじる青年になつているのだとか。

よつてヒーローは減つたものの、日本は平和で様々な組織が新たに手を組んでその平和をオールマイトたちヒーローと一緒に守つているのだ。

オールマイトもオールフオーワンとの鬭いで怪我はしたが、原作にあつたような致命的な怪我をしていいから元気そのもの。入院こそしたが、入院中も元気にインタビューを受けている場面がテレビで何度も放送されていた。

ただワンフォーオールがどうなつてているのかは分からぬ。こればかりは確認のしようがないから。

次に俺の周りの状況。

まず渡我被身子ちゃんは俺たちの冬休みが終わつたと同時に、父さんが運営する児童保護施設に入つた。

でも小学校の授業をほぼ受けていなかつたので、俺や焦凍が中学生になるまでは施設で初等部教育を受け、俺たちと同じ学年で同じ中学校へ通うようになつた。

被身子ちゃんを施設に入れるかどうかの前に、一緒に施設のクリスマスパーティーに参加したんだけど、その時にみんな被身子ちゃんが変わつた趣味趣向を持つても引かなかつたし、普通に接してくれたのが大きかつたみたい。

被身子ちゃんのことはそれで良かつたんだけど、その時一番驚いたのはヒーロー殺しステインである赤黒血染と敵連合のトップになる死柄木弔こと志村転弧や原作で連合に入つていた重要キャラたちがいたことである。

赤黒血染は『ヒーロー観の根本的腐敗』で絶望し、私立のヒーロー科高校を中退。

そのあとに『英雄回帰』を訴えているところに、俺の父さんが「子どもたちのヒーローになつてみないか?」と声をかけたことで、心理カウンセラーになつたんだつて。

そんな血染が心理カウンセラーになつて少しした頃に連れてきたのが死柄木弔こと志村転弧だつた。

ヒーローに憧れる転弧に対し、父弧太朗はヒーローを否定し、そんな中自分に個性が発現しない現実。

そして姉である華からの裏切りというのもあつて家から飛び出し、泣いてたところを血染が声をかけた。

それによつて施設に入つた転弧は俺の父さんから「無個性でもヒーローになれるさ」と希望をもらい、元ヒーロー科であつた血染からの手解きを受けて強靭な身体能力を得て、雄英高校初となる無個性合格者にして主席卒業生となり、無個性初のヒーローとなつた。

因みに元の家族とは決別しているそう。

トウワイスこと分倍河原仁に至つては両親を敵犯罪で亡くした際にこの施設にきたそうで、高校を卒業してからは施設の職員として働いている。

話した感じ原作みたいな支離滅裂な感じではなく、個性を使つて施設で壊れた玩具や道具とかを複製してくれてるので、いつも子どもたちに頼られていて幸せそうだつた。他にも催し物のひとつであるマジックショーで出て来たのが、敵連合にいるMr.コンプレスだつたりして本当に開いた口が塞がらなかつた。

というか、本当に父さんとこの施設、原作で敵墮ちしたキャラ救い過ぎな件。だからこそ俺つていうイレギュラーがあるのかなとも思つた。

そして次に轟家。

あの頃の殺伐とした空気はすっかり消え、家庭円満だ。

冷母さんは編み物という趣味に目覚めて楽しんでいるし、燈矢兄はエンデヴァーのサイドキックとして活躍中。

冬姉は大学4年生で小学校教諭になるために頑張つて来年卒業を控えているし、夏兄に至つては燈矢兄の代わりに轟家の家業を継ぐために今は地元の高校に通つて今年大学受験を控えている。志望しているのは東京の経済学部か経営学部なんだって。

という訳で、原作とは全く違う方向へ進んでる。

俺に至つてはしようくんの稽古に付き合つたりしたし、エンデヴァー事務所にあるトレーニングルームで他のヒーローたちに色々教わつたお陰もあって、俺としようくんは個性の扱い方が大人顔負けの実力を身につけた。これにはエンデヴァーからも太鼓判を押してもらつていて。

被身子ちゃんも施設に移つたとはいつても、定期的に轟家にやつてきてエンデヴァーから護身術を教わつたりしてた。

そして今俺は、

「白、冗談か？ いつもの冗談なんだよな？」

「なんでそんな深刻そうなの？ そんなの白刃様の自由なんだから、焦凍には関係ないでしょ」

「被身子、黙つてくれ。これは俺と白の問題だ」

お昼休みに学校の屋上でしようくんに問い合わせられています。

俺らの仲を知らない人がこの状況を見れば、俺が被身子ちゃんをしようくんから奪つたとか、被身子ちゃんがしようくんを捨てて俺とくついたみたいな修羅場に見えるだろう。

だつて俺が座つてる左隣には俺の腕にしがみついてる被身子ちゃんがいて、右隣にはこの世の終わりみたいな顔をしてるしようくんがいるんだから。きつかけはほんの少し前のこと――

給食を食べ終えた俺は、いつものように昼休みは屋上で日光浴をしていた。
当然、しようくんと被身子ちゃんも一緒。

そして話題は今日担任の先生から渡された進路希望書のこと。

「白、進路希望の欄に何て書いた？ 俺、雄英以外考えてなくて……」

「しようくんはヒーロー科だよな？ なら第二、第三は適当にサポート科とか普通科あたり書いときやいいんじやない？」

「お、そうか。ならそうするか」

「うんうん、そうしどきな。しようくんなら推薦とかも簡単に取れるだろうし」

「んな簡単に言うなよ。うちの中学推薦枠1つしかねえんだぞ？俺、白に勝てる気しねえ」

「なんで？俺雄英行く気ないんだが？」

「…………は？」

という訳で今に至る。

だつてそうじやん。

被身子ちゃんは敵になつてないし、原作で敵になるようなキャラはみんな幸せルート一直線。

なら別に俺が雄英行かなくてもいいと思うんだよね。

確かに原作キャラを生で見てみたいとは思うけど、あんな鬼畜カリキュラムがデフォの高校なんて行きたくない。

俺は平凡な普通科高校に通つて、前世ではしようとも思えなかつたアルバイトして、両親や黒刃に自分で働いて得た金で何かしてやりたいんだ。

「冗談も何も、端から雄英行く気なんて全くないよ、俺」

「じゃあ、なんであんなに父さんの稽古一緒にやつてきたんだよ？」

「自分の個性上手く扱えて損はないだろ？俺の個性は間違えると簡単に人を死なせちまう危ない個性だし。それに俺はおじさんが暴走しないか見張つてたつてのもある」

「…………やだ」

「わっつ？」

「白と別々の高校行くとか絶対にやだ」

やだつて……駄々つ子かよ！

「いやいや、大人になつたら嫌でも別々の道進むんだから」

「俺は白のサイドキックになるのが夢なのに……」

「え、何それ初耳なんだが？」

「今初めて思いついたからな」

「やめて……だからそもそも俺はヒーローになる気ないって」

「じゃあ俺がサイドキックにスカウトすれば……」

「しうくん、俺の話聞こてる？」

そもそもなんでしうくんにとつて俺と離れるっていう事が頭にないのさ。君頭いいはずよ？

「私は白刃様がいるところに行くから心配しなくていいよー！」

「被身子ちゃんはそうだろうね……」

「うん♡」

犬みたいに俺の胸板に顔を押しつけてすーはーしてる被身子ちゃん。

被身子ちゃんも被身子ちゃんで大分まともになつたけど、俺がいる前提なんだよな。血以外の趣味が料理になつたらしく、中学では調理部入つて何を作つても必ず俺のとこに持つてくるし……。

「白の夢つてなんだ？」

「俺の夢？」

「ああ。いつも白は俺のヒーローになりたいっていう夢を応援してくれる。でも今更気がついた。俺、ずっと白と一緒にいたのに、白の夢知らねえつて……だから教えてくれ」「俺の夢、ね……」

言われてみれば自分の夢なんて全く考えてなかつた。
前世でもこれと言つて何か夢があつたとかじやない。

今の夢を強いて言えば――

「みんなの幸せな姿を見ること、かな」

――だな。クサイというか、キザというか……むず痒くなる台詞だけど、これは俺の本心に変わりない。

両親が隠居する際には両親が安心して隠居出来るような人間になりたいし、黒刃も（めつちや嫌だけど）素敵な花嫁さんになつてほしいし、しようくんや被身子ちゃん、関わってる人たちが笑顔でいられるように見守ることが一番の夢だ。

「白……」

「白刃様……♡」

「え、ちよ、何？ 何何何？ 急に二人して抱きついてこないでくれよ」

「やつぱ、白はヒーローになるべきだ」

「私、もう既に幸せだけど、もつともつと白刃様と一緒にいてもつともつともつと幸せになるね♡」

「いつぺんに言われても困るつつーの！」

二人の肩を少々強めに押す。しようくんは「悪い」と退いてくれたが、被身子ちゃんは相変わらずだ。

「白、俺とヒーローになろう」

「どして？」

「じやなきや白の夢、叶わねえ」

「いや、そんな間近で見ていたい訳じや……」

「俺が見ていてほしいんだ」

「しょうくん……」

「俺は昔から白からもらつてばつかだ。恩返ししたいのに、次から次へと白は俺を救つてくれるヒーローなんだ」

「…………」

「俺が幸せになるとこ、その目でちゃんと見てくれ」

「…………分かつた」

「つ！ 本当だな？ じゃあ絶対ヒーロー科だからな！ 俺は推薦なんて受けない！ 一緒に一般入試受けに行つて、一緒に合格しような！ 約束だ！」

「え」

「なら私もヒーロー科行くう ズッと一緒だよ、白刃様あ」

「えー!?」

こうして俺は半ば絆された感じで進路が決まった。

でもしうくんや被身子ちゃんの幸せな姿を見るなら、俺も努力しないといけない。

ヒーローになりたいって気持ちが俺にはまだまだ足りないけど、ヒーロー科に行くなら覚悟を決めよう。

焦凍サイド

白からヒーローになる気がないって言われた時、俺はショックだつた。

それと同時になんでだよって思った。

子どもの頃からいつも白はヒーローだったのに、俺が今まで見てきて一番ヒーローになつてほしい人間なのに。

今まで一緒に父さんの厳しい稽古をしてきて、父さんだつて白がヒーローになるのを期待してゐるんだ。母さんだつて、燈矢兄も冬姉も夏兄も。

白はそれだけ多くの人を救つてきたヒーローなんだ。
なつてくれなきや困る。

俺らが別々の道を行く?

有り得ねえ。

物心ついた頃から、白は俺のヒーローで、俺たち家族のヒーローで、被身子にとつてもヒーロー。

ほら、どう考えたつてヒーローになるしかねえじやねえか。
ただ、白はどこまでも周りを優先する。

初めて聞いた白の夢。

なんだよ、『俺たちの幸せな姿を見ること』つて。

これ以上俺たちを幸せにしてどうすんだよ。

だつたら責任取つてもらわねえと割に合わねえ。

俺たちが幸せなら、白も幸せなんだ。
見せてやるよ。

一緒に雄英通つて、一緒にヒーローになつて、一緒に闘つて、俺のすぐ隣で、俺が幸
せに笑つてること。

そうすれば俺だって白の本当のヒーローになれるから。

雄英高校受験に行きました。

進路が決まつてから、俺はしようくんたちと雄英高校の受験に向けて忙しくも穏やかな日々を過ごした。

「じゃあ、行くか！」

「おう」

「はい♪」

そして今日は雄英高校の入試試験に挑む。

緑谷くんとか爆豪くんとか麗日ちゃんとか原作に出てきたキャラに会えるかな♪
なーんて思つてる半面、実技試験がガチで怖い。

雄英側から既に受験者へは諸注意書きや細かなルールが知らされている。

怪我する可能性もあるため同封されていた同意書にはサインと印鑑をして送付済み。
ただルール違反に当たるかとか細かい点の確認のため、俺は何度か雄英に電話で尋ね
ていたりする。

対応してくれたのは誰か分からなかつたけど、とても親切だつた。

筆記試験は前世の記憶もあつたから現代史以外問題なかつたが、俺としてはここからが本番だ。

幸い俺たち三人共に同じブロックでの実技試験になるので、それだけで心強い。ジヤージに着換え、所定の位置に集まり、注意事項等の説明をされ、唐突なスタートの合図で試験が始まつた。

原作じやプレゼントマイクだつたのに、そうじやないキヤラの声だつたな。
「しようくん、周りの人巻き込むなよ？」

「分かつてる。でもそちら辺のフォローは任せた」
「私ずつとこのままでもいいー♡」

「被身子、白のまま喋んな」
「はーい」

被身子ちゃんは俺の血を飲んで俺に変身してこの試験に挑んでもらつていてる。

雄英にはこれで得点を稼いでもちろんと被身子ちゃんに得点が加算されるか尋ねて、問題ないと回答をもらつていたので、雄英を受験すると決まつてから被身子ちゃんには俺の血を飲んでもらつて俺の身体に慣れてもらつていてる。

未だに俺の声と姿で被身子ちゃんらしい振る舞いや言動をされると違和感しかない

が、しょうくんの血より俺の血を被身子ちゃんが懇願したので仕方ない。

因みに原作だと変身の個性を使うのに裸になる必要があつたけど、エンデヴァーからの猛特訓を受けた末に相手の服まで変身するしないのコントロールが可能になつた上に、原作でキュリオスとの戦闘で覚醒したように、現時点で攝取した相手の個性まで使えるようになつた。ただ変身で使う個性はオリジナルとは見劣りしてしまうし、相手の服まで変身するしかない場合は原作通り裸になる必要がある。

「しょうくん、そつち！ 怪我人がいる！」

「分かった！」

「ささ、危ないですよよ。救護スペースまでエスコートしますねー」

仮想敵ロボを三人で手分けして破壊しつつ、怪我した受験生は救護スペースへ搬送。連携も難なく取れてるし、最初に感じていた不安感は全くない。

原作を知つてゐるからこそその立ち回りだが、合格するためなら有効活用する他ないからな。

そんなこんなで時間が経過していくと、轟音と共にあの0ポイントの巨大な仮想敵ロボが現れる。

いやあ、生で見るとマジででけえ。原作知らなかつたら周りの受験生みたいに俺も逃げ一択だつたわ。

「つ!? しようくん、氷壁!」

「おう!」

やつぱ逃げ遅れてしまう人がいた。

だから俺はしようくんに指示して氷壁を出してもらい、被身子ちゃんと一緒に逃げ遅れた受験生たちを逃していく。

「白! 崩れるぞ!」

「おうよ!」

思つてたより0ポイントのパワーが強くて、あと一人つてところでしようくんの氷壁が崩壊。

「ごめんね! 君、悪いけど頭ガードしてしやがんでて!」

「あ、う、うん! でも、あれ0ポイントだよ!?」

「大丈夫! ヒーローならどんな理不尽にでも立ち向かうんだから! しようくん!」「いつでもいけるぞ!」

俺はしようくんに合図を出して地面を蹴る。

するとしようくんが氷で足場を作ってくれる。

左右の親指以外の指を全て今自分が到達出来る最長の刃物に変化させ、0ポイントの両腕を切り裂いた。

イメージ通りの切れ味。続いて落下すると同時に両脚の骨組みも切断すれば、完全に無効化出来た。

「被身子ちゃん、建物への被害は?」

「問題ないよー! 焦凍が氷でガードしてたから! 女の子も無事ー!」

ホッと一安心したところで終了を告げるアナウンスが響く。

「お疲れー、しようくん、被身子ちゃん。助かつたよー」

「お疲れ。俺は白の指示のお陰でそんな疲れてねえ」

「私もそんなに疲れてないよー♪」

元気だな、二人は。俺は精神的に疲れた。精神年齢が上だからか、はたまた緊張してたからか。

何はどうもあれやれることはやつたし、あとは合否判定の通知が届くのを待つだけだ。

「あの……さつきはありがとう」

そんなことを考えてると、背後からお礼を言われたので振り返る。

するとそこには先程咄嗟に指示してしまった女の子が立っていた。

あれ、この子つて確か――

「いやいや、こっちこそ急に指示なんかしてごめんね」

「ううん。本当に助かった。ウチ、耳郎響香って言うんだ。お互い合格するかまだ分か

んないけど、よろしく」

——耳郎響香ちゃんだあああ！

うわあ、しそうくん以来のA組のキヤラじやんか！ 本当にイヤホンジヤツクある！
三白眼かわ！ 小柄でかわ！（この間1秒）

「ああ、よろしく。俺は地毒白刃。こつちのおめでたい感じの紅白髪が轟焦凍で、こつちは——」

「渡我被身子です！」

「うえ！？ 双子じやなかつたの！？」

「あははー、私の個性なんですー」

「へえ、すご……」

そんな話をしていると、俺は耳郎ちゃんが膝に怪我をしているのが目に入つた。

「膝擦りむいてるけど、大丈夫？」

「ああ、大丈夫大丈夫。それに救護スペース行けばすぐ治してもらえるっぽいし」

「でもあそこまで距離あるし……あ、ちょっとジツとしててね」

「え、うん」

俺は耳郎ちゃんの膝を作り出した毒（麻酔）を数滴垂らす。

「どう、まだ痛む？」

「あれ、痛くない」

「良かった。あとは……」

持っていたハンカチを巻いてこれ以上傷が空気に触れないようにすればオーケー。「ありがとう。でもハンカチ……」

「余計なお世話はヒーローの本質、って言うじやん？ 怪我治してもらつたら返してくれればいいから」

「……分かった」

それから俺たちは耳郎ちゃんを救護スペースに連れてつて、ハンカチを受け取り、それぞれの更衣室で着替えて雄英高校をあとにした。

その帰り道。

同じ駅に向かうので、そのままの流れで耳郎ちゃんととも一緒に駅へ向かう。

「へえ、三人同中なんだ。変身つて個性もチートだけど、そつちの二人は個性2つ持ちとかますますチートじやん」

俺の右にしうくん、そして後ろに被身子ちやんでその隣に耳郎ちゃんと歩道を歩きながら、改めて自己紹介してからの耳郎ちゃんの言葉。

確かにチートだよな。俺もそう思う。

でもチートにはチートなりに苦労もあるのよ。

「個性2つ持つてるってお得感あるけど、慣れるまでがなう。1つに集中するともう1つの制御が出来なくなるってのはよくあつた」

「ああ。いいことばつかじやねえな」

「しようくんにとつては特にね。」

でも原作みたいに拗れてないし、コントロールの特訓も一緒に頑張つたし、しようくんが努力してきたのを俺はよく知つてる。

だから耳郎ちゃんの前なのに、ついついいつものように「頑張ったもんな」って言つてしまふくんの頭を撫でてしまつた。

「ん、ありがとな、白」

「いえいえ！」

微笑まゝ♪ うちのしようくんは癒やし系イケメンになつてしまつた。なんか兄目線になつてしまふ。

すると当然背後から軽い衝撃が来た。被身子ちゃんの『私も頑張つたよ!? 裏めてよ！』の合図である頭突きだ。

「被身子ちゃんもよく頑張りました」

「んへつ、んひひひひ♡」

「……仲いいな」

あ、若干でもなく耳郎ちゃん引いてますやん。

でも仲良しなのは事実なので、

「ずっと三人でいたからな♪」

ついありのまま返してしまった。別に隠す必要とかないしね。

するとしようくんも被身子ちゃんもほわほわととした雰囲気をまとつた。しようとくに至つては相変わらずポーカーフエイスのままだが、被身子ちゃんと同じく両手で頬を押さえている。

「かわいいだろ、この二人？」

耳郎ちゃんにこつそり訊ねると、耳郎ちゃんは「確かにね」と返してくれた。やつぱ耳郎ちゃんもいい子や。

「ほら、お二人さん。いつまでもトリップしないで、さつさと帰ろうぜ。みんな待つてるだろうから」

「お、そうだな」

「はーい♡」

それからその場の流れで耳郎ちゃんと俺たちは連絡先を交換し、ホームで別れ、被身子ちゃんを施設まで送つていってから轟家に帰つた。

「ただいまー」

「まー

俺の声に続いてしようくんがぽつりと言う。

すると廊下からとたとたと足音がした。

「お兄ちゃん、おかえりーー！」

「ただいまー、黒刃ー！」

8歳になつたラブリーマイエンジエルシスター黒刃のお出迎えに、俺は今日の疲れを忘れて抱きしめる。

最高。ホントに最高。

「黒刃、焦凍兄ちゃんにもおかえりーつて」

「あ、おかえり、しようと」

「おう」

んー。なんでしようくんにはこんなにもスンツて顔するのか。イケメンぞ？　あ、イケメンだから恥ずかしいのか？

「早くあつち行きなよ。あたし、お兄ちゃんとまだぎゅうしてゐから」

「こらこら、なんてこと言うの。兄ちゃんだつてもう冷母さんたちのとこに行くよ」

そう言つて俺は黒刃を抱き上げる。

「流石に大きくなつたから大変だけど、まだまだ余裕だな。

「いつまで経つても兄離れ出来ねえな」

「ようくん、それ特大ブーメランよ。

「しようとだつてあたしのお兄ちゃんから離れてない。邪魔」

「抱つこしてもらつて白の両手を使えなくして黒に言われたくねえ」
まるで猫のケンカだな。相変わらず。俺としてはもう少し仲良くしてもらいたい。
被身子ちゃんとはこんな険悪にならないのに……謎だ。

「ほらほら、ケンカしない」

「してねえ。事実を教えてる」

「分かつてないから教えてあげてるの」

もうケンカするほど仲がよろしいってことで。

ツツコミも程々に居間へ行くと、

「おかえり、焦凍、白刃君。試験お疲れ様」

「お疲れ様、二人共。試験お疲れ様つてことで、今日は二人の大好物を用意しておいたからね」

「俺も作ったぞー♪ 黒刃ちゃんもお手伝いしてくれて、な？」

冷母さんたちがご馳走を用意して待つていてくれた。

因みに夏兄は秋に推薦入試で東京ではなく家から通える県内の名門大学に合格。燈矢兄が勧めてくれたそうだ。

そして冬姉は隣町の小学校教諭になることが決まっている。

「みんな、ありがとう」

「ありがとう」

俺としようくんがみんなにお礼を言えば、みんな笑顔を返してくれた。

本当なら被身子ちゃんもこの場に参加させたかったけど、被身子ちゃんは被身子ちゃんで施設のみんなからお疲れ様会をしてもらうみたいなので、被身子ちゃんは明日誘つてる。

だから今日も明日もパーティーみたいで、なんか嬉しい。

「じゃあ二人共、手洗いうがいをして着替えてきなさい」

冷母さんに促され、俺としようくんは洗面所へ。

俺の着替えは今朝しようくんを迎えて行つた際に置かせてもらつたので、準備万端だ。

こうして俺としようくんはみんなに勞つてもらい、穏やかな食卓を囲んで過ごした。

「白、唐揚げ美味しいぞ」

「お兄ちゃん、このハンバーグあたしがこねこねしたんだよ！」

「順番。順番でオナシヤス」

「なら俺からな」

「空気読めない人ってどうかと思う」

「なんだやつと自覚したのか黒」

「は？」

「お？」

穏やかな食卓を囮んで過ごした。

教師陣サイド

「いやはや今年も粒揃いで嬉しい限りだね！」

「そうですね。特に乙区域の轟くん、地毒くん、渡我さんは筆記試験は勿論ですが、実技試験の時は周りの子たちと段違いの実力でした」

「それぞれの持つ個性が素晴らしいのもありますが、その分扱い方が難しい。なのにあそこまでコントロールし、且つ周りを気にしながらという行動は模範的なヒーローそのものです」

「まだ中学生ですし、こういった試験だからこそ、自分が自分がとなつてもおかしくないのに、あそこまで冷静な判断が出来るのはいいことです。将来が今から楽しみですね」

「何より轟くん、渡我さんを上手く指揮していた地毒くんはリーダーになれる素質を持つっています。判断能力もさることながら、状況把握の早さと順応性もピカイチでした」「流石はあるの地毒家の間人、と言うべきですかな。今からが楽しみですよ、本当に」「では、みんなこの三人は合格で問題ないね?」

会議室に異を唱える者は誰もいない。

「うん!　じゃあ三人は文句なしの合格だ!」

響香サイド

0ポイントの巨大仮想敵ロボットが出てきた時、怖過ぎて足が竦んだ。
こんなの無理だろ!って思わず叫んだ。

ヒーローになりたくていたウチのことを、両親は笑顔で背中を押してくれたのに、あんなに練習したのに、動けなかつた。

ああ終わつた、つて諦めた時、いきなり目の前に氷の壁が現れた。

状況が理解出来ずにいたら、今度は地響きで前のめりに転んで、膝を擦りむいた。
カツコ悪過ぎるなウチ。

ウチがそんなことしてると間に一人の男子が叫ぶ声がしたと思つたら、そつくりな二人の男子の内の一人がウチの前にウチを守るように立つていた。

『ごめんね!　君、悪いけど頭ガードしてしゃがんで!』

なんだよ、それ。

みんな必死になつて逃げてゐるのに、そいつはウチに向かつて笑顔を向けた。

毒々しい紫色に銀色みたいなメツシユの長髪。

チラリと見えた首にあるドクロマークとか。

指が刀みたいになつてるとか。

思わず見惚れちやつた自分がいて、でも氷の壁が壊れたことで我に返つた。

頭を守るように伏せたけど、どうしても気になつてその男子の背中を目で追うと、あんな無理ゲーまがいの巨大仮想敵を簡単に倒した。

なんだよ、それ。レベチどころじやない。ホントに同じ年なのかよ。

試験が終わつて安心したけど、助けてくれた男子が気になつたし、お礼も言わないつて思つて声かけたら、すごい話しやすくてイイ奴だつて思つた。

他の二人も変だけど面白くてイイ奴らだつた。

あの三人と比べたらぶつちやけ合格出来る自信ないけど、もしも合格出来て同じ学校に通うなら、もつと色々な話をしたいな。

合格出来なくとも連絡先は交換したし、その時は雄英の授業の感想とか教えてもらお。

それにしてモ――

地毒白刃

——本物のヒーローみたいだつた。

入学準備とショッピング。

中学を無事に卒業し、進学までの準備期間的な時期に入った。

俺、しようくん、被身子ちゃんは無事に雄英高校に合格。順位は首席がしようくん、次席が俺、3位が被身子ちゃんという123ファニッシュでみんな揃つてA組になれた。

あれ、じゃあ爆豪くんどうなんちやつたんだ？

まあ既にもう色んなことが原作通りじゃないから、気にするだけ無駄だよね！

雄英高校に至つてもそれは同じで、既に雄英生用の寮が敷地内に立つている。

全寮制ではなくて希望制。またアクシデントによつて帰宅困難になつた生徒も即時利用可。

そして驚いたのは誰でも閲覧可能な雄英高校ホームページの教師陣にイレイザーヘッドとプレゼントマイクの二人の名前がなく、リューキュウやウォツシユの名前があつたこと。

そもそも受験対策で去年の下半期ヒーロービルボードチャートJPを聞き流してい

たが、しおうくんが録画していたのを改めて確認すると、10位に無個性初のヒーロー志村転弧こと∞（インファニティ）が名前を連ね、8位にラウドクラウドがいたことが分かった。

ざつと挙げてしまえば、

- 1位：オールマイト
- 2位：エンデヴァー
- 3位：ホーカス
- 4位：ベストジーニスト
- 5位：ミルコ
- 6位：クラスト
- 7位：シンリンカムイ
- 8位：ラウドクラウド
- 9位：ヨロイムシャ
- 10位：∞

である。

原作ではラウドクラウドこと白雲龍は相澤先生と同じインターん先で亡くなつて、その死体から黒霧という敵連合の幹部にされていたが、この世界では存命のようだ。

ならば原作で約束していた通り、ラウドクラウドの事務所にレイザーヘッドもプレゼントマイクもいるのだろう。

相澤先生を生で見たかったのもあるけど、相澤先生が親友たちと夢の事務所経営をしてるなら嬉しい限りだ。

ただ担任がどうなるのか全く分からん。

しかしそんなの誰だつて一緒だ。

それに分からない方が楽しみが増えると思えばいい。うん。

「白、被身子來たぞ」

「お、じゃあ行くかー」

そして今日、俺たちは雄英高校に入学するに当たつて必要になる物をショッピングモールへ買いに行く。

制服とか教科書とか指定されている物がとにかく多いので、ショッピングモールならば全部揃っているから楽だ。

「じゃあ行ってきます、冷母さん」

「行つてくる」

「行つてきまーす！」

「はーい。何かあつたら電話するのよ？」

黒刃ちゃん、お兄ちゃんたちから離れちゃダメ

メだからね？」

「はい！」

冷母さんの言葉にビシツと手をあげて返事をする黒刃。

そう、今日の買い物には黒刃も連れて行く。

本当ならお留守番していてほしいんだが、行きたいと言つて聞かないで連れて行くことにした。まあ基本的に俺から離れることはないし、俺の他にしようくんたちもいるから大丈夫だろう。



そしてやつてきた例のショッピングモール。

原作だと緑谷くんが死柄木とお話しする場所だが、私服警官やら私服ヒーローが常時パトロールしているのもあって安全性はかなり高い。

だから来ている人たちはみんな平和な日常を過ごしている。

「待ち合わせ場所つてここであつてる?」

「あつてるはずだ」

「もう少し待つてみようよ。私たちが先に着いたのかもしれないし」

俺たちの会話に俺と手を繋いでいる黒刃が「誰か来るの?」と訊いてきたので、被身子ちゃんが「お友達が来るんだよ♪」と答えると、黒刃は「お友達!」とワクワクし出

す。

俺たちの友達＝自分の友達という感覚なので、黒刃的にはまた一人お友達が増えることが嬉しいみたいだ。施設ではみんなとお友達になつててアイドル的存在だし。

流石は仮頂面の炎司さんを前に泣くどころかヒゲを引っ張つて遊び出した強靭メンタル持ちのコミュ力お化けである。

「ごめん、お待たせー」

そこへ待ち人である響香ちゃんがこちらへ手を振つて小走りでやつてきた。

響香ちゃんも無事に合格し、メツセージアアプリでやり取りして仲良くなつて、今ではみんな名前で呼び合うまでになつてる。

てか思つてた通りロックな私服や。なんだ、あの斜めカットのチャックの革ジャケット。スキニーデニムパンツにも音符のプリントとかベースギターのプリントが施されてるし。ショーカーとかトゲトゲしてるし。パンクファッショントロックファッションの違いがいまいち分からないけど、いかしている、クールだつてのは分かる。

被身子ちゃんなんてもろ地雷系ファッションしてるし。かわいいし似合つてるけれども。

俺としようくんが浮いちゃうなー。いや、ごめんなさい。しようくんはイケメンだか

ら白のワイシャツにジーパンでも最高にカッコいいです。

黒と紫のチエック柄の長袖パーカーとドクロマークがデカデカ入った黒のサルエルパンツの俺が一番浮いてます。パーカーの背中にもドクロマークあるしね。なんか地毒白刃になつてからドクロマーク好きになつてんだよな。中学卒業したばつかなのに指輪も中指にスカルのやつ嵌めるの癖になつてるし。

あ、因みに黒刃は黒の長袖Tシャツ（左胸にワンポイントのドクロマーク）に淡いピンクのロングフレアスカート。うわっ、俺の妹天使過ぎ！

「大丈夫だよー、私たちもさつき着いたとこだから」

「なら良かつた。あ、この子が白刃がいつも言つてる天使ちゃん？」

「そ、妹の黒刃。黒刃？ 俺たちの友達の耳郎響香ちなんだ、ご挨拶」

「こんにちは。地毒黒刃、8歳です。空気の読めない焦凍がいつもご迷惑お掛けしています。頭にきたら遠慮なく頭叩いていいですよ」

「ぶふお!!!!」

黒刃の言葉に盛大に吹き出す響香ちゃん。

妹よ。兄はそんな自己紹介をすることは全く思つていなかつたぞ。しようくんもしよ

うくんで相変わらずスンツとしてるし。

「白刃、アンタの妹、最高にロツクだね……」

「ツボ浅過ぎだろ、響香ちゃん」

「いやいや、マジで油断してたとこに豪速球来たから……うははっ」

「黒刃ちゃんの自己紹介は焦凍くんを落としていくスタイルですからねー」「やめて、被身子……お腹痛い……」

「響香、お前もそつち側だつたのか」

「う、うめ、焦……ぶふふつ！」

しようくんがこれ以上やると拗ねて泣いてしまうので、俺はしようくんの頭をヨシヨシする。

そうすればしようくんのご機嫌は戻るから。

本当に犬っぽくなつてしまつたな、しようくん。

「黒刃、そういう自己紹介のやり方、お兄ちゃん嫌いだなー」

「お兄ちゃん、ごめんなさい。焦凍もごめんね」

「おう」

うんうん。素直で大変よろしい。

ということで響香ちゃんも加えて、まずは一番面倒な制服を頼みに行く。

細かく採寸しなきやいけないから一番面倒なのよ。



取り敢えず比較的採寸が早い俺としそうくんが先に済ませ、奥の方へ被身子ちゃんを
響香ちゃんが採寸しに行つてしまふと、黒刃は軽く経つた。

「黒刃、喉乾いてない？」

「大丈夫！」

「そつか。でも一応一口だけ飲んどこうな」

「はーい！」

エンデヴァーの写真がプリントされた水筒から麦茶を飲む黒刃。

ずっと轟家でお世話になつていたから、黒刃はジュースとかよりお茶が好きなのだ。

「お待たせ！」

「やつと終わつたよ……」

そこへ戻つてきた二人。

被身子ちゃんはいつも通りだけど、響香ちゃんはちょっと疲れた感じに見える。

「響香ちゃん、大丈夫？」

「あ、うん。ウチ採寸とか滅多にしないイベントだから慣れてなくて」

「ああ、なるほどね。女の子なら採寸も俺らより細かくやんないとだしな」

「そーそー、はー……」

「響香ちゃん、お茶飲む？」

お疲れ気味の響香ちゃんに黒刃が自分の持っていた水筒を渡そうとすると、響香ちゃんは胸を押さえて「大丈夫」と返した。

分かるよ。かわいいだろ、うちの妹の上目遣いの首傾げは。

「じゃあ次は書店行つて教材頼んでくるか。それが終わつたら、少し早いけどフードコートで一休みしよう

「あんま食わねえハンバーガー食いてえ」

「バーガーハイローは入つてたな、確か」

「お、いいな」

「私はフライドチキン食べたいなー」

「ならウチもそうしようかな」

「あたしお兄ちゃんと同じのがいいー！」

教材のことよりお昼の話ばかりだつたけど、まあ仕方ないよね。勉強よりは食の方が楽しいもの。



フードコートへやつてきた俺たちは、取り敢えず俺と黒刃以外に先に注文してくるよう言つて、確保したテーブルで待機。

その間に入つてるテナントを見て、黒刃が好きそうなテナントを絞る。

「黒刃、お魚食べたい？」

「お兄ちゃんも？」

「うん、ほらあそこに海鮮丼とかやつてるお店あるから」

「食べたーい！ イクラ丼！」

黒刃はイクラが大好物。よく分からぬけど、前世で俺も小さい頃はイクラ好きだつた。

決まつたところでしようくんが戻ってきたので、交代して俺と黒刃も注文に行つた。

みんなそれぞれ頼んだ物が出来上がり、早めの昼食。

しようくんはチーズバーガー2つに何か卵やらトマトやらが挟んであるデカいバーガーと、ポテト、チキンナゲット、お茶。

被身子ちゃんと響香ちゃんはフライドチキン2つとポテト、フライドチキン2つとビスクセット2つのセットをシェアするらしい。

黒刃はイクラ丼で、俺は穴子丼。

「黒刃ちゃん、ポテト食べる？」

「食べるー！ 被身子ちゃんはイクラいるー？」

「じゃあ交換しようか」

「いいよー！」

和むなあ、この空間。

仲良くシェアして食べさせ合う黒刃と被身子ちゃんに、黙々とハンバーガーをリストかハムスターみたいに食べてるしちゃうくん。

「白刃つて本当に黒刃ちゃんたちのこと好きだね」

「え、そう？」

「そりやあそんだけ微笑んでれば付き合いの短いウチでも分かるよ」

マジか。そんなバレバレだったか。仕方ないよ。こんなかわいいに囮まれてる空間にいたら、表情筋だつて仕事忘れるよ。

「あたしもお兄ちゃん大好き！」

「私も白刃様命だよー！」

「白刃は俺らが幸せだと幸せだもんな」

三人に言われて嬉しいけど気恥ずかしい。

仕方ないじやん。精神年齢はもうおじいさんなんだし、こんな青春前世でも味わつたことなかつたんだから。

照れ隠しに俺は穴子丼を搔き込んで、周りからの生温かい視線から逃げた。

◇

その後は個人での買い物。俺に至つては黒刃が欲しがつたエンデヴァーの消しゴムとか鉛筆を買つてあげたりした。

「あ、ウチちょっと寄りたいとこあるんだけどいい？」

響香ちゃんの言葉にみんなでいいよと頷くと、響香ちゃんはお礼を言つて目的地へ。着いた場所は楽器店。

あー、響香ちゃんだもんなー。

俺も前世ではビー○ルズとかロー○ング・ストーンズとか英語も分かんないのに洋楽にハマつて、ギターとかベースとかやつたつけ。指が短くてコード押さえられなくて続かなかつたけど。

唯一楽器で続いたのはハーモニカと地元のお祭りで演奏していた篠笛くらいだ。

「何買うの、響香ちゃん？」

「ピック。いつも使つてるやつがそろそろヤバいから」

「響香ちゃんつてどんなピック使つてるの？ サムピックとかファインガーピックとか？」

「お、白刃結構知つてる口？ ウチはこのブランドが今のどこ一番好みの音出してくれ

るから好きなんだよね」

「おー、エイジド加工されてるやつか。ここつてヴィンテージ風でいいよな」

「マジか。話通じてくれて超感激なんだけど。周りに音楽やつてる人少なくて」

「俺は前（前世）にかじった程度だ。ハーモニカと篠笛なら今でもたまに吹くよ」

「へえ、いいじやんいいじやん♪ 篠笛つてのも渋くていいね♪」

二人で思わず盛り上がり上がっていると、当然話の内容がさっぱり分からぬしようくんたちが宇宙の猫みたいになっていたので、みんなは何か興味のある楽器がないか訊いてみる。

すると、

「俺は……音楽自体あんま興味ねえな。でも白の笛は落ち着くから好きだ」

「私は白刃様の笛になりたい♡」

しようくんも被身子ちゃんも楽器には興味がないみたい。まあ普段から楽器の話なんて一度も出てこなかつたから分かつてたけど。

「黒刃はあるか？」

黒刃に振ると、黒刃は「あたしは……」と言いながら店内をキヨロキヨロする。

そして何か見つけたのか、俺の手を引いてある場所へ。

「これ！」

「…………見る目あるね、黒刃ちゃん」

響香ちゃんが感心しながら言葉を零す。

でも俺も蠶貝目とか抜きにそれをチヨイスするのは凄いと思った。

だつて黒刃が指さしたのは、

「ホワイトファルコンつてなんだ？」

「うわあ、0がいっぱい……」

世界一美しいと言われるギターだから。

「黒刃ちゃん、ギター弾いてみたい？」

「うん！」

「じゃあこれは大きいからまだ弾けないけど、あつちの子ども用のはお試し出来るからやつてみようか」

「やるー！」

そして店員さんに言つて子ども用のギターを弾かせてみることに。

するとどうだ。響香ちゃんが一度音階のドレミを教えただけで黒刃はすぐに一本ずつだが、今日初めて触ったとは思えないくらいスラスラときらきら星を弾いてみせた。

俺がたまにハーモニカで吹いてたのを覚えていたらしい。

これには俺も他のみんなもいい意味で言葉を失つた。ヤバ。俺の妹は音楽の天才かもしれない。

「黒刃ちゃん、本氣で音楽やつてみない？」

「んー、お兄ちゃんが一緒ならいいよー！」

ギュインツてめっちゃ勢い良く俺の方を向く響香ちゃん。怖い。怖いよ！

「いやあ、俺、ギターは挫折したから……」

「いいじやんもう一度やりなよ大丈夫ウチが教えてあげるよそれに趣味だつていいウチだつてヒーローを目指しながら音楽活動する気でいるし一緒にやろうよもう一度ウチとそれに黒刃ちゃんほどの才能持つてる子は珍しいし音楽やることは教育にもいいつてウチの両親言つてたし」

「響香ちゃん！ 韶香ちゃん息継ぎ忘れてるよ!? 落ち着いて！」

「……あ、ごめん」

恥ずかしそうに俯いた響香ちゃん。いやかわいいけれども。

「んー、どうしたものか。

「黒刃」

「なあにお兄ちゃん？」

「ギター好き？」

「うん！」

「じゃあこの響香お姉ちゃんに教えてもらう？」

お兄ちゃんはギターはやらないけど、

見学つてことで一緒にいるよ」

「ならやるー！」

黒刃が元気に手をあげて言えば、

「よし、決まり！ 子ども用のギターはウチが用意するから大丈夫だよ！ 白刃、あとでスケジュール確認していつから始めるか決めよう！ あ、黒刃ちゃんはまだ小学生でウチの家に通うのは大変だろうから、ウチが白刃の家に行くよ！」

あれよあれよと言う間に話が進んだ。

響香ちゃん、本当に音楽好きなんだな。好きなことへとことん一途なのって微笑ましい。

「ちょ、ちょっと、そんな目で見ないでよ……」

「え」

「だからその、焦凍とか被身子にするような、目……恥ずいから」

「かわいいなおい」

照れる響香ちゃんに思わず俺はつぶやいて頭を撫でてしまつた。

うん、なんだろうね。歳の近い妹がいたらこんな感じだつたのかな。被身子ちゃんは妹というか、しようくんタイプでペツトっぽいから。

「や、やめろ！」

「ごめんごめん」

「まだ撫でてる！」

「いいじやん、撫でるくらい」

「恥ずいっての！？」

そうは言いながら逃げないのね、響香ちゃん。素直じやないのう。

「白……」

「白刃様あ」

「お兄ちゃん」

Oh……マイフレンズとマイスターまで対抗心バリバリで頭を寄せてきよる。かわいいに囲まれて幸せだなあ。
てことでしようくんたちの頭も順番に撫でて、楽しいショッピングは終わりましたとさ。

被身子子サイド

今日は白刃様とショッピング！

焦凍と黒刃ちゃんも一緒に！

響香ちゃんも来るんだー！

楽しみー！

楽しみ過ぎて夜中まで笑つてたら、隣の部屋の子たちに「もう寝なよー」って言われ

ちやつた。

私が普段過ごしている地毒児童保護施設の「地毒園」は広い。幅広い年代の子どもたちが寮生活をしてる。

病院の敷地内にあるけど、4棟も男女別になつてて、幼児期～小学生と中学生～高校生で別れてる。部屋は10畳くらいの個室で鍵付き。

私なんかは小学生の頃に入つたけど、最初から中学生の子たちが入る棟に入つてる。でも新しく入園した子がいるとみんなで歓迎会したり、お誕生日会したり、週に一度はみんなでお食事会したり、何かとみんなと過ごす時間は多いかな。

中には付き合つてるカップルもあるし。

あと当然だけど、門限とか食事とか消灯とか各棟ごとに違いはあるけどみんな決まつてて。キツチンはいつでも利用可能だから、お料理する子もいるね。

あと他の施設のことは行つたことないから分からぬけど、地毒園だと中学生になると専用のスマートフォンが贈られる。通信料とかも地毒園が払ってくれるけど、当然利用上限は決められてるから好き勝手には使えない。私はそもそも電話とメツセージアプリしか使わないけどね。パソコンだってリビングに5台あるから、予約しとけばいつも使えるし。

高校生になればアルバイトが出来るようになるから、あとは自分で小遣い貯めて自

自分で好きな機種に変えたり、料金設定も自分なりに出来るから、みんな基本的にそうしてゐみたい。

私は雄英に入るからアルバイトしてる暇なさそうだし、このまま甘えちゃうことにしてるみたい。

私は雄英に入るからアルバイトしてる暇なさそうだし、このまま甘えちゃうことにしてる。卒業したら考える予定。

あ、でもその前に壊れちゃつたりしたら買い替えないといけない。中学生の間なら地毒園が面倒見てくれるけど、高校生になると自由な時間が増える分、そういうところは自己責任になるから。

因みに今回のショッピングは高校へ通うにあたつて必要となる教材とかを買うんだけど、そういうのは地毒園に後払いしてもらえるので心配なし。文房具とかも地毒園特製のICチップ付き所属カードを提示すればいいだけ。流石に高額になる場合は職員さんに相談してからじやないとダメだけ。

お洋服とか下着とかは毎月個人個人に支給される生活維持費でやりくりするから、本当にお金には困らない。

私の場合は度々白刃様が文房具とかお洋服とかプレゼントしてくれるんだけど、もつたいなくて使えない！

つてことで、今日はお気に入りの服でショッピング♪

白のレース丸襟リボンブラウスで、長袖のところにいっぱい黒いリボンが付いてて、

チラツと素肌が見えててかあいいの！

スカートは黒のティアードスカートで白のハート型のベルトに、黒の丸いローヒール
パンプスを合わせればオーケー！

あ、白刃様みたいなドクロマーク入った白ニーハイソックス履いてこー♪

そしてショッピングを一日中楽しんだ！

えへへ～、みんなかあいかつたなあ♪

お買い物楽しかつたなあ♪

今日は本当に最高の一日だつたあ♪

白刃様は素敵だつたし、黒刃ちゃんと響香ちゃんはかあいかつたし、焦凍はいつも通りだつたし、幸せだつたなあ♪

でも改めて知つたけど響香ちゃん楽器弾けるの凄いなあ。

私は興味ないけど、弾いてるところ今度見せてもらお～♪

黒刃ちゃんもギター弾けて凄かつたから、響香ちゃんに教わつたら今度聴かせてもらお～♪

はあ、それより私は白刃様が吹いてる笛になりたい。

そうしたら私死んでもいい！

でもそうなつたら白刃様に私が幸せになるところ見せられなくなつちやうから我慢我

慢。

だからせめて夢の中で白刃様に息を吸つたり吐いたりしてもらおー♪
夢の中でまた会おうね、

私の運命の人（ヒーロー）　♡

響香サイド

うわあ、男子に頭撫でられたー！

恥ずいー！

「でも、白刃の手……優しくて、温かかったな……」

つて、何考えてんだウチはー！

というか、白刃はアレだよ！

そうアレ！

ええと……たらし！

じゃなきやあんな自然に頭撫でてくるなんて有り得ないし！

「でも、またして欲しいかも……被身子たちがしてもらいたがるの分かつちやつた
だつてあれ気持ちいいもん。

だから何考えてんだウチは――――――！

雄英高校初登校。

今日からとうとう雄英高校で俺の高校生活が始まる。

俺、しようくん、被身子ちゃんはA組。響香ちゃんも勿論A組。

合格通知のあの妙にハイテクな映像レター……俺は校長先生だつた。

しようくんはセメントス先生で、被身子ちゃんは13号先生だつたらしい。因みに響香ちゃんは俺と同じだつたみたい。

あれつて先生たちで担当してるんだな。

というか、原作だとオールマイトが今年から教師になるはずだけど、どうなつてんのか分からんのよな。受験勉強の合間にニュース番組だけは欠かさずチエツクしてたけど、爆豪くんが捕まつて緑谷くんが奮戦するヘドロ敵ニュースもなかつたし、それこそオールマイトが雄英高校の教師になるつてニュースもなかつた。
ともあれ俺はしようくんと被身子ちゃん、響香ちゃんと一緒にA組のクラスへ來た。
ここでいきなり飯田くんと爆豪くんが口論してるシーンを見れるんだよなあ。てか生のA組メンバーをやつと全員拌めるのが嬉しい。

ガラガラと扉を開けると、

「おい、デク！ てめえ、さつさとそのナードノートしまえや！」

「かっちゃん、そんなこと言わないでよ！ 今聞いたみんなの個性をちゃんとメモしないと気が済まないんだよ！」

「だから！ そんなもん家でやれってつってんだよ！ このクソナード！」

あれれれえ？

爆豪くんが爆豪爆豪してないぞお？

ちよつと口の悪い世話好きヤンキーくらいだぞお？

いやまあそれも爆豪くんなんだけど、なんというか緑谷くんに対しても当たりが火の玉ストレートからストレートくらいの甘さがあるぞお？

てか緑谷くんと普通にお喋りしてる時点でおかしいぞお？
二人の間に何があつたのぉ？

おじさん気になるなあ！

にしても緑谷くん可愛いな。こう、何ていうかぼの○のに出てくるシマリス的な、小動物系。ピンクじやないけど緑は目に優しいからね！

つてあれ？

「おはようございまあああああすッ！」

「うおっ、うるさつ!?」

「……うるせえな」

「誰ですか？ 韶香ちゃんの知り合い？」

「いや、ウチも知らない……」

俺がふと思つた瞬間に大声で挨拶されて仰け反ると、

「すんませんッス！ 俺、夜嵐イナサつて言うッス！ よろしくお願ひしますッ！」

大声の正体が謝つてから自己紹介してきた。

そう夜嵐くんだよ夜嵐くん。なんで雄英にいるんだ？

あ、エンデヴァーがファンサービスもするようになつたからか。

原作だとしようくんより個性の使い方が上手で、推薦入試受けて受かつてたんだもんな。エンデヴァーから塩対応されてないから、素直に雄英入つたのか。
「君はエンデヴァーの息子さんッスよね!?」

「あ、ああ……」

「俺、エンデヴァーの大ファンなんッス！ その息子さんと同じクラスとか夢みたいで感激ッス！」

「お、おう」

うわあ、あのしようくんが引いてるよ。

でも確かに名前の通り嵐みたいでビビるな。

「そつちは地毒先生の息子さんツスね！」

「え、俺のことも知ってるの？」

「勿論ツス！ 実は俺、個性暴走させた時に大怪我して、その時に先生に助けて貰つたツス！」

「そう。てか父さん、母さんどつちに？ 地毒先生って言われてもどつちも地毒先生だから」

「両方ツス！」

「ああ、よっぽど凄い暴走したのね」

「はいツス！ でもこの通り！ 元気ツス！ 改めて！ 先生に！ お礼！ 言つてお

いてほしいツス！」

「ああ、うん。分かつた」

まさか俺の両親とも面識あるとか、よく分からんね世の中。

それから夜嵐くんに言われて、黒板に貼られてる席順を元に俺たちも自分の席につい

た。

というか、席順見てビックリした。

だつてさ、A組の人数24人もいるよ？

原作だと20人だつたのにだよ？

確かに俺と被身子ちゃんとか夜嵐くんがいれば増えるだろうけどさ。

原作よりも教室広い感じがするし。

因みに席は廊下側の縦一列が前から青山くん、芦戸ちゃん、蛙水ちゃん、飯田くん、麗日ちゃん、尾白くん。

青山くんの隣の縦一列が上鳴くん、切島くん、口田くん、砂糖くん、障子くん、響香ちゃん。

上鳴くんの隣の縦一列が心操くん、瀬呂くん、俺、常闇くん、被身子ちゃん、しようくん。

心操くんの隣の一列が葉隱ちゃん、爆豪くん、緑谷くん、峰田くん、八百万ちゃん、夜嵐くん。

そう！ 心操くんまでヒーロー科のA組にいるのだ！

いやあ、うん、もうほんとどうなつてのんかさっぱり分からん。

てか、後ろに常闇くんおりゅううう！ かわつ！ 鳥ヘツドかわつ！ 目の前には瀬

呂くんだし、右隣口田くんだし、左には緑谷くんだしいいい！

ああ、今日俺は幸せの過剰攝取で死ぬのかもしれない。

周りの子たちに軽く挨拶しつつ、時計を見れば普通の学校ならチャイムが鳴る頃なの

で、わざわざ俺の方へ向いて声をかけてくれている瀬呂くんに「そろそろ時間かもよ」つて前を向いてもらつた。

すると他の子たちも席について私語をやめたので、一気に教室内が静かになる。原作じや相澤先生が入つてくるんだけど、この世界だと誰になるんだ？

そんなことを考えていたら前のドアがガラリと開いた。

A組担任の先生は、

「あら、もつと時間を忘れてきやいきやいと初登校のドキドキワクワクを謳歌してるのかと思つてたのに、静かに席についてるなんてお利口さん揃いじゃないの。鞭の打ち甲斐がないじゃない」

ミッドナイトこと香山睡先生かよ！？

いや確かに原作の企画当初はA組の担任に設定されてたっぽいけどさ！
いいの!? 担任がこんな破廉恥なヒーロースーツの人でいいの!?

ほら、峰田くんがもう怪しい笑い声出してるよ。

「はい、では改めて注目。私はこのA組の担任、香山睡よ。ヒーロー名はミッドナイト。担当教科は現代ヒーロー美術史。ヒーロー美術史は主にコスチュームのことになるわね。そのヒーローコスチュームが造られた社会背景や宗教、哲学といったものを知る手がかりになる学問つて感じね。私の呼び方は通常時は香山先生。ヒーロー科の授業な

らミッドナイト先生と呼ぶように。面倒なら先生でいいわ」

みんなして『はい』と返事をすれば、香山先生は「熱い視線と青臭い感じが……」とかつぶやきながら領いてた。本当にいいの、この人が担任で？

「で、今日やることなんだけど、本来なら始業式に参加するところなんだけどお、ヒーロー科はそんなことに時間を使う暇はないの。それにここだけの話、始業式は拷問みたいなものだから」

拷問……？ ああ、校長先生の特に意味もない長くて有り難いお話をあるからか。

「では香山先生、ヒーロー科の生徒はこれから何をするのでしょうか！」

飯田くんがビシッと手をあげて質問すると、

「ヒーロー科は毎年恒例、個人の実力把握テストを行うわ。なのでみんな、今から配るジャージを持って更衣室で着替えて、校舎から一番近くのグラウンドに集合。青山くんから順番に取りに来て」

香山先生はそんな言葉を返し、みんなジャージを受け取って更衣室へと向かった。
というか相澤先生方式が普通に採用されてるんだな。不思議だ。

「おい、毒野郎」

「ん？」

更衣室で着替えていると、爆豪くんから声をかけられる。

何故だ？って思ったと同時に原作で読んでたみたいな荒々しい刺々しさがないとも思つてしまつた。なんていうか、爆豪くんが爆豪くんしてないって感じなんだよな。

「てめえと隣の半分野郎。それと目つき悪い団子頭の女。三人まとめて俺がぜつてえ
ブツ殺す」

「んんんんん？」

「イミガワカラナイヨ？」

「刺々ボンバーへッド。俺の白に手を出してみろ。一生消えない火傷を全身に刻んでやる」

「ようくん！ なんて物騒なことを言うの!? といふか俺のつて何、俺のつて！ 俺は誰のでもないからね！ そもそもお兄ちゃんはそんなこと言う子に育てた覚えはなくてよ！」

「ごめんね、二人共！ かつちやんは負けず嫌いだから、二人と……あと君たちと一緒にいた女の子がかつちやんより入試の成績良かつたから、ライバル視してるだけなんだ！ 言葉はアレだけど、本当に殺そうとしてるとかじやないから！」

緑谷くんが必死にフォローを入れるが、案の定爆豪くんは「てめえは黙つてろ、デク」とさつきよりは落ち着いて言い放ち、しようくんと睨み合う。

うーん。イケメンが睨み合うつて本当に目の保養になるけど、更衣室の空気が氷点下になつちやつたな。

というか、エンデヴァーのせいか精神年齢おじいさんのせいか、爆豪くんがどんなに凄んでも小型犬が威嚇してキヤンキヤン吠えてるイメージなんだよね。失礼だから言えなわけです。

「ほらほらしようくん。睨まない。ライバル宣言というか、打倒宣言つて緑谷くんが教えてくれたでしょ？」

「……悪い」

「一定評価を下回れば除籍処分だつて当たり前の雄英高校ヒーロー科だ。成績を争うのだつて日常茶飯事なんだし、爆豪くんみたいな人がいれば気を抜かずに入れられるじやん」

「そうだな」

うん、分かつたなら、良し。なので俺はいつものようにしようくんの頭を撫でてやる。するとしようくんは嬉しそうにまぶたを閉じて撫でられてるけど、爆豪くんは思い切り舌打ちして更衣室を出ていった。

そのあとを追う緑谷くんに「本当にごめんね！」って謝られたけど、別に言葉が物騒だつただけだからね。そもそも俺は気にしてない。

しうくんに至つては俺に撫でられてご満悦だし。

てことでミッドナイト先生の立ち会いの元、A組は実力把握テストが始まつた。

少し離れたところでB組も同じことしてるのが見えたけど、B組は原作通りにブラドキング先生だね。眞面目で熱血教師つてイメージしか残つてないんだよな。でも確實にミッドナイト先生より思春期な子たちの目の毒じやない。

「教室で言つたように、これから実力把握テストを行うわ。今の自分の実力を知つてもらうためにね。種目は50メートル走、握力、立ち幅跳び、反復横飛び、ボール投げ、上体起こし、前屈よ。記録は今から渡すタブレット端末に記入していくこと。壊したら反省文よ」

ミッドナイト先生は説明しながら端末を配つていく。

「それと個性の使用許可是取つてるから、使える子は好きに使つていい記録を打ち出すこと。出し惜しみしても何も意味ないからね。また私の個性みたいに使いどころが敵への妨害や捕縛を得意とする個性の子もいるでしようけど、記録が悪いからと除籍にはならないから、そこは安心していいわ。あくまでも今回は今の自分の実力を己が把握するためのテストだからね」

それじやあ順番に測定していくわね、とミッドナイト先生は鞭をしならせ、俺たちは配置についた。

把握テストは無事に終わつた。

俺も被身子ちゃんも特に個性を使つてブツパするみたいなことはなかつたけど、しょうくんはボール投げでブツパしてたね。氷で冷やしたボールを真上に投げて炎を浴びせて水蒸気爆発みたいにしてふつ飛ばして、麗日ちゃんみたいに∞つて記録出したもの。ボールつて本当にキランつて飛んでくのね。夜嵐くんも凄かつたけど、しょうくんの方が個性の扱いが上手なようだ。

そんな記録出したあとに、俺のどこまでどこで小走りしてきたしょうくんが「ん」つて頭を差し出してきたから、俺にはその頭を撫でるしか選択肢がなかつた。

テストの結果も炎司おじさんから鍛えられてたから、俺も被身子ちゃんも上位には食い込めたよ。

というかですよ。

たまたま緑谷くんのタブレットの画面が見えて分かつたんだけど、普通に個性持つったよ！

しかも2つ！

お母さんの物を引き寄せる個性とお父さんの火を吹く個性！

そして相変わらず持参してたノートにみんなの個性の分析メモしててかわいかつた。

その都度爆豪くんに「やめろクソナード」って頭叩かれてるのもかわいかつたし、それに対して「えへへ」って笑つて誤魔化してる緑谷くんもかわいかつた。というかそんな二人のやり取りがかわいかつた。

そして教室へ戻ろうとしていた時、

「なあ、あれ入学式に行つてた他の科の奴らだよな？」

峰田くんがそう言つて指さした方をみんなして見ると、そこにはどんよりとしたような、明らかに疲れ切つてげつそりしている生徒たちがとぼとぼと歩く姿が見えた。

「……のつけからテストで驚かされたけど、あれ見ると良かつたつて思っちゃうな」「だなあ」

切島くんのつぶやきに上鳴くんが同意すれば、他のみんなも同様に頷いている。

校長先生の話つて本当に無意味な話が多くて長いからなあ。ハイスペックなのに。

それから教室に戻ったA組は香山先生に言われてみんなの前で一人ずつ自己紹介し、明日の連絡を受けて解散となつた。

実力把握テスト以外は至つてどこの学校でもするような時間だつたな。

「白、帰ろう」

「帰ろ、白刃様♡」

香山先生が教室をあとにしてすぐ、しようと被身子ちゃんが荷物を持つて俺の席

までやつてくる。

「被身子、良かつたらウチらと帰らない？ 親睦深めるのに女子は駅前で食事しようかつて話になつてるんだよね。ほら女子は人数少ないし」

そこへ響香ちゃんが被身子ちゃんに声をかけた。

「被身子ちゃん、行つてきたら？」

「えー、でも私は白刃様と……」

「じゃあ帰る頃になつたら連絡してよ。それまで俺としようくんもどつかで飯食つたりして時間潰すから。しようくんいいよな？」

「ああ。駅前でどこの蕎麦屋が一番美味いか知りてえしな」

すると被身子ちゃんは表情を輝かせて「じゃあ連絡するね！」と返して、一度俺に抱きついてから響香ちゃんと共に女子たちの輪へ向かう。

俺としようくんが被身子ちゃんたちを見送つていると、

「なんだあ？ 地毒てめえ？ いきなりリア充見せつけていいご身分だなあ？」

峰田くんが凄い形相で俺を見上げてきた。

ちっさくてかわ！ 頭のもぎもぎかわ！

「リア充つて……まあリアルは確かに充実してるかな」

「もう彼女持ちでマウント取つてきやがった！」

「いや、被身子ちゃんとはそういう関係じやないぞ。仲がいいってだけ」

「本当か？」

「うん、本当」

「抱きつかれた感想は？」

「かわいいなつて」

「キイイイイイイツ！ これだからイケメンはよオオオオオ!!!!」

そう叫ぶと峰田くんは走つて帰つてしまつた。

何かしら彼の癪に触つてしまつたんだろうな。

「飯食いに行くなら俺もお供していいツスか!?」

「俺も行きてー！」

「女子だけ親睦会つてのもズルいしな！ 俺らも親睦会しようぜ！」

夜嵐くん、上鳴くん、切島くんに声をかけられたので、俺もしようくんもいいよと頷けば、上鳴くんたちが教室に残つてた男子たちに声をかけて用事がない子たちで食事をしに行くことになつた。

因みに昇降口で峰田くんがまだ帰つてなかつたので誘うと、嬉しそうに参加してくれた。ぴょんぴょん飛び跳ねてかわいかつた。

また食事はしようくんが蕎麦屋巡りだと言つて譲らなかつたけど、みんなはそれでも

いいということで4軒の蕎麦屋をはしごした。

俺とか口田くん、常闇くん、峰田くんは四人で一つの蕎麦を分けて食べたけど、他のみんなは余裕で一人前食べてた。流石食べ盛りの男の子たちだと思つてしまつた。

被身子サイド

「ここがファミリーレストランというもの、なのですね……まあ！ 安いですわ！ このんなに安くて経営は出来ていますの!?」

席に通されてメニューやタブレット端末で値段を見て、八百万ちゃんっていう子が何やら叫び出した。

口調やら仕草からしてお嬢様っぽかつたけど、正真正銘のお嬢様だった。お店に入る前に「ここはドレスコードはありませんの？」って言われてみんな思わずポカン顔しちやつた。

「八百万ちゃん、チエーン店なりの戦略がちやんとあるのよ。取り敢えず食べたい物を頼んで、それからお喋りしましょ」

蛙水ちゃんがまとめてくれると、みんな好きに自分の食べたい物メニューを選んでいく。

私はどこのファミレスでもハズレが少ないミックスグリルとパンにした。

「それじゃあまず私から」

ドリンクバーでみんな飲み物を持つてきて、揃つたところで蛙水ちゃんが小さく手をあげて口を開く。

「私は蛙水梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで。私の家は両親が共働きで帰りが遅いから、私が下にいる弟と妹の面倒を見ているの。だから家族を優先させてもらうことが多くなるけど、仲良くてほしいわ」

蛙の個性の子だからあんまり表情は変わらないけど、声色で優しい人って分かる。

「私は麗日お茶子！ 三重から来て、寮に入つてしまーす！ よろしく！」

麗日ちゃんは元気いっぱいな女の子。ニコニコしてて、でも使つてるケータイ電話がガラケーだつたりして物を大切にするタイプの子。ほつぺがもちもちしててかあいい。

「寮に入つてるなら私もだよー！ 千葉から来た！ 芦戸三奈ね！ よろしくーー！」

ピンク色でお目々真っ黒の芦戸ちゃん。麗日ちゃんみたいに人懐っこい子。角もあってかあいい。

「見た通り透明人間の葉隠透だよー♪ その内私も寮に入るかもー♪ 実家は東京だけど朝早いんだあ」

透明人間だから表情とかさつぱり分からないけど、葉隠ちゃんも人懐っこい子つて感じ。声がかあいい。

「それじゃウチね。ウチは耳郎響香。実家暮らしそう。よろしく」

響香ちゃんは相変わらずクールでかあい。

すると隣に座つてる響香ちゃんに肩を叩かれた。

私の番みたい。

「渡我被身子です。みんなより2つ歳上ですけど、お気になさらず。地毒園から通つてます」

初対面でちよつと緊張したけど、ちゃんと言えたよね?

「最後は私ですわね。八百万百と申します。実家は愛知ですが、近くに別荘がありますので、そこから通うことになりますわ」

別荘……。お嬢様だ。

あれ隣にいる麗日ちゃん、手が止まつてゐる。そのジユース美味しくなかつたのかな?改めて自己紹介が終われば、

「はいはいはいはーい! 被身子ちゃんに質もーん!」

葉隱ちゃんが元気に私に質問だと手をあげる。

「なんでしょう?」

「地毒くんとはどこまで行つてるんですかー!?」

「どこまで? どこまでとは?」

「あー、私も気になつてた! なんていうか、被身子ちゃんつて地毒くんには好き好き

オーラ全開だもん！ 轟くんには普通なのにさ！」

「仲良しで微笑ましいわ。ケロケロ」

「こ、これが恋バナですのね！」

「ここここ、恋バナ！？ うわつ、え……うわあああ！」

みんなはしやいでてかあいい♪

そんな雰囲気にぼわぼわしてると、響香ちゃんに脇を小突かれた。

「ウチもある程度三人の仲は知ってるけど、実際のところは訊いてなかつたよね？ どうなの？」 いつも白刃様白刃様って隣にいるじやん？」

「？ 白刃様は私の運命の人（ヒーロー）だよ？」

前にも話してるので変な響香ちゃん。

「私たち知らないから教えてー！」

葉隱ちゃんにせがまれたので、私はそのまま白刃様と知り合った経緯をみんなに話した。別に隠すこともないから。

すると、

「んあ～！ 何それ！ 超ヒーローじやん！ そりやあ夢中になるわ！」

「甘酸っぱい♪ ときめく♪」

「惚れてしまうやん、そんなん……」

「白馬の王子様じゃなくて、白刃が王子様ね……ケロ♪」

「地毒さん、素晴らしい殿方ですわね！ やはり地毒家の長子たる御仁ですわ！」

「え、地毒ってそんなに有名なの？」

私の素朴な疑問に八百万ちゃんは『ご存知ないのですか!?』って言われた。目がクワツてなつた。クワツて。

「地毒家は超常黎明期の前から今まで医師を派出してきた名門。個性が発現して混乱期の最中でも、差別をせずに敵味方関係なく患者を救い続け、あのオールフオーワンですら彼らに味方になつてほしくても中立的立場を貫いたほどです。個性を悪用するより有効活用し、個性で悩む人々には手を差し伸べ、個性を嫌惡する人たちには医療行為以外何もしなかつた、と私はお父様から教わりましたわ。今でこそ地元の大病院というスケールに収まつてますが、当時は病院といえば地毒病院が代表だつたとも。しかしスケールが小さくなつた今も渡我さんのような方々を支援しているというのは、地毒家が代々受け継いてきた志によるものかと。本当に尊敬いたしますわ！」

八百万ちゃんの説明にみんな『ほわあ』つてなつてるけど、私は『だから?』つて思つちやつた。あ、ご飯きた♪

白刃様のご両親には感謝してるし、尊敬もしてる。

でも白刃様だから、私は運命を感じたのであって、白刃様が地毒の家人じやなくて

も白刃様は白刃様だから運命の人（ヒーロー）なの。

「地毒家が凄いってのは分かったよ？ でも白刃様が地毒白刃っていう人間じゃなくても、白刃様は私を救つてくれる運命の人（ヒーロー）だつたと思う。それが白刃様だから」

私が感じているままを言うと、

「家とか関係なく貴方が好き！ ってことか！」

「駆け落ちしても幸せになれるねー♪」

「愛つて偉大だわ」

「す、すごい……」

「被身子らしいなあ」

「確かに、家柄だけでその人が決まる訳ではありませんものね！ 渡我さんの言う通りですわ！」

なんかみんな納得してくれた。

「でで、結局のところ被身子ちゃんは地毒くんとどこまで行つてるのー？」

「どこまでつてどういうこと？」

「だーかーらー！ チュウとかした？ それともお手手繫いだ？ ハグはしてたもんね

！」

「チウチウは何度もしてるよ?」

私が隠すことでもないから言うと、みんなお顔を真っ赤にさせて悶絶し始める。何なの? あ、私普通じやないからか。

「待つて、みんな誤解してる。被身子のチウチウって血を飲むことだからね?」

響香ちゃんが訂正してくれると、みんなピタツと止んだ。

「え、どういうこと?」

「私の個性、相手の血を飲むとその人に変身出来るの。私普通じやないから、その人の血

を飲んでその人その者になれるのが幸せなの」

「ああ! だからチウチウ吸うつてこと!?」

「はい」

「なーんだー! じゃあ甘々の方じやないのかー!」

「白刃様の血は甘いよ?」

「そーじやなーい!」

葉隠ちゃんは何を私に期待しているの?

「もうここまで聞いちゃったからぶつちやけて訊くけど、被身子は白刃と付き合いたいとか結婚したいとか思つてないの?」

響香ちゃんの質問に私は「ん?」と首を傾げる。

カツプルになりたいか、なりたくないかつてことだよね？

んー、

「別に思わないし、思つたことない」

だつてずっと一緒にいるもん。付き合うとか結婚とかしなくて白刃様が生きてる限り、私はその側を離れないもん。

するとみんな『えー!?』って驚いた。

「私普通じやないから、そういうの思つたことない。でも白刃様も私もお互いを大切に思つてるならそれでいいし、満足」

「じゃあ地毒くんがこの子と結婚するつていきなり女の子紹介されたら？」

「白刃様のお嫁さんと仲良くする。だつて白刃様が決めた人だもん。きっと優しい人だから」

「こういう形も愛の形かー♪ 思つてたのと違うけど、これはこれで甘ーい！」

「被身子、あんた凄いよ。感服したわ、私」

「愛つて本当に偉大ね。ケロ」

「わ、わわ私、そんなん考えたことあらへん……大人やね、被身子ちゃん……」

「私は渡我さんの幸せを祈つてますわ！」

みんな変なの。私はそのまま思つてることを言つてただけなのに。

「被身子」

「何、響香ちゃん？」

「今夜電話する」

「ん？ 分かった」

響香ちゃんに小声で電話の約束をされたけど、どうしたんだろう？

「てかさ、私思わず被身子つて呼び捨てにしちやつたわ」

「気にしなくていいよー、芦戸ちゃん」

「私のことも三奈でいいよ！」

「わあ、三奈ちゃん！」

「私も透で！」

「私もお茶子でええよ！」

「あ、あの……私も名前で呼んでもらつても……そして私も皆さんをお名前でお呼びしだく……」

『いいよー！』

こんな感じで思つてたよりもみんなと仲良くなれた気がする。

それに、

「ていうかさ、被身子って自分のこと『普通じゃない』って言うけど、全然普通じやん」

「そうだよ！ 血が好きっての以外は地毒君ラブな乙女だもん！ 気にすることないよー♪」

「そのことで地毒ちゃんが迷惑していらないなら、普通と言つていいと思うわ。愛の伝え方は人それぞれで、愛にもそれもあるもの。それに普通じゃないと言つたら、私だけ見た目はみんなと違つて普通じゃないから、一緒ね。ケロッ♪」

「それ言つたら私も透も普通じやないから一緒にやんねー！」

「それに普通じやなくたつてこうしてお友達になれたんだし、ええやんか！ 個性持つてる時点でみんな普通やないんやから！」

三奈ちゃんと透ちゃんと梅雨ちゃんから『普通』つて……『普通』つて言つてもらえた！

それに『一緒』つて！ それにお茶子ちゃんは『普通じやなくたつていい』つて！
嬉しい！ 雄英入つて、白刃様と出会つて、本当に幸せの連続！

「私……ひつぐ……みんなと出会えて、えぐつ……良かつたよお……つ！」
涙が堪えきれなくて、でもどうしても伝えたくて、なんとか言葉にすると、響香ちゃんが頭を撫でてくれた。

他のみんなも優しい言葉をかけてくれたり、肩を叩いてくれたり、本当に幸せ。でも、

「白刃様のなでなでテクには及ばないね！」

「おい！」

『あはは♪』

ここだけは伝えとかないと！

白刃様のなでなでは世界一！

そのあとは梅雨ちゃんの時間が迫つてたから、みんなで急いで残りのご飯を食べて、連絡先を交換して解散した。

百ちゃんが「ここは私にお任せくださいませ！」って黒いカードで支払ってくれた。みんなで悪いよつて言つてるのに、ぱりぱりして「私、一度お友達にしてみたかったのです！」って言われちゃつたら、みんな何も言えなかつた。お茶子ちゃんはマナーも一ドみたいに震えてたけど寒かつたのかな？

今日のお礼に今度みんなで百ちゃんに何か手作りのお菓子あげようつて決めた。

それからは白刃様と焦凍と合流して、地毒園に送つてもらつて、幸せな時間を満喫した！

響香サイド

女子だけの親睦会が終わつたその日の夜。

ウチは被身子に伝えた通り、電話した。

理由は、

『白刃様の好みの女の子?』

白刃について。

「あと出しみたいでごめん。ウチさ、付き合いは短いけど白刃のこと異性として好きになつちゃつたみたいでさ……でもウチ、ずっと被身子は白刃と恋人になりたいんだと思つてて、この気持ちは閉まつとこうつて思つてたんだ。でも今日そうじやないつて分かつたから……」

自分でも穢いなつて思つた。

でも恋をするのに順番なんてない。

それに自分のこの気持ちに嘘はつきたくないから。

『んー、かあいい人が好み、かな? 焦凍とか私とか、「かわいいな」つてよく頭なでなでしてくれるから』

「え、ウチには無理ゲーじゃん

『響香ちやんだつて白刃様になでなでされる時あるでしょ?』

「いや、あるけど……あれは妹とかペットとかに対するソレというか……私が求めてるものじやない気がする。嬉しいのは嬉しいんだけど」

『んー、たぶんなんだけど……』

「うん」

『白刃様つて女の子にはちゃんと女の子として扱ってくれるから、響香ちゃんも男の子扱いすればいいんじゃないかな?』

「ごめん、意味わかんない……」

『なんて言えばいいのかなー? こう、思つたことはちゃんと口にする、みたいな?』

『カツコいいよーとか、素敵だよーとか』

「…………無理」

『今度私が変身して練習してみる?』

「それはそれで恥ずい」

『もー! ジやあどうしたいのー!』

「出来れば白刃の恋人になりたい、です」

『じゃあさり気なくアピールするとか?』

「例えば?」

『ほら黒刃ちゃんにギター教えに行つた時とかに、白刃様の手料理ご馳走になつたりするよね?』

「うん」

『その時に美味しいとか、白刃様の手料理が毎日食べたいとか伝えるつて感じで……』

「それ普通男女逆じゃない？」

『普通がいいなら普通の子に相談して！』

「ごもつともです、ハイ」

でも本当に白刃つて基本的に何でも出来ちゃうから、ついつい躊躇つちゃうんだよね。

唯一ウチが白刃より出来るのつて楽器くらいで……ん？ そういえば母さんから、父さんによくラブソングのプレゼントされてたつて話聞いたな……じゃあ、ウチも——「だからそれつて逆じやん！」

——ちがーう！ てか父さんと同じかよ、ウチは！

『え、何の話？』

「あ、ごめん。こっちの話」

『とにかく、逆とか気にななくていいと思う。普通じやなくたつていいって今日私にみんなが言ってくれたでしょ？』

「うん、そうだね」

『いひひ、普通じやなくとも幸せになれるんだよ♪』

「被身子が言うと重みが違うなー」

『ふひひひひ、白刃様とみんなのお陰だよ♪』

「相変わらず白刃命だね、被身子は『当然！』

被身子に相談して正解だつた。

恋に正解なんてない。

だつて世の中、普通じやないのが当たり前なんだから。

ウチはウチらしく、白刃にアピールすればいいんだ。

「ありがとう、被身子。アンタが友達で良かつたよ」

『私も響香ちゃんが友達で幸せだよー♪』

本当にありがとう、被身子。

ウチ、頑張つてみるよ。

エリート校つて半端ない。

はいどーもー。

てことでね。昨日の今日で雄英高校生活2日目を送つていくんですけれども、相変わらずエリート校なだけあつて普通の授業も淡々と進んでいくんですよー。

いやあ、わかります。わかりますよー。

だつてヒーロー科は午後からの授業は基本的にヒーロー関連の科目が目白押しですものねー。

ヒーロー科に至つては7限目まであるし、土曜日でも6限目まであるからねー。

一般科目はこうした時間に注ぎ込まれるからそりやあハードモード一択つすわー。

俺なんか人生2周目だからなんとかなつてるけど、他のみんなは本当に偉いよ。

前世の俺なら速攻で除籍だわ。寧ろエリート校なんて目指さんわ。
んでもつて、

「白、腹減った」

「はい、おにぎり」

「サンキュな」

なんでしょうくんは当然のよう三限目終わつたら俺のとこに飯貰いにくるのよ。
いや、中学の頃からそだつたから俺も俺でおにぎり用意しちやつてるのもいけない
んだけどさ。

でもね、言い訳させて？ お腹空いて捨て犬みたいな目をするしようくんに「腹減つ
た……」つて俺の上着の袖をクイクイつてしながら縋られたらさ、用意するしかなくね
？

中学の時なんて他の奴らの分まで握つてたのもあって、ついつい今日も握つてき
ちゃつたよ！

どうすつかなつて思つたものの、

「口田くん、おにぎり好き？ 良かつたら食べる？」

普通に今まで通り他の子にあげちやえぱいいやつてなつて、早速しようくんの後ろに
いる口田くんに尋ねてみた。みんな食べ盛りだし余裕でしょ。

でも口田くんはブンブン首を横に振る。しかしあいちやん聞き逃してないよ。君の
腹の音を！

「気にしないでいいよ。俺、中学の時みんなにおにぎり持つてきてたから、その癖で今日
も握つてきちゃつたんだ。食べてみると有り難いんだ」

「あ、ありがとう……」

「うんうん、たんとお食べ」

「うん」

口田くん笑った。かわいいなあ。

「中味は昆布だけどいい？」

「うん、昆布好き」

「良かつた♪」

2つの大きなお手手でおにぎり持つてもひもひしててる口田くんかわわ。和みが深い。

「地毒く、余つてんなら俺にもくれよー！」

「おお、瀬呂くん。お食べお食べ」

「やつた、サンキュな♪」

瀬呂くんも細身だけど男子高校生だね。

「常闇くんも腹減つてるならどう？」

「いいのか？」

「いいともよ」

「かたじけない」

見た目は鳥でもやつぱり人間なんだな。あ、啄んでるのめっちゃかわいい。

「緑谷くんも食べない？」

「え、ぼ、僕!？」

「うん。お隣さんだし、まだあるから」

「そ、そんな……悪いよ……」

「あ、爆豪くんの分もあるよ?」

「え、本当? なら貰おうかな」

「あはは、幼馴染みが食べないのに自分だけ食べるってのは緑谷くんは出来ないタイプか。優しいね」

「そ、そんなことないよ……」

頬を赤くして照れてる緑谷くんにはきっと病を浄化する作用がある。直視したらふあくつてなるもん。

「俺は別にいらねえ。食うなら勝手にしろクソナード」

「かつちやん……」

「爆豪くんつて辛いの大丈夫? 一個だけ半端に余つてた激辛明太子入れてきただけ

ど

「…………はよこせや」

「おお、ありがとう、爆豪くん」

「くん付けやめろ。キメエ」

素直じゃないなあ♪ まあ原作で辛い物よく食べてたから明太子チョイスしてきた
んだけどね。

昨日はあんなこと言われたけど、同じクラスなんだから仲良くなりたいもの。さあさ
あおいちやんのおにぎりをお食べお食べ。

「わあ、美味しいよ、地毒くん！ 塩加減も海苔の香りもお米の炊き具合も！ それに保
温性の高いお弁当箱に入れてあるみたいだね！ まだ温かいもん！」

「……うるせえ、黙つて食えデク……おい、毒野郎」

「ん？」

「この明太子のメーカー教えろ」

「お、気に入つた？」

「さつさと教えろや。殺すぞ」

「白に——」

「はい、しきゅうくんストップ。はいもう一個お食べ。爆豪、明太子のメーカーは◇△つて
とこだよ」

「……フン」

しきゅうくんが爆豪くんに昨日みたいに立ちはだかろうとしたので、もう一個食べさせ

て落ち着かせたあとで爆豪くんの質問に答えた俺。

爆豪くん、素つ気ないけどしつかりメモつておいたよ。かわわ。
それから切島くんやら上鳴くんやらも「俺もくれ!」「俺にも!」つてきたから問題なくおにぎりははけた。みんな食べ盛りだもんな。寄つてくるとこなんて犬みたいでほんとかわいい。これが母性か。

「良かつたら今後もしょうくんの作るついでに用意してくるけど、食べたい人いる?」
俺の周りにいる子たちに尋ねてみると、みんな手をあげた。あ、口田くんと常闇くんもあげてくれる! 嬉しいなあ! おいちやん張り切つてにぎにぎしてきちゃうね!

ていうか、芦戸ちゃんと葉隠ちゃんも知らぬ間に手をあげてるんだが!?

いいよ、いいよ。おいちやん頑張っちゃうから!

「地毒くん! そうやつてみんなを甘やかすのは良くないぞ! そもそも食事というのは決められた時間に取る方が健康的だ!」

するとここで飯田くんのお叱りを受けてしまった。

うーん、流石は真面目飯田くん。

でも俺は敢えて汚い手を使わせてもらうよ。

「飯田くん、前歯に青のりついてるよ?」

「何!? それは本当かい!?

「うん。 ちよつと口開けてくれない? 取つてあげるよ」

「ああ、ありがと……むごつ!?

「飯田くんも高校生なんだから、お食べ♪」

「むぐつ、むぐぐ、もう!!」

反論してつぱいけど、ちゃんと飲み込むまで口を開けない飯田くんはとても偉いと思う。

「オレンジジュース飲む?」

「むつ、んんぬ!」

「はい、どうぞ」

「……ゞくん! プわあ、酷いぞ地毒くん!」

「ごめんね。でも美味しかったでしょ?」

「うつ、確かに美味しく頂いたが……」

「休み時間なんだから大目に見てよ。それにお腹減つて授業中に集中切らすよりは合理的だと思うんだよね」

「むつ、確かにそう言われてみれば……」

「美味しかったなら飯田くんの分も明日から持つてこようか? 別に悪いことでもない

し、授業中に食べてる訳じやないんだから、許してよ。不快なら場所移したりするから」「いや……そだな。堅過ぎるのもクラスの雰囲気を悪くするだけだし、休み時間で何をするかは本人たちの自由だ」

「分かつてくれて嬉しいよ、飯田くん」

「ああ！ それで、地毒くんが負担でないのなら、明日も頼みたいのだが……」

「お安い御用だよー」

俺がそう言うと飯田くんはぱあつてなつた。

どんなに真面目でも、こういうところは年相応でかわいいな。

「じゃあ改めて、中味のリクエストは特例を除いて受け付けません。特例はこれは苦手とかアレルギーとかね。無理つて食材がある人は今言つてねー」

するとみんな案外何でもいいらしい。常闇くんはコソツと「梅干しは好かん」つて教えてくれた。かわいいなあもうつ！

「了解。それじゃあみんな予鈴鳴るから席につきなー」

「はーい、お母さーん」

「よしよしいい子ね、我が娘よ」

「あはは、地毒くんノリいいねー♪」

「白母さん」

「白刃お母様！」

「しょうくん、被身子ちゃん、変な対抗意識燃やさなくていいから」

「そうか」

「はーい」

このわんこ系イケメンと天使が！ いちいちかわいいんだよ！

「はい、それじやあみんなお待ちかね、ヒーロー基礎学の時間よ。この授業は各教師が交代で教鞭を執るわ。1年生の内にヒーローのなんたるかを叩き込まないといけないからね。だからその前に担任である私から現実的な話をしないといけないの」

午後から始まつたヒーロー科特有のヒーロー基礎学の授業。

原作ならオールマイトが担当するけど、この世界じやミッドナイト先生や他の先生たちで担当するらしい。

というか原作と違つてヒーローそのものについて教えてもらえるのはいいかも。いきなり実践だつてなつても戸惑うしな。

「みんなも知つての通り、ヒーローは一般市民を凶悪な敵から救う仕事よ。己の個性を使い、いかに一般市民の生活の安全を守るか、いかに事故や災害から一人でも多くの一般市民を救うか、いかに自警団や警察と協力するかよ」

みんないつもは氣怠そうにしてるけど、流石ヒーロー基礎学ともなるとやる氣満々だな。

「だからこそ、敢えて言わせてもらうけど個性ブッパして『俺すげえ！』つてやりたいからヒーロー科にきたのなら、その人はヒーローに向かないから改めなさい」

冷たく鋭いミッドナイト先生の言葉に生徒の誰もが息を飲む。

「この中に個性の発現によつて周りから『ヒーロー向きだ』とか『勝ち組個性だ』とか言われて、周りからもてはやされてきた子とかもいるでしょ？」でもヒーローつてのは個性がすべてじゃない。現に今ナンバー10の∞がそれを証明している。よつてどんな個性だろうと、無個性だろうと、その人がどういう行動を取るかでヒーローという存在になれるのよ」

ミッドナイト先生の言う通りだ。包丁や狩猟ライフルだってそれを扱う人の行動次第で凶器になるのだから。

「夢を壊すようで悪いけど、それが現実であり、ヒーロー飽和状態に陥った理由の1つでもあるの。理想と現実のギャップに絶望した結果、ヒーローを引退するならまだしも、世間を裏切るという選択肢が生まれてしまった。ヒーローという職業こそ未だ存続しているけど、ヒーローを信用していない人も確かにいるからね」

確かにそうだよな。原作じや、努力してヒーローになつても活躍する機会が限られて

て、それでいて大して稼げないと余計に辛いだろう。

「現実的な話ばかりで悪いけど、半端な夢を追わせるほど残酷なことはないからしつかり聞いてね？ 例えば……地毒くん」

「はい」

「あなたの個性は？」

「毒生成と指先を刃物に変えられることです」

「そうね。それがどれだけ危険な個性か分かる？」

「はい。自分の思つた通りの毒が作れますから、簡単に人を殺めてしまうこともそうですが、下手をすれば大量虐殺も可能になってしまいます。刃物も同様です」

「そう。当然地毒くんだけじやなく、みんなにも言えることね。だからヒーローは個性を悪用しない。他者のために使うこと」

みんなミッドナイト先生の話をしつかり聞いて頷いている。

「でも凶悪な敵が現れたら、被害を最小限にするためにも個性をフル活用しないといけない。そこが街中だと仮定しましよう。それも商店街とかね。そしてその敵と地毒くんが対峙し、地毒くんの個性によつて商店街の半分が止むを得ず壊滅してしまつた。みんなはこれをどう思う？」

「半分の壊滅で済んだと。ボジティブに捉えた方がよろしいかと」

八百万ちゃんが手をあげて言えば、他の子たちもうんうんと頷いた。

「そうね。現にオールマイトやエンデヴァーもビル1つ丸々ダメにしただけで済んだ、なんてよくあるものね。それで話を戻すけど、みんながそこの商店街でお店を営んでいて、その崩壊に自分のお店が巻き込まれたらどう感じるかしら？」

この厳しい問いに誰もが口を閉ざす。

「そりやそうだ。ヒーローの活躍で命が救われたとしても、明日からの生活はどうしたらいいってなるんだから。」

「勿論、そうした被害は政府がきつちり無償で建築し直してくれるし、十分とまではいかないけど家族構成を考慮した上で支援金も再建期間中は支払われるし、近くの避難施設にも入れてくれるわ。でもだからって敵との戦闘の度に壊し回っていたら敵と大差ないのよ。それにね、世の中つて複雑で汚い人間もいるから、わざわざ敵に賄賂を渡して建て直し費用を浮かせるために暴れさせて、ヒーローに介入してもらつてつて手法まであつたの」

うーん。確かにそういう手法も取れるよな。

敵は拘束されて逮捕されるにしても、服役期間や釈放後のこととかも含めてしつかり取り決めてたら、お互いいいとこ取りも余裕でやれそうだし、そういうのを斡旋するビジネスも出来そう。

「そういった手法があつたのもあつて政府も即時再建に着手はするけど、審査委員会が調べつつ、今後10年は警察官が常時監視つて感じになるわ。勿論私服警官も含めてね。警察官が配備されることによつて一般市民は治安のために配備しているなんて思われるけど、それは事実ではあるけど根本は違うの。大人つて難しいでしょ？」

みんな顔色悪いね。高校生の1年で大人のこういう部分知ると何とも言えないよな。ある意味これがミツドナイト先生の優しさなんだろうけど。

「次に給金ね。ぶつちやけた話、ヒーローは歩合制よ」

ああ、だから原作だとヒーロー同士で区域区分明確にしてたのか。

給料に関わるならそうなるのも仕方ないよな。生きていくためだもの。

「ヒーローは警察からの依頼でパトロールをしているの。だから言い方は悪いけどパトロールをするだけでも月に最低でも20万は入るわ。そこから年金やら何やら引かれるから振り込まれる金額は少なくなるけどね。パトロールとはそもそも、敵犯罪をいち早く見つけて無力化するのもあるけど、一番の理由は一般市民に安心感を与えること。『ああ、ここはヒーローがいるから安全だ』つてね。守る側と守られる側の信頼関係がないと成り立たない。ご機嫌伺いだなんだつて思う子もいるだろうけど、それが社会よ。救いを求める際、安心感のある人とない人でどちらに救いを求めるかということね」

ベストジーニストが原作で爆豪くんに教えてくれていたことだな。

「あの、ミッドナイト先生！」
「はい、麗日さん」

「ヒーローになるとどれくらい儲かりますか!?」
「いい質問ね。ヒーローの給料はさつき言つた通り歩合制。逮捕協力や人命救助等の貢献度を申告し、専門機関の調査を経て金額が決まるわ。仮にパトロールだけをして、それがなりの区域を任せられたとすれば月の給料は年金等々を引いて約30万くらいね。これは事務所に属していない個人事業ヒーローを例としての金額よ」

ミッドナイト先生の答えに、麗日ちゃんは「こ、高収入や……」って零してたけど、他の子たちは意外そうな顔をしている子もいる。

「意外そうな顔をしてる子もいるわね。でもそれが現実。またサイドキックになると雇われた事務所の規模によつて給料も違うわ。事務所を持たないミルコなんかは丸々自分の懐に入るけど、確定申告とかそういう管理も自分でする必要がある。また事務所を持つてサイドキックを雇うとなれば、警察から支払われる依頼料や協力料も事務所の規模で変わってくるし、そこから雇つてるサイドキックたちに支払う形になるから数をこなさないと経営は常に火の車よ」

なるほどなあ。じゃあ独立しても軌道に乗るまでは自転車操業つて感じか。
「そこでヒーローに許されているのは副業。自分のグッズを売つたり、個性を活かして

ヒーローとは別の事業を起こしたり。そういうのも上手くいけば年収1000万も夢ではないわね。ウワバミなんかがいい例でしょ？ タレント活動でがつぽり儲けてるんだから」

「やつぱ、一番稼いでるのってオールマイトなんすか？」

「切島くん、いい質問。グッズ販売数やグッズの数でがつぽり儲けてるイメージもあるでしょうけど、実際のとこ一番稼いでるのはエンデヴアーよ」

俺はミッドナイト先生のさつきまでの話を聞いてなんとなく分かつたけど、みんな『ええ！』って驚いてる。しうくんもだ。

「エンデヴアーハーの事件解決数はオールマイトよりも多いし、その分警察から上乗せで給金が発生してる。事件解決の派手さならオールマイトでしようけど、数はエンデヴアーハーの方がダントツなの。それにさつき言った公共への損害も関わってるわ」

「損害によつて報酬額が減るのね？」

「蛙水さんの言う通り。だつてそうでしょ？ そのヒーローが壊したんだから、そのヒーローが責任を負う。大人なのだから当然のことよ。ビル1つ破壊してしまつたことによつて生じた経済的損害を考慮し、寧ろオールマイトやエンデヴアーハーは国にお金を支払つているんだから」

「だからヒーローの副業を認めて個人としてのヒーロー活動による給金がマイナスに

なつてもなんとか生活出来るようにしているのか。それにそれだけ大きな事件を解決すればヒーロー活動における給金はマイナスでも必ずニユースやネットにあがるからグッズを売つたりすればマイナス分は軽く出来るし寧ろ黒字に出来る可能性もあると
いうことに」

「緑谷くん、ミッドナイト先生の話まだ終わってないよ?」

「え、あ、すみません、先生!」

ブツブツモードに入っちゃった緑谷くんを止めると、緑谷くんはミッドナイト先生に謝つてブツブツモードを解除した。

「ありがとう、地毒くん。ごめんね)」

「(構わんよ)」

俺が返すとえへへつて緑谷くんは笑つた。はあああああ、かわいい。

「人は大きな事件に目を奪われる。でもそういう時こそヒーローは冷静でないといけない。それに感化されて活発化する敵もいるから、それを未然に防ぐことが大切なのよ。自己顯示欲を優先させたらヒーローとはいえそれは敵と同じこと。そうしたことを踏まえ、あなたたちには立派なヒーローになつてほしい。皆を指導する立場として、そして先輩ヒーローとして心から願つてるわ」

『はい!』

「うん、いいお返事ね。じゃあ話はここまでにして、次は実際にヒーローとして活動演習を行おうわね。入学前に送つてもらった個性届とそれぞれの要望によつて用意したコスチュームに着替えてもらつた上で、6・7 時限を使っての戦闘訓練よ」

『おおおおおおつ!!!』

うわあ、原作通り壁から出席番号が入つたコスチュームケース出てきた。本当に無駄に金かかつてゐるなあ。根津校長、金持ち過ぎてマジで怖い。

「コスチュームに着替えたら、グラウンドβに集まるように」

『はい！』

焦凍サイド

「白のヒーロースーツ、いいな」

「そうか？ ほぼしようくんと変わらないけど？」

「だからいいんだ」

「そう」

「ん♪」

これから本格的なヒーロー科の授業だつてのに、俺は別の意味で思わず気持ちが昂ぶつてる。

何せ俺と白のヒーロースーツがお揃いだからだ。

まだ実際に個性使つてないからこのスーツがどれだけ耐えられるか分かんねえけど、俺は全身白色のヒーロースーツ。白の名前の色だ。本当なら紫にしたかったが、白に『無難で白でよくね?』って言われたから。

白に至つては俺と同じデザインで黒色のヒーロースーツだ。

白とお揃いなのに喜ばねえ方がどうかしてる。

「今日の授業次第で改良点も見つかるだろうし、そういうのも見とかないとなー」

「改良、しちまうのか?」

「しないといけないもんだろ。動き難かつたり、個性使つてダメにしちやつたらさ」「むう」

「なんでもくれるの?」

「せつかくお揃いなのに……」

「ああ、はいはいお揃いで嬉しいのね。相変わらず小さい頃からそういうとこ変わんないね、しょうくんは」

宥めるように俺の頭をポンポンと撫でる白は困ったような笑顔を浮かべてた。

悪いな、白。その顔さえ見れれば、俺は満足だ。

だつて、

「まあ出来るだけデザインは変えないよ。てか俺はそういうセンスないから、安心しろ」

「分かった」

白のその顔は俺の願いを叶えてくれる顔だから。

被身子サイド

眼福！　まさに！　眼・福！

白刃様のヒーロースーツ姿！

神々しい！　尊みが深い！

焦凍とお揃つちなのがちょっと引っ掛かるけど、白刃様の方が断然似合ってるからイイ！

夢にまで見た運命の人（ヒーロー）のスーツ姿……ああ、私このまま今日幸せの過剰攝取で死んじやうかも。

ええい、ダメ。ダメダメ、被身子！

そうしたら白刃様が悲しんじやう！

それに私なんて白刃様の色のヒーロースーツにしちゃったもんねー！

まあ私の場合はヒーロースーツというか、ほぼ服なんだけど。

響香ちゃんとかエンデヴアーサンに相談して、リューキュウ先生みたいなドレススタイルのにしたの。あ、でもちゃんとスパツツも着用してるよ。私基本は体術戦法だから、これで走つたり飛んだりしたら下着見えちゃうもん。白刃様になら何を見られても嬉

しいだけだけど、その他の男の子たちに見られるのはちよつとね。

あ、勿論スーツの色は白刃様色で紫。襟の縁は灰色に近いシルバー。それとエンデヴァーさんが案をくれたサポートアイテムの刺されても気付かれ難い針ストローと足音を限りなく立てない素材で作られたブーツ。

今は私のことより白刃様だよ。

はあああああ、もうちゆき。いつぱいちゆき。

今日はこれだけでいい夢見れそう。

白刃様、今日もありがとう。

私は今日も貴方様のお陰で幸せです。

ヒーローって難しい。

仮のヒーロースーツを身にまとい、グラウンドβの前に集まつた俺たち。

ゲート前には既にミッドナイト先生が待ち構えていて、モニタリングが出来る場所まで案内してくれた。

「ここが待機所よ。指定しない限りは基本的に授業開始時はここに集まるように」

『はい！』

「それでお待ちかねの演習なんだけど、今回は救助活動訓練よ」

原作みたいにヒーローと敵に別れてやる実技演習じゃないのか。

でも人を救うのがヒーローなんだから、救助活動から教えるのが大切だよな。

「普段、グラウンドβは雑居ビルの街並みをイメージしているけど、見ての通り今はボロボロでしよう？」

ミッドナイト先生が言うように、確かにボロボロだ。

崩れてるビルなんかもあるし、本当に災害があつたあとみたいに見える。

「いつもならさっさと直してしまうんだけど、今回のためにそのままにしておいても

らったの。それでこのビル群の中に救助者を模したダミー人形が紛れてるから、それを探し出し、仮設救護スペースまで搬送すること

「救助者は何名なのでしょうか！」

飯田くんの質問にミッドナイト先生は不敵な笑みを浮かべた。

「今回は災害が起つた際の救助活動を想定しているから、救助者が何名なのかは教えて明かさないわ。多いのか、それとも少ないのか……あなたたち次第ね」
これ結構ハードだな。

それにどうせ、

「はい、では始め！」

やつぱ即始まりますよねー。

災害が起こる時に『今から災害起きますね』なんて予告されないもんな。

急なことで慌てる子たちもいるけど、冷静な子たちもいる。俺も予想はしていたのでどちらかといえば落ち着いていたられた。

「みんな、まずは複数のチームになつてくまなく救助者を探していくこう。グラウンドβを縦に三等分して3チーム……いや、中央は大きな建物が多いから2チームを割いて、計4チームになつて行動しよう

「何勝手に仕切つてんだ、毒野郎」

「今授業中。そしてリアルな災害現場なら言い争つてる暇はないし、既に駆けつけてるヒーローと協力することになるから、んなこと言つてられないぞ。爆豪、何人か連れて左側を頼む」

「チツ……行くぞ、デク！　あとクソ髪とアホ面、しようゆ顔！　それと丸顔もさつさと来い」

「クソ髪つて俺かよ!?」

「アホ面!?　なあ、俺アホ面なの!?」

「しようゆつて！　俺どつちかと言えば塩じやね!?」

「丸顔つて私い!?」

「黙つてついて来いや、クソモブ共が！」

「かつちやん、そんな言い方ダメだよ！　ごめんね、みんな！　かつちやん、言葉が荒いだけで心は優しいから！　捨て猫を放つておけなくて拾つてきちゃうヤンキータイプだから！」

「てめえは黙つてついて来いや、クソナード！」

舌打ちはされたけど、爆豪くんは俺の言葉に従つて緑谷くん、切島くん、上鳴くん、瀬呂くん、麗日ちゃんを連れて行動を開始してくれた。何気に24人を4で割つた人数を連れてつてくれるどこが爆豪くんの頭の良さを感じる。

「八百万ちゃんと飯田くんも、何名か連れて中央の探索をお願いしてもいい?」

「分かりましたわ!」

「分かった!」

「あ、なら俺は八百万のところに……」

「峰田くんは俺のところね」

「何い!?」

峰田くん、ごめんね。でもエロとヒーローは授業中くらいは切り離してほしいのさ。

八百万ちゃんは青山くん、蛙水ちゃん、芦戸ちゃん、常闇くん、葉隠ちゃんを、飯田くんは尾白くん、砂糖くん、障子くん、口田くん、夜嵐くんとそれぞれ連れて行動を開始。

「んじや、残りの俺たちで右側な。行こう!」

「ああ」

「行きましょう行きましょう! 白刃様♡」

因みに俺のところはいつもの一人に加えて、響香ちゃん、心操くん、峰田くんだ。

「自分で言うのもアレだけど、救助者は人形だからウチの探知には引っ掛からないと思う。ごめん」

「大丈夫大丈夫。あんまりそうなつてほしくないけど、実際の災害時には響香ちゃんの個性はかなり必要とされるから」

「そうだよ。私なんて変身することしか出来ないんだから！」

「俺もどつちかと言うと救助活動には向かない個性だからな」

謝る響香ちゃんに俺やしうくん、被身子ちゃんが声をかけると、ちょっと自信を持てたのか笑顔を見せた。

「こういう場合は峰田くんの個性が活けるだろ。そのもぎもぎって何でもくつつくんだよね？」

「おうよ！」

「なら仮に倒壊しそうな場所でもそれで繋ぎ止められるし、それを使って救助者を固定することも可能だよね」

「おお！ んなこと考えたことなかつたぜ！」

「あと心操くんの個性も救助者を落ち着かせるのに良さそうだよね」

「……そんなこと初めて言われたよ」

「そう？」

「ああ、どつちかつて言えば敵向きだろ、俺は」

「それはその個性を使う人によるよ。俺だって個性だけ見れば敵向きだ。でも心操くん

はヒーロー科にいるんだから、敵になることなんてないでしょ。それに言い方は悪いけど救助者を洗脳して強制的に黙らせることが可能でしょ？」

「……まあ、そうだな」

「ほら。特に災害時は救助する側もされる側も冷静になつてほしい場面つてあるだろ？そんな時に言うこと聞いてもらえなかつたら心操くんがいれば万事解決な訳よ」

「……そつか」

あ、心操くん照れてる？ そっぽ向いちやつて、かわいいんだからあ♪

「響香ちゃん、念の為片つ端から探知してつてくれない？ ダミー人形がどんなのか分からぬいし、もしかしたら本当に救助を求めてる人みたいに何かしらアクション起こす仕様だつたりするかもだから」

「分かつた」

「あ、おい、あのビルの窓にダミー人形あるぜ！」

「おお、よく見つけたね峰田くん。じゃあもぎもぎ使つてよじ登つて確保してきて」

「それは出来つけど、確保したらどうすんだよ？」

「しきょうくんが氷で滑り台作るから、一緒に滑つておいで。俺と心操くんでキャッチするから」

「楽しそう！」

「いや、頼むから楽しまないで。これ訓練だから」

「白刃、なんかこっちのビル内から発信器っぽい音する」

「了解。発信器の音はどんな感じ?」

「ピーピーピーって平坦な感じ」

「切羽詰まってる感はないから、取り敢えず先に見つけたダミー人形を優先しようか」

「こんな感じで俺たちは、ダミー人形を一体ずつ丁寧に確保していき、計17体を救護スペースに搬送した。」

因みに搬送の際は、ようくんの作つた氷の道を使つて、俺に変身した被身子ちゃんがスケートするみたいに素早く運んでくれた。被身子ちゃんつて身軽だからこういうの得意なんだよね。

「はい、みんなお疲れ様! 最初にしてはいいチームワークだったわよ! 明日には私や他の先生たちで訓練の様子を見た総評を渡すからしっかりと目を通すこと!」
『はい!』

「それじゃあ着替えてきなさい。あ、緑谷くんはリカバリーガールのところに行つて怪我を治してもらいたいなさいね」

「は、はい!」

あれ、緑谷くんどうしたんだ？

「ごめんね、デクくん。私がどんくさいせいで……」

「いやいや、気にしないでよ、麗日さん。ちょっとかつちやんが張り切り過ぎただけだから」

「聞こえてんぞ、デク？」

「あ、いや、かつちやんのせいじゃないから！」

「当たり前だ！ あれくらいてめえなら丸顔抱えて避けられただろうが！」

「で、でも女の子に、ふふふ、触れるのはははは……」

「災害時にんなこと考えてヒーローやってられつかクソが！」

「いやー、かつちやん怒らないでー！」

「デクくん、そんな女の子扱いされたら……私まで恥ずかしくなつてまう……」

「ほほーん？」 爆豪くんが張り切った結果、爆発に巻き込まれそうになつた麗日ちゃんを緑谷くんが身を呈して守つた、と。

女の子扱いされて麗日ちゃんもまんざらでもなさそудだし、甘酸っぱいねえ。
ミッドナイト先生なんて「これはアオハルの予感！」つて怪しい笑いしてる。

「白、更衣室行こう」

「おお、行くか」

「私も行くー♪」

「いや、被身子ちゃん、もう変身解いてよ」

「えー」

「えーじゃありません」

ナチュラルに男子更衣室にまでついてきそうな被身子ちゃんを注意して、響香ちゃんに預け、俺はしようくんや他の男子たちと着替えに行つた。

それからは普通に帰りのホームルームで香山先生から明日の連絡事項を聞いて解散となつたが、みんなでそのまま教室に残つて今回の救助活動の反省会。

主に次からこうしたらいいんじゃないか、こういう時は誰の個性がいいとか、そういうのを話しあつた。

一番役に立つたのは緑谷くんのヒーローノート（爆豪くん曰くナードノート）で、早速みんなの個性の活かし方や既存ヒーローの使うサポータイトアイテムでその子に合いそうなアイテムの考察とかがみつちり書かれてて、みんな緑谷くんを絶賛してたね。

緑谷くんはお顔真っ赤にして照れてたけど。爆豪くんに至つてはキレ散らかすのかと思つたら、幼馴染みがみんなから褒められて小さく笑つてた。
んもお、何さこのデク勝！ 尊みが深いんだけど！

てことで俺はほくほくして過ごしましたとき。

人使サイド

夢だつた雄英のヒーロー科に入れたまではいいけど、正直ついていけねえだろつて思つてた。

なんたつて俺の個性は『洗脳』。

自他共に認める敵向きの個性だし、身体能力も下から數えた方が早い。

今日は初めてヒーロー科の授業。

ミツドナイト先生のリアルな話で余計に俺はヒーローに向いてないと思つた。
そんでもつて救助活動訓練とくれば、俺に出来ることは何もない。

クラスの中心的人々らが行動を開始する中、俺は最後まで残つてた。

当然だよな。お荷物なんていらねえだろ。

俺を連れてくことになつた地毒たちには悪いと思つた。役立たずだから。

すると地毒と親しいっぽい耳郎つて子が地毒に謝り出した。

そいつも今回の授業で自分の個性は意味ないつて思つたみたいだ。

でも地毒は気にしてないらしい。寧ろ実際の時にこそ活きる個性だつて励ましてた。

地毒白刃。

第一印象はいいとこのお坊っちゃんでお人好し。

ほしいものは全部持つてる勝ち組。

俺とは雲泥の差だ。

そんなこと考えてたら地毒に俺の個性も災害時に使えるなんて言い出した。正直驚いた。確かに自己紹介の時に個性のことは伝えたが、俺以上に地毒は俺の個性の使い方をいい方に考えてくれてる。

自分の個性なのに、地毒に言われるまでそんな使い方があるのなんて考えもしなかった。

そういうえば、地毒は自己紹介で『敵向きの個性だけど、両親を見倣つていいことに使えるように生きてきた』なんて言つてたな。

個性の使い方次第。なんで今までそれに気が付かなかつたんだろう。

地毒白刃。お前のお陰で、少し自分の個性の可能性つてのが見えてきたよ——
ありがとう、ヒーロー——

——お前みたいになれるように、絶対ヒーロー科に残つてやる。

勝己サイド

俺がライバルとして認めてる人間は二人いる。

一人はデクだ。ガキの頃から俺の隣で、この俺様についてこれたヤツ。
そしてもう一人は毒野郎こと地毒白刃だ。

見た感じはフツー。んでもつて別に頭がいいタイプでもねえ。

ただどんな時でも冷静で頭がキレる。

要領がいいタイプの人種だ。

今回の授業でも一瞬固まつちまつた俺より先にアイツが動いた。

仕切りやがったのはムカつくが、アイツみたいなタイプは司令塔にちょうどいい。何より一番倒壊して左側に俺を向かわせるくらいだ。

お人好しに見えて周りの人間をよく見てやがる、底が知れねえ。

アイツがヒーローになるなら、俺のサイドキックに雇つてやつてもいい。
それになにより――

おにぎりが美味い

――こういうヤツに悪いヤツはいねえ。

久々にババアの次に美味しいと思えた。

あとで強引にでも連絡先交換させてやる。

ミッドナイトサイド

今年のヒーロー科1年A組は、担任としての巣廻目ではなく、黄金世代と言つても過言じやない。

特に地毒くんなんかは本当に。

彼が動くことでどこの子も冷静さを取り戻すし、彼の言葉で己の個性の可能性をより

深めていく。

それに加えて緑谷くんなんかもいい着眼点を持つてるから、そういう子が二人もいるだなんて最高以外の何ものでもないわ。

ああ、頑張つて根津校長にA組の担任やりたいアピールしてよかつたわ！

あのつまらな……んんっ！ 有り難くて長ーいお話に何時間も、累計数十時間も耐え忍んだ甲斐があるつてもんよ！

「失礼します。1のA、地毒白刃です。香山先生はいますか？」

「同じく心操人使です」

あら、珍しい組み合わせね。

でも何か青臭いアオハルのかほりがするわ！

「はーい、先生はこつちよー」

手をあげれば、二人は他の先生たちにも挨拶をしながら私のところへやつてくる。

「要件は何かしら？」

「はい。心操くんのサポートアイテムについてです」

「サポートアイテム？」

「はい。心操くんの個性をより有効にするために必要なので、緑谷くんと話し合って案を出したので、先生に検討してもらいたくて」

「なるほど。で、その案つていうのは?」

私が促すと心操くんが「これです」と言つて案が書かれたルーズリーフを渡してくる。ザッと目を通したけど、

「……面白いわね」

本当に何なの今年の1年A組は。

簡単に言えば、どこぞの小さくなつた名探偵が使つてるような変声器ね。精度の良い物を作ればそれだけ心操くんの個性に掛かりやすい。

「こういうのがあれば、心操くんの返事をされないと洗脳出来ないっていうデメリットを少しでも軽減出来ると思うんです」

「可能性が広がるなら試してみたいんです。なのでこういうサポートアイテムを得意とするメーカーか、興味を持つてくれそうなメーカーを教えてください」

うわあ、なんて情熱的な眼差し！　いいわ！　すつごくいい！　青臭くて、貪欲で！

「なら私がパワーローダー先生に掛け合つてみるわ。これだけいい案だもの。試さないのはもつたいたいものね！」

私が言えば二人は大きな声で『ありがとうございます！』なんて言つてくる。

くう、これよ！　これ！　私が求めていたアオハル！　こういうのが見たくて教師になつたんだもの！

二人が職員室から去つていくのを見送ったあとで、

「ねえ、今の見た？　見てたわよね？　最高じゃない？　まだ入学ホヤホヤのくせに、もう己の個性を高めようとしてるガキ共の青臭さ！」

前のデスクにいるセメントスに興奮気味に言っちゃつたわ！」

「え、ええ、ああいう向上心はいいことですよね……」

「でしよう！？」ああ、ほんとに教師になつてよかつたわ！」

「ミッドナイト先生、分かりましたから早くパワーローダー先生のところにそれを持つて行つた方がいいのでは？」

「はつ！　そうね！　それじや行つてくるわ！」

パワーローダー先生だつてこれを見れば興味が湧くはずだから、上手くいけば数日後には勝手に自作した試作品を持つてくれるはずだもの！

待つていなさい心操くん！　あなたの青臭いアオハルを先生がもつと輝かせてあげるから！

ああ、もう！　本当に今年の1年A組は黄金世代よ！

相変わらず平和です。

時が過ぎるのは早い。

入学してもう5月ですよ。

え？ クラス委員長は誰に決まつたのかって？

飯田くんだよ、飯田くん！ 当然じやん！

でも香山先生は推薦形式だった。

俺は当然、原作通りに飯田くんを委員長に推薦したら、みんなも『地毒が言うなら飯田が適任だな』ってなつて決まつちやつた。

しようくんと被身子ちゃんのせいで副委員長になりかけたけど、推薦する側は一人だけ推薦するなんてルールもなかつたから、八百万ちゃんを副委員長に推薦したら、飯田くんの時と同じになつちやつた。

いや原作通りだしいいんだけどさ。飯田くんも八百万ちゃんも俺にすげえ目を輝かせて『期待に応えるぞ（ますわ）！』ってやる気に燃えてた。

精神年齢おじいちやんの俺には若い子のフレツシユさは眩し過ぎるよ。

やつぱり俺が転生したこのヒロアカ世界は、俺が転生前に読んでた原作と違つて、雄英高校にマスゴミが侵入するなんて騒動もなかつたし、13号先生が手掛けたU.S.Jでのレスキュー訓練もなかつた。

ひたすら色んなグラウンドでチームに分かれて仮想敵ロボの鎮圧とか個性を高める訓練がメイン。

あ、心操くんのサポートアイテムは俺が失念してたのもあつて当初のやつは使い物にならなくて、パワーローダー先生が考えたサポートアイテムに落ち着いた。

まんまペルソナコードだつたし、心操くんも笑顔になつてたし、よし！

んで、今日から雄英高校に入つて初めてのゴールデンウイークなんだな。

日頃ハード……いやヘルモードの学校生活だから、こういう大型連休つて本当に最高すつわ。

宿題は多いけど、初日にしようくんや被身子ちゃん、響香ちゃんと済ませちやつたもんね！

てことでゴールデンウイークを満喫する気満々ですよ。

「お兄ちゃん！」

「ぐふかすたむつ！」

昼まで寝る気満々だったのに、天使のフライングボデープレスで強制起床させられる

俺。

「……妹よ、疲れたろう。僕も疲れたんだ。なんだか、とても眠いんだ……」「あたし疲れてない！ お兄ちゃんがいるもん！ 起きて遊ぼー！」

「今何時？」

「6時！」

「いつも通りではないか、妹よ。休日ということを忘れてはいるのか？」

「お休みだから遊ぶの！ お兄ちゃんはあたしのだもん！」

などというジャイアニズム。兄は妹の将来が心配だ。

でもぶつちやけ黒刃には俺しかいないんだよな。

当然、父さんや母さんが黒刃に愛情を注いでいないなんてことはないし、寧ろ溺愛してゐる。

でも医者という職柄、あまり家にいれる時間がない。休日でも祝日でもうちの両親じやないと手に負えない急患が搬送されて来たら、両親は必ずその人を救うために病院へ向かう。

だから基本的に轟家で預かってもらつて、俺が学校から帰れば俺が出来る限り黒刃の世話をした。

なので黒刃にとつて兄（俺）は両親よりも大好きな存在で、唯一無二なのだ。

前に母さんが『私の料理より白刃の料理が食べたいって言われた時はショックだつたわ』なんて言われた。

黒刃にとつてはおふくろの味は俺の味になつてしまつてゐる。

かくいう俺もおふくろの味は冷母さんの料理の味なのだが……。

母親としては悲しいのかもしけないけど、俺も黒刃も両親から愛情を注がれてないなんて思つてない。

小学生の時に一度だけ父さんから『もっとわがままを言つてもいいんだぞ?』なんて言われたことがある。

聞き分けがいいのはそれだけ我慢させていることでもあるんだと。

ごめん、父さん。それは俺がただ単に精神年齢おじいちゃんだからです。我慢してないし、寧ろ無邪気に甘えられるメンタル持つてません!

だから『じゃあ、ハグして』つて精一杯甘えてみたら、泣きながらめつちや抱きしめられて焦つた。

変に前の記憶がある上で甘えるつて本当に難しいんだよね。

「黒刃はお友達連れてきたり、お友達の家に遊びに行つたりしないのか?」

「今日はしない!」

良かつた。黒刃はボツチじやなかつた。何気心配してたんだよな。普段からヒー

口一科のことと忙しくて黒刃の話を聞くより、黒刃が俺に色々と訊いてくる方が多いから。

「まあ取り敢えず起きるか……朝飯は何食べたい？」

「ごちやごちやたまご！」

「はいよ」

俺が返事をしつつ黒刃の頭をポンポンと撫でれば、黒刃はにこーっと満面の笑みを浮かべて俺の上から退いた。因みに「ごちやごちやたまご」とはスクランブルエッグのことだ。

てことで俺は適当な服に着替えて黒刃と共に1階のリビングへ向かう。



「おはよう、白」

「おはよう、しようくん」

当然のように我が家リビングでソファーに腰を下ろして新聞を読んでいる幼馴染み。

もうナチュラル過ぎて慣れてしまっている自分がいる。

というか、俺の隣にいないこの方が年に数回あるかないかだからね。

「いつ来たんだ？」

「ついさつきだ。おじさんとおばさんは病院行つたぞ。午後には帰るみたいだ」

「番犬がいるなら家空けても安心だもんな」

「俺はいつの間にか白のペツトだつたのか。その割には可愛がつてくれねえな。ペツトは責任持つてお世話しないといけないんだぞ？」

「うん。今日のしようくんも天然ボケキレキレでお兄さん泣いちゃいそう」

「俺はキレてないぞ？ 寧ろ喜んでる」

「はいはい。朝飯食うだろ？」

俺の質問にしようくんはコクリと頷いて返した。

「犬だつたら絶対尻尾ブンブンなんだろうな。」

「焦凍はお兄ちゃんに何か用事？」

俺が台所で朝飯を作つている中、黒刃はしようくんの隣に座つて質問する。
「用事がねえと来ちゃいけねえのか？」

対してしようくんはイケメンだけが許されるセリフを決めた。

普通の女の子なら胸キュンするだろうけど、

「うん。用事ないなら帰つて。朝ご飯は食べてつてもいいから」

黒刃にはそんなもん通じないんだよなあ。

黒刃にとつてはしようくんは幼い頃から兄を自分から攫つしていくから、敵認定してる

節がある。

「なんでそんなこと黒に決められなきやならねえんだ？」

「今日のお兄ちゃんはあたしだけだから。焦凍に構つてる暇ないの」

「白がんなこと認める訳ねえだろ。妹なんだし俺より白と過ごせる時間あるんだから譲れ」

「学校も一緒なんだからあたしに譲るべき。年上のくせに」

「んなこと言つたら年下のくせに先輩の言うこと聞けよ」

「焦凍は年上っぽくない」

「黒だつて年下とは思えねえ」

火花バチバチで静かに言い争う幼馴染みと妹。

ねえ、やめて？ 朝っぱらから殺伐とした雰囲気出さないで？ 僕は平和の中で朝飯食べたいの。

「白！」

「お兄ちゃん！」

ほらね。結局俺が決めないといけなくなる。

やめてよ。どっちの味方しても俺にメリットないんだもん。誰かヒーロー呼んでくれ。

「おはようございまーす♪」

信じる者は救われる。

「ううう。信じてさえいれば、必ずヒーローが救いに来てくれるんだ！」

「被身子ちゃん、会いたかったよ！」

「ひゅい!?」

「ありがとうございます。（救いに）来ててくれて本当にありがとうございます！」

「ど、どういたしまして……いひひひひひ！」

俺の心からのお礼に被身子ちゃんは緩んだ頬を両手で包んでくねくねする。被身子ちゃんの喜びの舞だ。

「被身子ちゃん、おはよー！ 焦凍を追い返すの手伝つて！」

「ふえ？」

「被身子。お前なら俺の味方してくれるよな？ 黒が白と俺の仲を引き裂こうとしてくるんだ」

「…………」

「ようくんの言葉に被身子ちゃんはスンッと表情を落とし、無言のまま黒刃の隣に移動。つまり、

「焦凍、白刃様は焦凍だけのじやないよ？」

「被身子ちゃんは黒刃の味方になつたということ。

「被身子、てめえ……」

「あのさ、昼ドラ展開？みたいなとこ悪いんだが、朝飯出来たから食べようよ」
こうなるともう収集つかないので、俺は朝飯に逃げる。

そうすれば黒刃もしようくんもご飯にまつしぐらだ。欲望に忠実で実に結構。

「被身子ちゃんは……施設で朝飯食べてきたか」

「はい♪ あ、食べさせてあげようか？」

「大丈夫。気持ちだけ受け取るね」

「口移ししてみたかったのに……」

「俺にそういうことしなくていいから……」

なんか年々被身子ちゃんの俺に対する扱いが重たくなつていくな。過保護どころ
じゃない。

というか、被身子ちゃんが俺の家に当たり前のように上がつてきてるのもデフォと化
してるな！」。

「それで、被身子ちゃんもしようくんと同じように俺と一緒に過ごしたい感じ？」

言つててかなり自意識過剰マンで嫌なんだけど、しようくんも被身子ちゃんも基本的
に用事があろうがなかろうが俺の側にいたがるからね。

「あ、ううん。今日は用事があるの」

「おお、どんな?」

「白刃様じやなくて焦凍になんだあ。ごめんね、白刃様」

「謝る必要ないよ」

そう言つて被身子ちゃんの頭を撫でると、被身子ちゃんは「うひひ♡」と破顔した。

「俺に何の用だ、被身子?」

「今日焦凍暇でしょ?」

「暇じやねえ。白といる」

「暇だね。実は今日お茶子ちゃんと単発でアルバイトするの。それでもう一人連れてこ
れないかつてアルバイト先の人に昨日言われたんだあ」

「それでどうして俺なんだよ?」

「お蕎麦屋さんのアルバイトだから」

「まかない飯は?」

「いや、しようくん。そこ仕事内容聞こ?」

「お蕎麦食べ放題」

「いく」

「しようくん……。ホント君お蕎麦大好きつ子だね。瞳輝いてますやん。かわいい

なあもう。

「やつた♪ じやあ服装はそれでいいから、ご飯食べたら行こー！」

「ああ。今食い終わる。白、悪いが行つてくる」

「気にせず行つてこーい」

「でも俺は白との友情より蕎麦を取つたんじやないからな？」

「分かつてる分かつてる。お蕎麦と俺どっちが大事なの？みたいなカオスなこと聞かな
いから」

「白に決まつてる。蕎麦はいつでも吃えるが、白との時間は限られてるからな」

「イケメンスイティーボイスで囁かないで。お耳が幸せになつちやう！」

俺の言葉にしようくんは満足したのか、フツと得意げに笑つた。

当然のようくに被身子ちゃんや黒刃も張り合つてきたので、お耳が幸せになつて浄化し
かけた。

◇

ということで、被身子ちゃんがしようくんを連れ出してくれたので、俺は洗い物を終
えて黒刃と共に縁側へ。

黒刃は特等席であるあぐらをかく俺の脚の隙間に腰を下ろして、上機嫌に足をパタパ
タさせてる。

「焦凍はちゃんとアルバイト出来るのかな？」

「注文受けて伝えるのと、料理運ぶのと、食器下げるのくらいだつたら問題なく出来るだろう。そもそも洗い物係かもしれないし」

「そつか！」

「なんだかんだしようくんのことは心配してるんだよな。子どもに心配されてるしようくんもしようくんだが……。」

そんなことを考えながら俺が上半身を後ろに倒すと、黒刃もそのまま倒れる。

「いい天気だなあ」

「いい天気♪♪」

「おっす、お二人さん」

突如聞こえてきた声に俺と黒刃が同時に頭だけをあげて声の主を見ると、

「あはは、ホント一人つてそつくりだね……ははは♪」

「あ、響香お姉ちゃん！」

「響香ちゃん、やつほー」

「響香ちゃんがいた。

肩にはいつものようにギターケースがある。

「あれ、今日つて午前中にレッスンだつた？」

俺の質問に響香ちゃんは「ううん」と首を横に振る。

「レツスンは午後からなんだけど、ウチ今日特にやることもなかつたから。お邪魔だつたかな？」

「響香お姉ちゃんならいいよ！」

「ホント、黒刃ちゃん？ 嬉しいなあ♪」

黒刃はギターを習い出してから響香ちゃんに凄く懐いた。
まあ被身子ちゃんにもよく懐いてるから、やつぱり同性つてなると接しやすいのか
な。

「白刃、せつかくだしセッションしない？」

「ハーモニカと篠笛、どつちやればいい？」

「この前ハーモニカやつてもらつたし、今日は篠笛で♪」

「はいよー」

「あたしが持つてくる！」

「ありがとな、黒刃」

「うん！」

そうやつてすぐに黒刃が篠笛を持つてくると、俺は響香ちゃんのアコースティックギターに合わせて、篠笛に息を吹き込み、黒刃は楽しそうに手を叩いて穏やかな休日を過

ごした。

被身子サイド

響香ちゃん、少しでも白刃様との仲を縮められたかなあ？

私は昨日の夜に今日のアルバイト先から連絡をもらつた時点で焦凍を連れて行くことを決めていた。

だつてそうすれば響香ちゃんが誰にも邪魔されずに白刃様と過ごせるもん。あ、ちゃんと黒刃ちゃんも響香ちゃんが白刃様のこと好きなの知つてて、協力してくれるよ。

響香ちゃんみたいなお姉ちゃんが欲しいんだつて。かあいい♡

でも響香ちゃんって意外と奥手だからなあ。白刃様は響香ちゃんの好意に気づいてなさそうだし、まだまだ道は遠いかも……。

というか今は、

「被身子ちゃん！ 5番テーブルの天盛りと野菜天盛り出来たで！ それと7番テーブル空いたから次のお客さんご案内して！」

「はーい！」

すつごく忙しいんだけど！

焦凍は愛想笑いも出来ないから接客も出来ないし、洗い物も素早く出来ないから、お

店の前で客引きしてるんだけど、あの顔に釣られてくる女性客がいっぱいなんだよ！

お茶子ちゃんも『イケメンつてすごいわ』って感心してた。

「いやあ、うちの店にこんなに女性客来るの初めてだ」

「嬉しいわねえ♪」

お蕎麦屋さんのご夫婦は嬉しそうだけど、動かしてる手はめちゃくちゃ早い。

「お会計お願ひしまーす」

「はーい！ 只今ー！」

「お次のお客様、6番テーブルにどうぞですー！」

「はーい」

「忙しそうだな。俺も何か——」

『焦凍（轟くん）はそのままでー！』

「お、そうか」

授業とはまた違う疲れを感じたけど、終わつた時にお給金に色つけてもらえて、お茶子ちゃんは喜んでた。そして『やっぱりイケメンつてすごいわ』ってつぶやいてた。分かるよ、その気持ち。

でも忙しかつたけど初めてのアルバイト楽しかつた！

平和つていいよね。

ビッグイベントである雄英体育祭が終わつた。

1位はしようくん。2位は爆豪くん。3位は緑谷くんと常闇くん。

俺は最後のトーナメント戦で常闇くんに負けちやつた。

毒を使つて相手の行動を無効化！なんて考えたりもしたけど、それじや流石に……つてなつたから肉弾戦で真っ向勝負した結果だ。悔いはない。

そもそもトーナメント戦まで行く予定もなかつたのに、しようくんが捨てられた子犬みたいな目で『一緒に1位目指さないのか？』って訴えてくるから抗えなかつたんだよ！

まあとにかく俺のことはいいんですよ。本作のキャラたちが活躍してくれればそれで。

メダル授与式に呼ばれたヒーローはオールマイトとエンデヴァーだつた。

エンデヴァーがしようくんに試合内容のこと嫌味や文句でも言つたら、控室行つてスネにローキックかますつもりだつたけど、普通に公私混同せずに「おめでとう」つて

言つてたし、しようくんも「おう」つて普段通りに返してたから俺はホッとした。家に帰つても「特に何もなかつた」つてしようくんから聞いたし。

あと原作であれだけヤバかつた爆豪くんは本気のしようくんと戦つて負けたから、悔し涙は流してたけどどこかスッキリした表情をしてたから、なんか親の気持ちみたいな気分でほっこりしたよ。いいよね、若い子の成長つて。

つーことで今日も今日とて、

「爆豪、早くゴールしてくれ」

「指図すんな、紅白頭！ そもそもてめえが初っ端ハワイなんて引き当てつからこうなつてんだろうが！ ゴールしてくれとか言つてるが、てめえ東京のとこくるくる回つてるだけじゃねえか！」

「馬鹿だな爆豪。誰かがゴールすれば次の目的地が決まるだろ？ そうしたらハワイ付近だと次が面倒じやねえか」

「なあに得意げに言つてんだよ！ それを全員で目指すゲームだろが！ つか一度もゴールせずに決算来るとか初めてだわ！ そもそもたつた5年の設定にしといて見据える先遠過ぎんだよ！」

「ごめんね、かつちやん……僕がサイコロの運が悪いばかりに……」

「てめえはてめえで勝手に自己嫌悪に陥つてんじやねえ！ んでもつてぶつ飛びして自

滅してんだからサイコロ関係ねえだろが！」

「あつ、あたしゴール出来た！」

「やつたね黒刃ちゃん♪」

「運いいねえ♪」

「チビは人のゴールを横からかつさらつてんじやねええええっ！」

平和（？）に休日を過ごしますよー。

あ、因みに今いつものように轟家に来てる。俺と黒刃、しちゅうくん、被身子ちゃんに加えて、響香ちゃん、爆豪くん、緑谷くんがいるお。

ら『首洗つて待つてろ！』つてことで遊びに来たの。

2連休だから被身子ちゃんも響香ちゃんも轟家にお泊まり。いつものことだけど俺も黒刃もだ。

「いやあ、やっぱり面倒見のいい爆豪いると楽でいいわあ」

「あ”あ”ん?”

「あ、つい心の声が」

「毒野郎……元はと言やあ、てめえが遊び来いって言つといてノープランなのが元凶だ

ろう？」

わあ、いい笑顔。精神年齢がおじいちゃんじゃなかつたらちびつてたわ。

「だからゲームしてんじやん」

「てめえはしてねえだろ！ つかなんでこんなレトロゲーなんだよ！」

「え、かつちゃんレトロゲー出来ないの？ ザツコザコなの？」

「あと4年で一番金稼いで他の奴ら地獄に叩き込んで爆殺してやるわ！ つかかつちゃん言うな！」

「あ、ごめんかつちゃん。妨害のカードの相手、ランダムにしたらかつちゃんになつちやつた」

「デエクウウウッ！ ゲームの中で地獄に落としたらあ！」

うわあ、緑谷くん。ランダムとはいええぐつ。爆豪くんとこの金ごつそりもつてつた。

爆豪くんは爆豪くんで相変わらずキレ散らかしてると、報復はゲーム内でするつてのが優しい。まさに優しさの権化。勝デク最高っすわ。

そんな感じで爆豪くんはついてなかつたのか、散々な結果でマイナス50億でぶつちぎりの最下位。

当然ムキになつた爆豪くんがリベンジマッチすることになつて、今度は50億稼いで1位を取つた。

「爆豪つていつも怒鳴つてるけど、喉枯れないの凄いよな」

「あ” あ” ん?”

「ねえ、爆豪くん、今日ゲーム始めてから俺との会話で俺への最初の返事が絶対『あ” あ” ん”』から始まるのは何か拘りがあるの？」

「んなもんねえよ、クソが！ あとくん付けやめろ！」

「かつちやんは集中してる時に話しかけると基本「あ” あ” ん”」なんだ。でも放つておいて欲しい時は「あ?”で、機嫌がいい時は「ああん?’だから慣れれば分かりやすいよ」

「てめえは何得意げに俺様のこと語つてんだ、クソデク！ つかキモいんだよ！ 寒気したわ！ 鳥肌立つたわ！」

「……焼き鳥食いてえな」

「人の鳥肌で焼き鳥食いてえとかどんだけめでてえ頭してんだよ、紅白頭！ めでてえのは髪色だけにしどけや！」

「爆豪くんツツコミ担当つて感じでいいなあ。というかしようくんも緑谷くんも天然だから、ツツコミたくなるんだろうなあ、彼の性格的に。

「そういやもう夕方だもんな。爆豪たちも飯食つてくれ？」

「おい、毒野郎。てめえの家じやねえだろ」

「何言つてんだ爆豪。白は俺ん家の子も同然だ。ずっと俺と一緒に生活して来たんだからな」

「てめえはてめえでなんで得意げなんだよ……！」

あの爆豪くんがツツコミ疲れていらっしやる！

いやまあ仕方ないか。13時から今までずつとツツコミ通しだつたもの。おかげで俺はかなり休日を満喫出来たよ。ありがとう、爆豪くん。

「てめえ 今なんか腹立つこと考えてなかつたか？」

「そんなはずがございません」

「チツ」

舌打ちされたけど、なんか爆豪くんからの舌打ちって嬉しいんだよな。友達になれたんだなつて感じがして。

「白、焼き鳥……」

「ああ、はいはい。ちょっと待つてね。んで、話逸れちゃつたけど、爆豪くんたちは飯食つてくる？」

「今ババアに連絡入れる」

「あ、僕も」

「はいなー」

てことで二人が連絡を入れ、お許しが出たので早速近くの商店街に行つて焼き鳥を買
い、轟家で夕飯を食べたとさ。
緑谷くんは炎司さんと燈矢兄が帰つてきた瞬間に感涙してサイン貰つてたのが可愛
かつたまる。

被身子サイド

今日は響香ちゃんと黒刃ちゃんと私でお泊まり会♪
本当なら私も白刃様のお部屋で一緒にいたかったけど、今日は響香ちゃんのためのお
泊まり会だから我慢！

爆豪くんと緑谷くんが遊びに来たのは驚いたけど、みんなでわいわいゲームしてて普
通で楽しかつた♪

二人はお泊まりしないで帰っちゃつたけど、私たちはここからが本番なの！

「響香お姉ちゃん、あたし、ガツカリだよ」

「…………」

うわあ、黒刃ちゃん激怒だあ。

まあ仕方ないかも。

今日のお泊まり会はお泊まり会でも、本当の狙いは少しでも白刃様と響香ちゃんをお
近づきにすること。

だから白刃様が爆豪くんと緑谷くんを遊びに誘った時点で雲行きが怪しくなったんだけど、

「私も黒刃ちゃんと同じ意見かなー」

「…………」

今日チャンスいっぱいあつたのに、響香ちゃん何もしなかつたんだよ！
例えればみんなゲームに熱中してる時。

男の子たちは当然ゲームに夢中で、白刃様だけは長座布団に寝転がつてそれを楽しそうに眺めてたの。

だから私も黒刃ちゃんも何度も『おやつ買いに行くとかで二人で行つてきて』って提案したのに、響香ちゃんが恥ずかしがり屋さんなばつかりにチャンスを掴めなかつたんだあ。

「二人には悪いと思つてるよ？ でもさ——」

「デモもストもないよ！ 韶香お姉ちゃんが動かないとお姉ちゃんの気持ち、お兄ちゃんじや分からんもん！」

「……はい」

黒刃ちゃんが大きく見える。かあいい。
響香ちゃんも小さく見えて、かあいい。

「あのね、お兄ちゃんはあの天然ボケ焦凍のせいで自分が女の子からモテてるってことを知らずに生きてきたんだよ？」

「ああ、確かにそう。中学時代は私も知らない子からクラスメイトの子まで何人にも白刃様の好みとか訊かれたなあ。なんか怖い子に『あんた、白刃様』とか言つてるけど、付き合つてるの!? 私の王子様と！ ねえ……ねえ！』って問い合わせられたこともあつたつけ。

「焦凍は中身は手の施しようもないけど、見た目だけは高得点でしょ？ それにお兄さんも焦凍のことイケメンだつて言つてるし」

「確かにそう。白刃様つて自分のこと全く分かつてない。」

「とつてもかつこいいのに、白刃様目線のイケメン像の焦凍が基本隣にいるから気づいてないの。」

「だからバレンタインデーとかラブレターとか基本的に貰つたり、靴箱の中とか机の中に入つてもまずは『しようくん宛』って思つてるんだよ!? 自分が一番焦凍と仲良しだから橋渡し役にされてると思つて！」

「確かにそなへんよねえ。それでもつと悲惨なのは、手紙の内容とかに『白刃さんへ』みたいな個人名が1つも書いてないから、焦凍も勘違ひして『俺は別にお前のことなんとも思つたことねえ』なんて差出人に告げちやうとこね！」

差出人からすれば白刃様に告白したのに、その友達……親友の焦凍から“お断り”されるつていうところまであるから。

だから『白刃様に告白するにはまず焦凍に認めてもらわないといけない』みたいなことになつて話がややこしくなつちゃつたもん。

「響香お姉ちゃん……あたし、響香お姉ちゃんが本当のお姉ちゃんになるの楽しみにしてるんだけどなあ……」

「え、えーと、急にそんなこと言われても……その……」

「じゃあ何？　響香お姉ちゃんは飽きたらお兄ちゃん棄てるの？　そんな人を弄ぶような最低な人間なの？　ねえ……ねえ！」

「ストップ！　黒刃ちゃんストップだよー！」

黒刃ちゃんが死んだ魚みたいなお目々で響香ちゃんに詰め寄るのを、私は止めた。

だつて黒刃ちゃん、自分の個性で指先を刃物に変化させて響香ちゃんに刃を向けてるんだもん。

「被身子ちゃんも響香お姉ちゃんに言つてよ！　恥ずかしがり屋なのは知つてるけど、ここまでくるとさあ！」

「私もだけど、響香ちゃんは高校1年生だよ？　ヒーローになることを目指してヒーロー科に通つて、まだその夢が叶うかどうかも分からぬのに、結婚のことまで考えら

「被身子ちゃんと思う」

「私? 私は……うーん……」

私はそういうの気にしないなー、響香ちゃんみたいにヒーローにどうしてもなりた
いってわけじゃないし。仮に私が白刃様と結婚したら……

「うへへへへ……♡」

毎日幸せ過ぎて白刃様に毎日鉄分・葉酸・タンパク質が豊富な料理を作つて毎日チウ
チウしちゃうと思う……はつ! つい想像しちゃつた。

「ほら、響香お姉ちゃんも被身子ちゃんを見倣つて」

「いや、どこをどう見て見倣うのさ」

「これくらい逞しく妄想するくらいじゃないと、お兄ちゃんを落とせないでしょ!」

「そんなことは……」

「お兄ちゃんと音楽やつてる時はあんなに楽しそうなのに、それ以外だといつとももじ
もじしちゃつて……今世は様子見か準備に使つて来世で結ばれる気なの?」

「いや流石にそこまで見据えてないよ……今世でちゃんと付き合いたい

「はあ……」

わあ、大きなため息だなあ。

「じゃあもう私たちが直接動くしかないみたい」

そつちの方が確かに確実かも。

私が頷くと、黒刃ちゃんはニッコリ笑つた。かあい♡

その反対で響香お姉ちゃんは「え!?」つてとても驚いてるけど。そのお顔もかあい♡

♡

「明日、お兄ちゃんと何が何でもデートよ。お兄ちゃんは世界一優しいから、私が言えれば響香お姉ちゃんを連れ出してくれるはずだもん」

「え？　え……え？」

ああ、その方が確実だね。

「今ちょうど新作の恋愛映画上映されてるし行つて来なよ。焦凍のことは私と黒刃ちゃんで押さえとくから」

「被身子まで……」

「だつて今ままじやいつまで経つても進展しないと思うから」「うつ……」

私も言えば、響香ちゃんはやつと覚悟を決めたのか、私たちに力強い眼差しで「分かつた」つて頷いた。だから私たちもしつかりと頷いて返した。

「あ、でも初デートなのに服とか……」

「いつものかっこいい系で大丈夫！ そんなことより作戦会議するよ！」

こうしてこの場で最年少なのに一番頼りになる黒刃ちゃんに響香ちゃんは寝るまで攻略法を叩き込まれてた。

私？ 私は当然そういう知識はないから何もアドバイスなんて出来ないから、響香ちゃんが少しでも白刃様と距離を縮められることを願いながら、響香ちゃんの背中を励ますように優しく撫でてた。

どうか、白刃様と響香ちゃんが幸せになりますように。

デデデデデデデ!

あ、ありのまま今起こつた事を話すぜ！

俺は黒刃に言われて今朝家に帰つた響香ちゃんの忘れ物を届けに来た。
そしたら響香ちゃんに「お礼に映画行こうよ」って誘われたんだ。

な、何を言つているのか分からねえと思うが、俺もどうしてこうなつたのか分から
ねえ……頭がどうにかなりそうだ……お礼だとか、感謝だとか、そんなチヤチなもん
じやあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ。

だつてさ、

「ね、ねえ……そんな顔しないでよ」

「え、あ、ごめん……こういうの初めてだから」

「そ、そつか……ウチが初めてなんだ……へへへ」

はにかんでる響香ちゃんに手を引かれて街中を歩いてるんだぜ！?
これじゃあまるで……まるで……

「そういうウチも初めてなんだよ？　で、デートするの……」

デートだつて！ デートだつてよ！

え、え、え？ マジで？ 僕、今デートしてんの？

前世でもこんな展開経験したことなかつたからどうしたらいいのか分からねえんだが！？

D Tはその手のお店で卒業証書貰つただけだからな！

「ちよつと……黙んないでよ」

「あ、う、ごめん」

「謝り過ぎ」

「…………」

「でも知らなかつた。白刃つて女慣れしてるんだと思つてたのに、こんなに動搖するなんてね」

「で、デートなんて経験したくて、経験出来るものじやない。相手もいないし」

「被身子がいるじやん」

「被身子ちゃんと二人きりで過ごしても、デート感はないんだよな……こう妹感が強い

というか」

「ウチはそうじやないんだ？」

「そりやあ……まあ……」

ああ、やめて！ 恥ずかしくて死にそう！

精神年齢おじいちゃんでも、前世でそんな甘酸っぱい経験したことないもん！ 前世の俺にとつてはギャルゲーとか恋愛漫画とかだけのイベントでしかなかつたもん！

「素直に嬉しいよ、ウチは。ウチも初めてだから、初めて同士だね」

「お、お手柔らかに……」

「いやいや、意味分かんないし」

「で、ですよね……あはは……」

ああ、会話続かねえー！

意識すると何話していいのか分かんねえー！

「ねえ、ウチが映画誘つたけどさ、白刃的にはどうなの？」

「どうとは？」

「だから、その……本当にウチと観てくれるのかつてこと。義務感とかじやなくて、一緒に観たいって思つてくれてるかなつて」

「え……そりやあもちろん」

「そ、そつか……へへ」

「うわーん！ 響香ちゃんがかわいいよー！」

今日、俺の命日かもしけない……。

というか、うん。冷静になろう。もちつけ……ちやうちやう落ち着け俺。

お互い初めてなんだし、そもそもデートプランなんて人によつて違うんだし！ふう、うん。難しく考えずに会話しよう。

「響香ちゃん」

「な、何？」

「映画何観るの？　俺、今上映されてるタイトル知らないんだ」

「え、あ……ええと」

そんなこんなで最初はどうしてもギクシャクしてしまったものの、お互いに会話する内にいつもの感じに戻つていったので、映画館に着くまでには緊張も解けていた。



「…………」

映画を観終えた俺たちは、映画館内にあるカフェに入つて、無言のままでいる。

「どんでもなくつまらない映画だつたな……」

「お金を溝に捨てた気分つてこういうことを言うんだろうね……」

——観た映画がB級映画にも劣る駄作映画だつたからさ！

寧ろ定番のゾンビと

かサメが笑えるくらいに改造されたB級映画の方が見応えあるよ!

「恋愛映画ってなんだろうな……」

「さあ、ウチにもさつぱり……」

「まささ、恋愛描写あつた?」

「ウチの知つてる恋愛描写は見当たらなかつたかな……」

「うん。俺もそう」

「序盤で男の主人公が何の説明もなく唐突に彼女欲しいつてなつて片つ端からナンパしていくのは百歩譲つていいとしてさ……」

「どうしてどの子も無理難題ふつかけてくるんだろうな。普通に断ればいいじゃん。主人公もどうして『できらあ!』みたいなノリで挑戦すんのかもアホらしいし……」

「ウチが男だつたとして、あんな意味分からんこと強いられたら恋人になりたいなんて思わないわ……」

「俺だつて無理だ」

もう映画の愚痴しか出て来ない。

甘酸っぱさの欠片もない。

あの映画の記憶だけ消える都合のいい記憶喪失になりたい。

というか、こんな意味分かんねえ映画で前世から数えての初デートを終わりに出来

ねえよ!

「響香ちゃん!」

「うえ!? な、何!?!」

「場所移そう。ここにいてもあのアホ映画の記憶が蘇るだけだ」

「それもそうだね。じゃあモール見て周ろうか」

「オッケー♪」

こうして俺は響香ちゃんと共にショッピングモールへ向かつた。



「相変わらずこここのモールはなんでもあるねー」

「来る度に品揃えも変わってるしな。唯一変わつてないのはヒーローグッズ店くらい
じゃないか?」

「ああ、分かる。でも前に比べたらエンデヴァーの増えてない?」

「まあ次こそナンバー1獲れそうって報道されてたしな」

「そしたらやつぱお祝いすんの?」

「するとと思うぞ? 炎司おじさんは『そんなことしなくていい』って言うだろうけど、冷
母さんたちが準備しちゃえば内心喜んでるくせに渋々つてスタンスで祝われてるはず
だ。あの人素直じやないから」

「流石は長年側で見てきただけのことはあるねえ」

まあ昔に比べたらかなり丸くなつたけどね、炎司さん。会う度に『呼びたいなら、炎司父さんと呼んでもいいぞ?』なんて言ってくるから、基本的に『呼びたくなつたら呼びますね』って返してる、ホントそういうところしようくんの父ちゃんだなつて思うよ。

「あ……」

「響香ちゃん?」

急に立ち止まつた響香ちゃんに声をかけたけど、なんか恥ずかしそうに耳のイヤホンジャック弄つてる。

急かすのも悪いから俺は待つことにした。

「え、えっと、さ……」

「うん」

「ちょ、ちょっとここで待つてくんない?」

「? 分かった」

俺が頷くと響香ちゃんは足早にとある店舗へと入つていった。

ぱつと見た感じ雑貨屋っぽい。恥ずかしがらなくもいいのに。

それから暫くして響香ちゃんは買い物を終えて戻ってきた。手には雑貨屋で買ったであろう品物が入つた白い紙袋を持つてる。

「小腹減つてきたし、何か腹に入れる?」

「そうだな。フードコート行くか? それともどつか別の場所行く?」

「白刃は何食べたい?」

「ジャンクな物かな」

「言うと思つた♪ なら、駅前のどこに行こうよ。ここよりは空いてるだろうし」

「じゃあそしますか」

ということで今度は駅前にあるバーガーハローに向かつた。



店についた俺たちはそれぞれ食べたい物を注文して、店内ではなく近場の公園で食べることにした。今日は天気もいいから、そつちの方が多いという響香ちゃんの判断だ。

「どこもベンチ空いてないな」

「別にいいじyan。芝の上だつて」

「あ、なら俺の上着敷いて座りなよ」

「え、白刃の上着汚れるじyan」

「洗えば済むから。それに、えつと……初デートだから格好くらいつけたいな、と……」

「……バカ」

「うつ」

「は、早く上着敷いてよ……」
「あ、うん！」

また妙な空気になつたけど、響香ちゃんは素直に俺が脱いで敷いたパーカーの上に腰を下ろしてくれた。

「いただきます」

「いただきまーす」

取り敢えず食事で妙な空気を誤魔化す俺と響香ちゃん。

「めんよ。人生2度目でも女の子の接し方は全くなんだ。

「白刃、ほつぺにケチャップついてるよ」

「え、どつちに?」

「こつち」

「むえ」

「あ」

ついたケチャップを拭いてくれた響香ちゃんだつたけど、ふと俺の唇に響香ちゃんの
人差し指が触れて響香ちゃんの顔が真つ赤に染まる。

たぶん、きっと俺も同じだろう。めちゃくちや暑い！ 热い？ どつちでもいい！
とにかくあつい！

「……響香ちゃん」

「なに？」

「そういうかわいい反応されると、どうしたらいいのか分からなくなる」

「え……」

「ごめん。本当に余裕ない」

「…………」

俺が本音を吐露すると響香ちゃんは暫く黙つたあとで、持つてたハンバーガーをガツガツと食べ出した。

啞然とする俺をよそに、ハンバーガーを完食した響香ちゃんは、何か決意したみたいな眼差しで俺に一冊のノートみたいな物を押しつけるように手渡してくる。

「これは？」

「白刃」

「あ、はい」

「好きです。ウチと付き合つてください」

「……」

唐突な告白に俺が戸惑っている中、響香ちゃんはしっかりと俺の目を見て続ける。

「最初はどんな時でも冷静で余裕があつて、そういう同い年なのに年上みたいなどこに

惹かれた。でも近くで接して距離が縮まる度に、白刃はウチにも焦凍や被身子に見せる
ような隙きを見せてくれるようになつて、もつと惹かれた」

響香ちゃんにそういう風に思われるなんて思いもしなかつた。

俺はただ好きな漫画の世界に入つて、原作のキャラが現実でワチャワチャしてるのが
見てて楽しかつた。

たぶん、どこか自分とこの世界を線引きしていたのかもしれない。

「白刃はそういうの鈍感だから知らないだろうけど、アンタけっこー女子に人気あるか
らね？ 今日だつてウチと歩いてて何人もアンタのこと振り返つてて、『隣の子羨まし
い』とか『いいなあ』ってつぶやいてた」

「知らなかつた……」

「白刃は自分のこと過小評価し過ぎ。まあ常に焦凍みたいなのがいればそうなるのも分
かるけど……ウチは焦凍より白刃の方がタイプなんだ」

「……ありがとう」

「じゃあ付き合つてくれるつてことでいいの？」

「響香ちゃんみたいなかわいい子が彼女になつてくれるなら本望です……」

「……やつた」

小さくガツツポーズをとる響香ちゃん。

それを見て俺は『ああ、自分に人生2度目にして初の彼女が出来た』となんか他人事みたいに思つてた。

でも今あるのが現実なんだから、何も難しく考える必要ないんだよな。

そもそもが原作と全く話の方向性違つてるわけだし、夢じやないんだから。

なら俺のことをこんなに真剣に好きだと言つてくれる響香ちゃんと幸せになりたい。

「じゃあ早速、これね」

「これは？」

「カツプルノート。お互いのことを書いてくやつ」

「そんなのあるのか……」

「うん。恋人記念つてことで今日から始めよ」

「あ、ああ」

「あとさ」

「うん？」

「ウチ、隠す気ないから」

「ん？」

「白刃はウチの彼氏だつてこと周りに隠さないから！ ゼッタイ！」

「え、あ、うん」

「じゃあ早速ノート書いてこ。まずは、ウチらのプロフィールから」

こうして俺は響香ちゃんに言われるがまま、ノートに書き込んでいく。

それを響香ちゃんは嬉しそうに眺めてて、なんだか俺まで嬉しくなった。

同時にこの笑顔を守りたいなつて心から思えた。

焦凍サイド

「で、俺を置き去りにして白は響香とよろしくやつてたつてのか」「しようくん言い方……」

被身子と黒にオールマイトの新作グッズを買いに行こうつて誘われて、ついそれにホイホイとついて行つた俺。

白がいないのは寂しいが別に別行動するのは初めてじゃないから違和感もなかつた。それに白はオールマイトよりエンデヴァーが好きだから、オールマイトグッズを買いに行こうつて誘つても『俺はいいけど心配だからついてくだけついてくよ』つてくらいだ。

俺がグッズを買って帰つて来ても白はまだ帰つて来てなかつた。
暫く白の家の玄関で待つてたら、白が帰つてきた。

俺が近寄ると白から『彼女出来た』つて打ち明けられた。その瞬間、俺は被身子と黒に殺意が湧いた。

だつてそだろ？　白が響香に告白されたつていうビッグイベントをアイツらのせ

いで見逃したんだぞ？　白のことだから響香を幸せにするのは分かつてゐるし、別れると
かはない。てことは俺は被身子と黒のせいで白の人生で最初で最後の告白されたシ
ンを見逃したことになるし、白が響香から告白されてどんな反応してたか一生分から
ねえつてことだ。ああ、考えただけで腹が立つ。

「白、俺たち親友だよな？」

「え、うん。もちろん」

「なら今夜家に泊まれ。んでどういう経緯で響香と付き合うことになつたのか聞かせ
ろ」

「しょうくん、プライバシーって知つてる？」

「白と俺の間にはないものだつてのは知つてる」

「あるよ！　親しき仲にも礼儀ありつて言うだろ!?」

「俺はちゃんと白の帰りを待つてた！」

「お利口さんと礼儀正しいは別だよ！」

珍しく俺の願いを聞いてくれない白だつたけど、ちゃんと最後は話してくれた。かな
り割愛された感があつたが話してくれたことの方が俺は嬉しかつたから満足だ。

響香、白を悲しませたら地獄を見せてやるからな。幸せにしてくれよ。俺のヒーロー
を。

響香サイド

『良かつたねえ、響香ちゃん♪』

「ありがとう、被身子。自分でも夢みたいだよ」

夜、ウチは被身子に電話でお礼を伝えた。

強引だつたとはいえ、被身子や黒刃ちゃんに背中を押されなかつたら、ウチはいつまでも片想いしてただろうから。寧ろ片想いで終わつてたかもしれないし。だから勇気をくれた二人には本当に感謝しかない。

『でも観た映画はハズレだつたんだね』

「やめて。思い出したら気分悪くなるから」

『あ、ごめんね』

「うん……でさ、ちょっと被身子に確認したいことがあるんだけど」

『なあに?』

「被身子は白刃に恋愛感情的な好きを向けてるんじゃないんだよね?」

『うん。白刃様は私の運命の人(ヒーロー)だもん。大好きで尊くて崇めてるよ』

「宗教じやん……」

『あはは、そうかも。でも安心してよ。私が白刃様にくつつくのも好き好き言うのも血をチウチウするのも、恋愛的意味はないから! 黒刃ちゃんにも響香ちゃんにもみんな

！』

「まあそこは……もう見慣れたというか、そういう形の糾だと思つてるよ」

『ただ焦凍くんは面倒かも。あの人同担拒否みたいなどこあるから』

「あ、なんとなく分かるかも」

『白刃様のこと悲しませないようにな。そうなつたら焦凍くん面倒だよ、絶対に』

「ハイ、キモニメイジマス」

『あはは、とにかくおめでとう』

『ありがとう。今度何か奢るよ』

『うん、それじゃあまた明日！』

「うん、おやすみ」

色んなことがあつたけど、白刃と恋人になることが出来たし、悲しませないようウチなりに頑張ろう！

気持ちが一番大事。

はい、てことでね。

体育祭も終わつたことだし、次はいよいよ職場体験になりますよ。ヒーロー殺しステインがいないという絶対的安心感。

これだけでかなり平和だと思う。

そもそも敵も原作とは違つてかなり減つてて、敵による凶悪犯罪そのものがなくなつてきてるけど、交通事故とか火災といった不慮の事故はどうしてもあるから、今のヒーローたちの仕事は救助活動がメインつて感じ。

「地毒と轟はやつぱエンデヴァーのどこ行く感じ？」

昼休みになつてすぐ、俺の前の席にいる瀬呂くんが振り向いて訊いてきた。

「うーん、どうk——」

「そうだ。燈矢兄もいるしな。そもそも親父に白と俺と被身子の3人で来いつて体育祭前から言わてる」

俺の言葉を遮つてしまふくんが返せば、瀬呂くんは「なら気楽でいいな」なんて笑つ

て返す。

「いやあ、そうでもないだろ。エンデヴァーって次のチャート1位取るのに必死なんだし、そこに遠慮のいらねえメンツが行つたら即戦力で色々やらされんじゃね？」

横から上鳴くんがそんなことを言えば、瀬呂くんは「有り得そうだな」と苦笑い。口田くんもコクコクと頷いてる。

「つか、どうして地毒は毒の個性使わずにやつたんだ？　トーナメント戦もそうだけど、体育祭で毒の個性一度も使わなかつたじやん」

「いやね、上鳴くん。毒の個性は加減間違えると取り返しづかないだろ？　扱い方に慣れたつて攻撃手段として使うのは躊躇つてしまふというか……」

「正直、地毒に毒の個性まで使われてたら勝てたか分からん。授業で地毒が優秀なのを知つているからこそ、毒の個性がいつどういうタイミングでどういう風に襲いかかってくるのか怖かつた」

背後から常闇くんにそんなコメントをされると、俺自身何て返せばいいか分からない。

「んなことよりよお。俺は地毒に言いたいことがある」

いつの間にか俺のすぐ横まで来ていた峰田くん。

まるで俺を親の敵かのように睨んでる。

いやもう何を言われるのか分かつてゐるんだ。

「地毒てめえコノヤロー！ 体育祭終わつた瞬間に彼女拵えるたあいい度胸だな！」

そう。このことだ。

今朝は雄英高校の最寄り駅から響香ちゃんと手を繋いで一しかもあの指を絡めるやつで！ 一登校したもんだから、香山先生が来るまでみんなから質問の嵐だつた。

響香ちゃんも響香ちゃんと恥ずかしがり屋なはずなのに、昨日のことでもうかなり吹つ切れちやつてるのか顔を赤くしていくとも『ウチら付き合うことになつたから！』つて宣言して、男子も女子も大興奮。

飯田くんは眞面目だから『不順異性交遊は良くない！』とか言われちやうかなつて思つたけど、飯田くんからは『恋人同士で切磋琢磨し、助け合うというのも美しいものだな！』なんて真つ直ぐに言われて言われた方が恥ずかしかつた。

『んなこと言われてもな……いいじやんか、お互い好き同士なんだし……』

『かああああっ！ これだからイケメンはよお！ 下々のことなんかこれっぽつちも分かつてない！』

『下々つて……俺は峰田くんのことそんな風に思つてないよ』

『なら別れろ！』

『え、やだ無理』

「ならお前は俺の敵だ！」

「ええ……」

理不尽な怒りをぶつけられるが、正直俺も前世ではいちやついてるカツプル見る度に『爆ぜろ』って思つてたから、峰田くんの言いたいことは分かる。言われる側つてこんな気持ちになるのね。おいちゃん知らなかつたよ。

「峰田、アンタうつさい。てかアンタが白刃の敵ならウチもアンタを敵だと思うから」

「俺もだ」

「私もー」

俺が前世のことを反省していると、響香ちゃんやしようくん、被身子ちゃんと俺を庇つてくれた。

それに峰田くんは「リア充がイキつてんじやねえ！」と返したかつたと思うんだけど、言い切る前に響香ちゃんのプラグが峰田くんの目にブスリしたので、打ち上げられた魚みたいに床を転げ回つた。

「つかつい話し込んじまつた！　おい学食！」

「ああ、そだつた！　またあとでな！」

一方で上鳴くんの言葉に瀬呂くんも立ち上がって軽く俺たちに手を振つて教室から出ていった。（転げ回つてた峰田くんはちゃんと瀬呂くんが回収して）

因みに俺たち4人は弁当持参なので学食は行かない。ランチラッシュの料理はそれはそれでべらぼうに美味しいし安価なんだけど、こういうザ学生時代の昼食が青春つて感じで好きなんだよな。

「ウチらもお昼にしようよ。教室で食べる？ それとも場所変える？」

「今から移動するのもあれだし、教室でいいんじゃないか？」

「俺はどこでもいい」

「私もー♪」

「ん。じゃあ机寄せよ」

こうして俺、しょうくん、被身子ちゃん、響香ちゃんはそれぞれ持つてきた弁当を広げる。

しょうくんに至っては俺が用意するのがデフォなので、いつものように俺から弁当を受け取った。

「焦凍つていつも白刃に弁当作つてもらつてるけど、そんなんで卒業後どうすんの？」

「？ いつも通りだろ、普通に」

「え」

「ん？」

驚愕する響香ちゃんと何に驚いているのか理解出来ずに首を傾げるしょうくん。

そうしている横で被身子ちゃんは「白刃様、玉子焼き上手に出来たからあげるね、あーん♡」なんて俺に玉子焼きを食べさせてくれる。素直に口開けて食べる俺も俺なのだが……まあこの空氣にも慣れている。

「いやいや……焦凍つてホント白刃のこと好き過ぎでしょ……」

「何当たり前のこと言つてんだ?」

「あー、うん。ソウデスネ」

?????

首を傾げつつも俺お手製弁当を食べることはやめないしようくん。疑問に思うか食べるかどつちかにしなさい。

「白刃はそれでいいの?」

「んー、しようくんを安心して任せられる人があるまでの俺が責任取らないと、とは思つてる。こうなつたの俺のせいでもあるし」

「……友情もここまでくると怖いわ」

「俺と白刃はずつと一緒にいるからな」

「あーはいはい」

渾身のドヤ顔にツッコミを入れるのすら疲れた響香ちゃんは適当にあしらう。

「でも前にしようくんには伝えたけど、雄英卒業したら俺は医師免許取るのに大学行く

からね?」

俺の言葉にしようくんは見るからにしょんぼりと眉尻を下げた。

一方で被身子ちゃんは「凄いね!」と満面の笑みで、響香ちゃんは「え、そうなの?」と目をぱちくりさせている。

「そりやあ俺の両親医者だし、俺の個性の性質上、医師免許持つてないとヒーロー資格持つても法律違反になるじゃん」

「あ、確かに。校内ではギリギリで許されてるけど、外だと何の資格も持つてないのに毒なんて扱えないもんね」

俺の説明に被身子ちゃんがポンと手を叩いて言つた。

そう。俺の個性である毒は使い方次第で簡単に人の命を奪えるヤバい個性。

例えば卒業後にヒーローとして活動している中、災害とかで痛みを訴えている救助者がいた場合、毒の個性を使って救助者に麻酔毒を生成して投与するなんてことは出来ない。したら法律違反で即逮捕の上ヒーロー資格の剥奪だ。

使わないつて手もあるにはあるけど、使わざるを得ない可能性がある以上、後悔しないために資格は持つていて損はない。

雄英高校から大学進学するのって基本的に普通科や経営科の子なんだけど、ヒーロー科の生徒は受けられない訳じやないから。

幸い実家から通える範囲に医科大あるし、雄英高校みたいな超エリート校で学問も学んでるから問題はない。あとは俺の頑張り次第だ。

「だから雄英を卒業すれば嫌でも俺としようくんは別々の道に行くんだよ。忙しくなれば弁当は作つとくから、朝取りにくればオッケー」

「……それだけだなんて寂しいな」

「しようくんは俺の彼女なの？　俺の彼女は響香ちゃんなんだが？」

「いいだろ、別に」

「良くはないよね」

「白が大学卒業したら速攻で俺の事務所に採用してやるからな」

「え、選択の自由は？」

「俺のどこ以外見向きも出来ない高待遇にするから白は自動的に俺の事務所に来る」

「いい笑顔でサラッと怖いこと言うね」

まあしようくんが本当にヒーロー事務所設立してたらちゃんと雇用されに行くけれども。

「私は？」

「被身子もいいぞ。というか白がいる時点で来ると思つてる」

「当然♪」

「将来の目標が決まつていいね。ウチなんてヒーロー資格のこととか学校生活のこと
で手一杯なのに……」

「え、響香ちゃんはもう将来決まつてるんじやないの？」

被身子ちゃんの言葉に響香ちゃんは「ん？」と首を傾げる。
すると、

「白刃様のお嫁さんでしょ？」

「は――――――！」

顔を真っ赤にして盛大に叫び声をあげた。

いや、まあ……うん。そりやあ俺も別れる気ないからずつと付き合つていくことには
なる訳で、そうすれば当然そうなるという訳で被身子ちゃんの言うことも分かるんだけど
ど、流石に気が早いというか……ヤバい、俺まで恥ずかしくなつてきた。

「なら響香も俺の事務所に入るつてことでいいな」

「え、ちよ、何勝手に……！」

「？ 白の嫁さんなんだから当然じやねえか？ ちゃんと産休と育休もやるぞ？」

「そもそもヒーローになれるかもまだ分からんんだけど!? てか飛躍し過ぎなんだけ
ど!?」

「白刃様のお嫁さんになるつてことは否定してないね！」

「被身子！」

しようくんの天然ボケと被身子ちゃんの的確なツッコミにてんやわんやする響香ちゃん。

うん、美しい。でもあんまり俺の彼女イジメないでくれ。二人きりになつた時に色んな意味で空気がぎくしゃくしそうだから。

と思つても、こういう戯れ合いも今でこそ出来るものだから、俺は特に止めなかつた。

響香サイド

学校が終わつて放課後。

被身子が気を遣つてくれて焦凍を連れて先に帰つてくれたから、ウチは白刃とゆつくり帰つてる。もちろん手を繋いでね。恋人繋ぎで！ 憧れてたのもあるけど、実際やつてみるとなんか安心すんだよね、この繋ぎ方。

それにもしても、お昼は被身子のせいで酷い目にあつた……。

いや、酷いつて言つても、恥ずかしくて酷いつてことで……ああ！ 誰に言い訳してんだウチは！

もう！ 全部被身子が悪いんだ！

う、ウチが白刃のお、およ、およよ、お嫁さん……だなんて……！

そりやあウチだつて白刃のお嫁さんになりたいし、なるつもりでいるよ。でもさ、こ

う……自分で言うのも変だけど、決定事項つて訳でもないじやん。そりゃあ白刃と別れるつもりなんて全くないけど、ウチがフランされる可能性だつてある訳だし……。

あ、ヤバい。考えたらフランされる未来しか浮かばないんだけど。

だつて白刃は大学行くから、そこでモテる訳じやん？ ウチよりかわいい子なんていくらでもいるんだからさ。

「——香ちゃん？」

そこで白刃は押しに弱いから猛アピールされたらウチのことなんて……。

「響香ちゃん！」

「は、はい！」

しまつた。白刃に話しかけられてたのにシカトしちやつてた。

「大丈夫……でもないか。しようくんたちがあんなこと言つてたんだし」

「ま、まあね……」

「ちよつと真面目な話していい？」

「え、うん」

なんだろ……もしかしてもう？ 恐い……。

「俺たち付き合つて間もないし、これからお互に相手の見えてなかつたところも見えてくると思うんだ」

「そうだね……」

「相手の嫌なところも見ちゃう時だつてあると思う。でも結婚したらそれが普通になるつてことだと思うんだ、俺は」

「まあそうだね。プライベートの時間をお互い作るにしても、一緒に生活とかしてたらそうなるよね」

「この先どうなるかなんて誰にも分からぬし……いや、もしかしたらそういう未来予知を持つた個性があるかもだけど、二人でなら乗り越えられると思うんだよね」「…………え？」

つまり、そういうこと? え、待つて。ウチが考へるのが白刃の言いたいことなら、それつてもうプロ――!

「まあその時が来たらちゃんと俺から言うから、待つてて。あ、もちろん俺に『ここは直して』ってのあれば遠慮なく言つてよ。響香ちゃんと嫌われたくないからさ」「そんなのウチだつて同じだよ」

「そつか……うん。ならお互い、何かあればちゃんと話そう。そうしよう。一人で抱え込まない!」

「うん、それが一番かもね」

「白刃を好きになつて良かつたわ

「じゃあさ、抱え込まないつて決まつたから、早速ウチから1個いい?」

「うつ、何でしよう?」

「ウチ、白刃のことだい好き♡」

「つ……そういう不意打ちやめて……」

「いやー、だつて抱え込まないつて決めたじやん? ならこの気持ちも抱え込まない方がいいでしょ?」

「ああ、もう! かわいんだよ、いちいち!」

「褒めるか怒るかどつちかにしてよ♪」

「どつちもだよ! 僕は欲張りだから!」

「ああ、幸せ。さつきまでの不安なんてどつかいつたわ。

「そうだよね。先のことを今からよくよしてても意味ないもんね。だつたらもつとちゃんとウチの気持ちを白刃に伝えればいいんだ。ずっと大好きだよ、つて。

学期末試験の勉強をしよう！

はい、ビューンと時が進みまして、期末試験が近付いてきました！

え？ 職場体験？ やつたよ？

俺はせっかくだから原作で見たことないヒーローの事務所にお願いしようとしたのに、しようくんが捨てられた子犬みたいに訴えてくるもんだから仕方なくエンデヴア－事務所行きました。

事故に遭った人の救助補助だつたり、高所作業が出来ないお年寄りの代わりに庭の木の剪定をしたり、エンデヴア－事務所のシユレッダーが壊れたからつて俺が代わりに切り刻んだり……まあ色々とやりましたよ。

後半はもうヒーロー関係なくね？ つて思つたけど、まあヨシ！

あ、因みにクラスのみんなは原作通りのプロヒーローのどこへ職場体験に行つたけど、緑谷くんは爆豪くんに連れられてベストジーニストの事務所行つてた。

夜嵐くんはラウドクラウドの事務所行つて、心操くんは雄英高校で職場体験受けたみたい。心操くん、ヒーローになりたいけど将来はヒーローを育てる先生にもなりたいん

だつて。素敵だよね、そういうの。そう伝えたら心操くんはめっちゃ照れてて、それがまたかわいくてかわいくて……もう浄化されちゃいそうだつたよ。あ、されてたわ。

んで雄英高校生活初の期末試験が迫つてます。

原作だと敵の襲撃とかで敵が活性化したことから、教師であるプロヒーローを相手に実技試験やつたけど、この世界ではそんなことない。だつて全然平和だもん。

というか、香山先生が普通に実技試験の内容を教えてくれたんだよね。

実技試験は昨今のヒーロー事情を踏まえた上で、救助活動試験になるらしい。

それはいいんだよ。それは。

ただ筆記試験の方が問題なのよ。

範囲クソ広いからね。流石エリート校つて感じ。前世の記憶があるつていうチートなかつたら完全に赤点取つてた自信あるよ。ガチで。

「んあー！ どうしよう！ 筆記マジでやべえ！」

「私もヤバーい！」

上鳴くんと芦戸ちゃんはもう阿鼻叫喚つて感じ。

分かるよ。勉強難しいもんね。

「仮に実技試験の結果が良くても、筆記試験で赤点取つてしまえば、合宿では地獄の勉強会だものね」

蛙水ちや……梅雨ちゃんの言う通り。

なんでも、夏休みに入つたらすぐに夏合宿というものがあるそうだ。

原作でも林間合宿つてのがあつたけど、俺たちの行き先はワイルド・ワイルド・プツシーキヤツツのところじやなくて、13号先生が手掛けたU.S.Jでの夏合宿らしい。

香山先生曰く、

『今ヒーローに求められているのは災害時等の救助活動。よつて夏合宿では様々な災害を想定しての救助活動訓練を行うから、覚悟しておくこと!』

だとか。

どんなに敵が減つたとしても、日本なら地震災害はいつでも起こり得るし、火山噴火や津波被害だつて起こり得る。

そんな時に駆けつけて救助にあたるのがヒーロー。

ヒーローが駆けつけて最前線に行くからこそ、消防隊員やレスキュー隊員たちが職務を全う出来るんだ。

「あー！ もうオシマイだー！ 俺はみんなが合宿でワイワイキヤツキヤツしてゐ中で勉

強地獄の時間を過ごすんだー！」

「大丈夫だよ、上鳴！ 私もその隣にいるから！」

うーん。上鳴くんも芦戸ちゃんも諦めるの早いなあ。

んでもって、

「白……ん」

「おー、はいはい。よしよし」

「ん♪」

しようくんはしようくんでさつき抜き打ち小テストで満点取つたからつて俺に褒めてもらひに来てる。

おいちゃん、わんこなイケメンつてマジでズルいと思うの。かわいいんだもの。

「白刃様ー。今度またお勉強会しよー。」

その横で被身子ちゃんは相変わらず俺にべつたりだ。

まあこうなつてもう数年になるし慣れてるからいいけどね。

ただ背後から峰田くんの嫉妬の眼差しが背中に刺さる刺さる。舌打ちと貧乏ゆすりの音が半端ねえ。

「勉強会やるならウチも参加していい?」

そこへ響香ちゃんが顔を出してきた。

当然、恋人を拒む理由はない。被身子ちゃんも響香ちゃんにすごく懷いてるし。

「なあなあ、勉強会するなら俺も参加していいか?」

すると瀬呂くんも訊ねてくる。

うーん。被身子ちゃんと響香ちゃんに加えて瀬呂くんもつてなつてると、流石のおいちゃんでもちやんと教えられるか不安になるな。当然のようにしようくんオプション付きだし。前世が教師とかだったら出来たかもしけないけど、如何せん前世はただの引きこもりニートだつたんでね。

あれ？ というか、この流れって原作だと八百万ちゃんに教えてもらう場面じやんか。

ただでさえ原作と流れがかけ離れてしまつてるんだから、今更感もあるけど個人的に八百万ちゃんがみんなに頼られてぶりぶりしてるの見たいやん？

「八百万ちゃん」

なので俺は八百万ちゃんに声をかけた。

「は、はい！ 地毒さん、どうされました？」

ビクッとしたよ。そんなに意外だつた感じ？ 授業で何度もチーム組んだりしてそ の都度意見交換とかして、それなりに打ち解けてると思つてたんだけどなあ。

まあでもヒーロー科の授業でもないのに男子から声をかけられるのつて慣れてないかも。お嬢様校でんまり同世代の異性と接したことつてなかつただろうしね。

驚いてる八百万ちゃんに俺は手招きした。

八百万ちゃんは首を傾げながらも、ちゃんと来てくれた。

なんか地味に嬉しい。

「八百万ちゃん、中間テスト1位だつたよね?」

「は、はい。それが何か……?」

「期末の勉強会するんだけど、俺だけじゃみんなを教えてられないから八百万ちゃんに助けてほしくて……お願ひ出来る?」

「い、い……」

「?」

「なんか俯いて肩震わせてるんだが? 正直表情見えなくて怖いんだが?

「いいですともー!」

あ、良かつた。原作通り……いや、ここは作品違うけどどつかの新世界の神になろうとした人みたいに計画通りって思うべきか。

おーおー、めっちゃぶりぶりしてるやん。かわいいなあ。

あ、これ浮気じやありませんよ? 犬や猫の仕草を見てかわいいって思うとの同じですよ。

「では今度の土日に私の別荘へ、参加をご希望される方々をご招待致しますわ♪ 私の別荘がどこにあるのかご存知ない方もおりますでしようから、雄英高校の最寄り駅に集合ということに致しましょう♪ あとは我が家の使用人たちが安全に、皆様をお連れし

ますわ♪」

わあ、話がトントン拍子に進んでいく。

お嬢様つてすげえ。というかお迎えまでしてくれるのマジで優しい。

「ちよ、ちよつと待つてヤオモモ！」

盛り上がつてる八百万ちゃんに待つたを掛けたのは響香ちゃん。

響香ちゃんの言葉に八百万ちゃんは「どうかされまして?」と首を傾げている。

「いや、ウチらとしては至れり尽くせりでとてもありがたいんだけどさ……ヤオモモのえつと……使用人さん? たちとかの都合もあるんじやないの?」

「あら、そんなお気遣いは無用ですわ。使用人たちだつてそれが仕事ですもの」

「でも……」

「確かに私の家の別荘は雄英高校よりは狭いと認めますわ。けれどヒーロー科の全員をご招待してもまだ余裕はありますから、ご心配はいりませんわ」

八百万ちゃんがそこまで言うと、響香ちゃんは「なら、いいのかな?」と疑問系だったけど無理矢理に納得することにしたみたい。違う、違う。そうじやない。って思うけど八百万ちゃんが楽しそうならそれでいいと思う。

それにダメだよ、響香ちゃん。超セレブなお嬢様の感覚は常人とは違うんだから。

その後は芦戸ちゃんやら葉隠ちゃんやら、クラスの大半が八百万ちゃんの別荘での勉

強会に参加することになり、みんなに頼られて八百万ちゃんはとつてもぷりぷりしてた。

響香サイド

ヤオモモの別荘で勉強会することになった。

本当は学生恋愛モノのドラマや映画みたいに、白刃と二人きりで勉強会して二人きりなのを言い訳にして……みたいな展開を妄想してたりはして痛い自分がいたけど、フリーに考えればそんなことないよね。

勉強会を白刃の家でするにしても黒刃ちゃんはもちろん、被身子と焦凍も参加するに決まってるんだし、そんなドラマみたいな甘い雰囲気にはならない。
つてことでヤオモモの使用人さんたちがわざわざリムジンで駅まで迎えに来てくれた。

もうこの時点でウチを含め、参加することになったメンバーはみんな驚いたけど、別荘に着いたら着いたでそのスケールの大きさにまたみんな驚いた。

別荘つてなんだろう？

これ豪邸の間違いないじゃない？

ここ売つたらその後の余生まで余裕で暮らしていくぞうなくらいのお屋敷なんだけど？

「……大きい……」

「…………博物館や」

被身子とお茶子はもう目の前の現実を受け入れるのがやつとっぽい。

「大きいーー！」

「大豪邸だーー！」

「流石は八百万ちゃんね。ケロケロ」

こつちの3人はいつも通りっぽいな。

なんか羨ましいんだけど、そのメンタル。

「ようこそ、いらしてくださいました、皆様！　ささ、遠慮なくお上がりになつてくださいまし！」

ヤオモモ、今日は一段とテンション高いなあ。よっぽど嬉しいんだな。普段は大人びてるのに、かわいい。

「行こうぜ、響香ちゃん。ほら、荷物」

「あ、ありがとう、白刃……」

「カレシだからね」

「うん♡」

白刃はホント、付き合つてからウチを女の子扱いしてくれる。

「こういうさり気ない優しさはズルいと思うんだよね……ますます好きになっちゃうじゃん。」

「地毒くんってスパダリだねー！」

「勉強会つてこと忘れてなーい？」

「二人共幸せそうで、見ていて微笑ましいわ。ケロ♪」

「そういうのいいから！」

ウチは照れ隠しで思わず三奈たちに怒鳴っちゃつたけど、3人はニヤニヤしてくるだけ。というか、梅雨ちゃんに至つては寧ろお母さんみたいな、母性あふれる微笑み浮かべてるから余計に恥ずかしいんだけど！



それからも結構からかわれたけど、勉強会が始まればみんな真剣になつた。

ヤオモモがわざわざ参加者全員の不得意な科目の問題集のプリントまで用意してくれて、躊躇ば囁み碎いて教えてくれるしで、本当に助かつてた。

「ただ、

「うーん……分からん

「響香、分かんないの？」

「うん」

「オッケー。ダーリンさん、ハニーさんがヘルプだつてよー！」

「ちょ!?」

こんな感じでウチが躊躇と周りが勝手に白刃を呼ぶんだよね！

そこで白刃も白刃で、

「おーう、今行くー」

なんて恥ずかしげもなく返して、平然と来るし！

ウチばつか恥ずかしい思いしてる気がするんだけど！

表情は見えないけど透のやつめつちゃ笑つてる！ めっちゃクスクス笑つてる声するし！ 勉強どころじやないんだけど！

「はーい、来たよ、響香ちゃん」

「あ、う、うん……ありがと……♡」

くう、来てくれたのは純粋に嬉しい。

というか、ウチしか気付けないとと思うんだけど、白刃ってウチと話す時だけ声のトーン若干柔らかくなるんだよね。本人は自覚していないと思うけど、思い遣りがあつて優しい人だから無意識にやつてるんだと思う。

こういう微かなところでも優越感というか、恋人として接してくれてるんだつて感じてドキドキするんだよね。

ああ、もう好き! □

「響香ちゃん、聞いてる?」

「あ、ごめん……ちょっと飛んでたわ」

「……苦手なのは分かるけど、頑張つて。もう一度教えるから」

「う、うん……□」

ああ、耳が幸せ。

だけどすぐ隣で透が未だにクスクス笑つてるから、そのお陰で浮かれ過ぎずに済んだよ。

あと峰田が無駄に切れ散らかしてくれたから余計に。

ホント恥ずかしかつたけど、勉強会に参加出来て良かつた。

夏休みつて控えめに言つて最高じゃね？

夏休みです。

学生の頃の夏休みつて最高だよね。特に自由度が増えた高校生の夏休みつてさ！なんかこう……最高だよね！

てことでね、そんな夏休みももう後半になつてますよ。
え？ 期末試験？ 合宿？

無事に終わりましたよ？

期末試験の筆記の方は勉強会のお陰で赤点は0。実技試験も問題なく、個性を活かせない子もチームメンバーと協力して救助者を想定したダミー人形を運んだり、避難経路を確保したりで頑張つて、みんな無事に合格判定をもらつたよ。

夏合宿は死ぬほど疲れたね。

原作のような敵の活性化に伴つて自衛のために2年生前期に行うワイルド・ワイルド・ブツシーキヤツツたちによる合宿で、ヒーロー活動認可資格の仮免を1年生後期に取らせる必要性がないから、U.S.Jでの救助活動訓練合宿だった。

初日は普通にU.S.J内の見学をしつつ、水難事故工リアにあるデカいウォータースライダーみたいなやつ乗つて遊ばせてもらつた。あれはマジで楽しかつた。

ただ次の日からの救助訓練がアホなほど過酷で『あ、これ死ぬ』つて思つたのが何度もあつたね。そもそも5時起きつてのが辛かつた。

でもみんなで知恵を絞つて協力したりして本当に掛け替えのない思い出がたくさん詰まつた合宿になつたよ。

それに施設内の宿泊スペースも快適だつたし、朝昼晩と食堂でバランスの取れた最高のメニューや災害時の支給食料の味も堪能出来たし、合宿らしくみんなで昼飯を作つたり、バーベキューしたり花火やつたりつて青春らしい思い出が盛りだくさん。

あと13号先生とハグ出来たのはマジで感動した。あのヒーロースーツ結構抱き心地良かつた。

まあそのあとで何故か対抗心を発揮したしようくんと被身子ちゃんに引つつかれたけれども……。

? その時の響香ちゃん? カわいかつたよ。

二人と離れたあとで、俺の服の袖を引っ張つてきて、『ん』つて両手広げてきてさ……かわいいの権化かよつて言つて、ハグしたよ。

峰田くんにスネ蹴られたの痛かつたけど、悔いはない!

んで、今は合宿も終わつたつてことで残りの高1の自由な夏休みを謳歌している。
いやあ、何度も言うけど最高だよね、夏休み。特に高1の何にも囚われないでいられる夏休みつて。

2年になれば個性強化合宿やら進路を意識して準備を始めないとけないし、3年になればそれこそ夏休みなんてほぼインターナンに捧げるか受験に捧げるかだ。当然俺は後者。

だから俺はこの何もせずに気持ち穏やかに過ごせる高1の夏休みを全力で楽しむぞ！

「…………しようくん、相変わらずだね」

「用がなきや来ちゃいけねえのか？」

「いえ、構いません」

「ならいいじゃねえか」

つて思つてたのに相変わらず俺の家に我が物顔でいるしようくん。

いやまあそれはいいのよ。何せずつとそうですしね寿司。

今は昼過ぎ。黒刃は学校の友達と遊びに行くつてことで留守。昨日はお兄ちゃんと遊ぶ日だつたらしくずっとべつたりだつたけど、今日みたいにちゃんとお友達と遊ぶことが出来る妹がいるという安堵感は兄として嬉しかつた。

「しょうくん

「お?」

「アイス食う?」

「まんじゅうアイスかあずきバーあるか?」

「ありますよー」

夏といえばアイス。

前世の頃の晩年は歳のせいもあつてアイスなんて食う氣にもなれなかつたが、若い体の今は何個でも食えるんだよな。

個性使つたりするとカロリー消費するのか食つても食つても太らないし……若いつて最高だな!

「どつちもあつたからどつちもお食べ」

「白は神だな」

「そんな個性もあるのか?」

「大袈裟で草生える」

「天然ご馳走さん。とりあえずまんじゅうアイスから食べなよ。あずきバーは凶器だから」

「分かる」

まんじゅうアイスをもひもひするイケメン……眼福やわ。

俺は前世から大好物のチョコモナカのジャンボだ。

というか転生してある程度自由に歩き回れるようになつた頃、ヒロアカ世界にも俺の世界のアイスがあつて感動したな。他にもお菓子とかもあつて、転生前のガキの頃のように駄菓子屋にはよく通つたし、今でも通つてる。

そんな前世と今世の似てる部分で感動したのも、今ではいい思い出だ。

「白は響香とデートとかしねえのか？」

「…………んほ」

しようくんらしからぬ質問に俺は思わず間の抜けた声を出してしまつた。

だつてそだろ？あのしようくんが俺に恋愛絡みの話題を振つてきたんだ。明日は……いや、今からヒヨウが降るかもしれない！しかもテニスボールサイズの！
「どうした、急に？」

「？いや、夏兄が夏休みはどこに行つてもリア充共が幸せそうにしてるつて昨日言つてたから」

「ああ、そういうえば夏兄に響香ちゃんとのことでちと妬まれてたな……」「ん。で、どうなんだ？」

「何でそんな訊いてくるん？」

「白が幸せじやないなら、響香に白はやれねえって言わないといけねえから」

「しようくんは俺の父親かよ……」

「俺は白の幼馴染みで、家族だ。俺の家族を幸せに出来ない人間に任せられない
んー、相変わらず思いが重いお。このイケメン。まあ前からだけどさ。
というかさ、

「響香ちゃん」と結婚するにしても、俺はしようくんからお許しをもらう必要なくね?
もらうなら響香ちゃんのご両親でしょ?」

冷たいかもしねないけど結婚するにしようくんの意思是関係なくない?
だからいくらしようくんが反対しようが関係ないと思うの。

「駆け落ちする気か」

「駆け落ちする気はないよ? というか、本当にしようくんとこいつ話題(恋バナとは
また違うけど)しないから訳分からんのだが……」

「……まあとにかく俺は白の幸せを願つてる。それだけだ」

やめてよ、そんなイケメン発言しないでよ。柄にもなくお耳が幸せになっちゃう。メ
スになっちゃうじゃない。

「んなこと言われなくても俺は幸せだよ」

「今は俺といるんだから当たり前だろ?」

コイツ、俺のこと落としに来てる？ イケメンムードがエグいんだが？

「そんなことより白は宿題終わったか？」

良かった。いつものしようくんだ。天然のイケメンムードだつた模様！

「合宿前に貰つた宿題は終わらせたし、残りも少ないからほぼ終わってるかな」

前世ブーストもあつてこういうのは寝る間も惜しんでさつさと終わらせてるんだよね。若いから完徹しても仮眠取れば問題なく日中も活動は出来るから。

「早えな。まあ俺も似たようなもんだけど」

「ほぼ一緒にやつてるしな」

「おう」

誇らしげに胸を張るしようくん。小学生の頃から俺たちは宿題やるのもほぼ一緒にやつてきたから、ペースも同じなんだよね。

だから今日もこんな風にのんびりと過ごさせているということだ。

「じゃあアイス食い終わつたら残りの宿題終わらせちまうかー」

「そうだな。終わらせちまえばあの休みは存分に白といれるからな」「相変わらずだね、しようくんは」

「？」

「こつちの話。それより食つちまおうぜ。あづきバーも食い頃だし」

「おう」

こうして俺たちはアイスを食べ、残りの宿題を揃つて終わらせるのだった。

被身子サイド

今日はクラスの女の子たちと百ちゃんの別荘でお泊り会。

三奈ちゃんと透ちゃんが『遊んじやつて、宿題が進まない!』って言うから、みんなでこのお泊り会で終わらせちゃおうって話になつたの。

ご両親の代わりに家事や下の子の面倒を見てていつもは参加出来ない梅雨ちゃんも、今回はご両親がお家にいるつてことで参加してる。みんな揃うのつて嬉しい。

それでお泊り会だから、今日は特別に百ちゃんが使用人の人たちにお願いして、わざわざ広いお部屋にお布団を敷いて寝るの。

「やつと終わつたーー!」

「シャーペンの握り過ぎで手が痛ーー!」

梅雨ちゃんと百ちゃんの手綱捌きもあって、三奈ちゃんたちも日付を跨いだ頃に全部の宿題を終えた。

もうお風呂も済ませてあるから、みんなパジャマ姿。

百ちゃんはお高そうな赤いネグリジエ?つていうパジャマで、シルク?つて生地でとつてもスベスベ。

透ちゃんとお茶子ちゃんと梅雨ちゃんはボタン掛けの半袖半ズボンのパジャマ。透ちゃんが白でお茶子ちゃんは薄ピンク。梅雨ちゃんは黄緑色の生地に、カエルマークが水玉模様みたいについてる。

三奈ちゃんと響香ちゃんはタンクトップに短パン。三奈ちゃんは黒のタンクトップにクリーム色の短パンで、響香ちゃんは紫のタンクトップと黒の短パン。

私は白刃様のお下がりの黒のTシャツとドクロマークが左腿のどこに描かれてるハーフパンツ！ 宝物！ 本当は使わないで永久保存しようと思つたんだけど、使わないと白刃様が「使わないなら捨てていいいんだよ？」って悲しんじやうから、使うようにしてるの！

「やっぱこのメンツだと捲るー！ 寮だと他のクラスの子もいるから、なーんか遊んじゃつてさー！」

「家でも一人でやつてるとつい違うことしちゃうんだよねー♪」

三奈ちゃん、透ちゃんがそんなことを言うと、お茶子ちゃんも響香ちゃんも『分かる』つて領いてる。私もちよつと分かるかも。地毒園にいると基本的にみんな集まつて宿題やるけど、宿題とは別のお話しをしちやつたりするもん。あ、これつて普通っぽい！

「では時間も遅いですし、そろそろ就寝しましようか」

百ちゃんがニッコリと笑つて言う。かあいい♡
でも、

「えー! せつかくのお泊り会なのにー!?」
「ガールズトークしたいしたーい!」

三奈ちゃんと透ちゃんが揃つて駄々をこねた。かあいい♡

「ガールズトーク……申し訳ありませんが、私はしたことがない……」

「百ちゃん、謝ることではないわ。ガールズトークって言うのは、ただ女の子同士で楽し
くお喋りをするだけだもの。私たちがいつもしているのと変わらないわ。ケロ」

「まあ、そうなのですね!」

梅雨ちゃんの説明に百ちゃんは笑顔でポンと手を叩く。そのあとでベルを鳴らすと、
使用人の人たちがお茶とお菓子を用意してくれた。凄い。お茶子ちゃんも「やっぱセレ
ブや」つてつぶやいてる。

「合宿でみんなとお泊りはしたけど、疲れてガールズトークしてる場合じやなかつたも
んねー!」

「うんうん! やっぱり、こういうのはお泊り会の定番!」

「夏休みだし、こんな風に夜ふかしするのも学生ならではの楽しみ方よね。ケロケロ」
みんなで円卓を囲んでソファアに座つてガールズトーク。まだ何もお話していないの

に普通で楽しい！

「で、ガールズトークと言えば……？」

「恋の話ー！ 略して恋バナー！」

三奈ちゃん、透ちゃんが揃つて『いえーい♪』って手を叩くと、百ちゃんと梅雨ちゃんと私は拍手して、お茶子ちゃんと響香ちゃんは顔を赤くした。なんでだろう？

「とりあえず今彼氏持ちは響香だけだけど、それから彼氏とはどう？♪ 進展報告よろー♪」

「惚気ばつちこーい♪」

「私も普段聞けないから、なんだか楽しみだわ。ケロケロ」

「あ、あんまり過激なお話はせんといて！」

ああ、こうなるから響香ちゃんは顔を赤くして、お茶子ちゃんは恋愛のお話聞くのが恥ずかしいんだね！ どつちもかあいい。

「ほらほら、唯一の彼氏持ち？ みんな待ってるよ～？」

「三奈、うつさいつ！ 惚気ろつて言われて惚気るかつての！」

「まあ確かに地毒くんつてハイスペスパダリさんだから、独り占めしたいよねー！」

「他のクラスの女の子たちが轟ちゃんと地毒ちゃんの話をしている時があるものね。私としても地毒ちゃんは優しくて、本物のヒーローみたいなところ好きよ。ケロ」

「梅雨ちゃん!」

梅雨ちゃんの大胆な発言に響香ちゃんはびっくりしたみたいだけど、梅雨ちゃんは「ライクつてことよ♪」つて舌を出してお茶目に笑った。かあいい。

「地毒くんは飯田くんほど真面目でもないけど、上鳴くんみたいにチャラチャラしてないし、切島くんほど熱くないから、ちようどいいんだよねー。轟くんみたいな天然ボケもないし、お料理も上手だし! 授業中も頼りになるし、お世話上手つて感じ!」

「職場体験で活躍していたものね。事故に遭った人は可哀想だけど、地毒ちゃんも轟ちゃんも、そして被身子ちゃんも救助の補助をしているのをニュースで見て誇らしくなつたわ。この頑張ってる人たちは私のお友達なのつて。地毒ちゃんに至つては変わらず冷静にエンデヴアーへ指示を仰ぎながら、一人にも指示を出していて……流石だと思つたわ」

透ちゃんや梅雨ちゃんがそんな話をするとみんなも『確かに』つて頷いて、響香ちゃんはみんなに白刃様が褒められてちょっと嬉しそうにしてる。かあいいなあ。あと梅雨ちゃんに褒められたのが嬉しい♪

「実際、地毒は体育祭終わつてからファンクラブ出来たっぽいもんね! 本人の全く知らないところで!」

「聖愛学院に進学した同級生の方が、学院に熱狂的なファンがいらっしゃるみたいです

わ。この前教えて頂きましたもの。既に2桁は超えているとか……」

「私もたまに寮で地毒くんのこと聞かることあるなあ」

「ああ……そう……」

三奈ちゃんと百ちゃんのファンクラブ発言やお茶子ちゃんの発言に、響香ちゃんは遠い目をして言う。

体育祭で白刃様はレクリエーションの借り物競走に出て、出たお題がモノクルだつたらしくて、観客席にいたモノクルを掛けた女の子を見つけて、その子にモノクルを借りに行つて見事に1着を取つたの。

それからモノクルを返しに行つた時に握手求められてたし、周りの子たちとも写真撮つたりしてた。

私やA組の女の子たちはすっかり慣れてるけど、白刃様と関わったことのない女の子は白刃様の見た目が怖いんだつて。なのに教材を運ぶのを手伝ってくれるとか、落としたハンカチ拾つて届けてくれるとか、優しい性格をしてるからそのギャップが凄くて、そういうところにみんなやられちゃうみたい。流石私の運命の人（ヒーロー）だよね！

そういうギャップが体育祭で分かつたから、もう既に一部で熱狂的なファンがいて、響香ちゃんはちょっと悩んでる。攻撃まではされてないけど、視線が痛いらしい。

でもでも白刃様は響香ちゃん一筋だし、ファンクラブのことも知らないから安心していいと思うけどなー、私は。

「いやあ、そんな人が彼氏で響香は幸せですか〜?」
「……幸せですけど、何か問題でも?」

「べつに〜♪」

「あー! もう! うるさいなー! こうなるの分かつてたから嫌だつたんだよ!」

響香ちゃんはそう叫ぶとみんなから逃げるよう私に抱きついてきた。かあい!

「三奈さん、透さんも……響香さんが可哀想ですわ」

「私もからかつちやつたから人のことは言えないけれど、やり過ぎはよくないわ。ケロ」「でも響香ちゃん、地毒くんといふ時めつちや幸せそうに笑つとるから、からかいたくなるのはちょっと分かつてまうかも、私」

「お茶子、仲間ー♪」

「幸せ者は弄られても仕方ないよねー♪」

「そんなこと言われても……白刃と付き合えて幸せなのは当然じやんか……」んなにこ
んなに好きなんだし……」

『つ!』

「お砂糖を入れてなくとも紅茶が甘く感じるわね。ケロケロ♪」

響香ちゃん乙女ー♡ とつてもかあいいー♡

みんなも私と同じ気持ちなんだろうなー♪ だつてみんなお顔赤いもん♪

「女として負けた気がする……」

「こういうかわいさが地毒くんを夢中にさせてるのかなー?」

「響香ちゃんかわいいわ♪」

「なんだか、こちらまで火照つてしましますわね……」

「恋つて偉大や……」

「響香ちゃんかあいいー♪」

「だからやめろ!」

その後も私たちは朝方まで響香ちゃんに白刃様との甘々エピソードを訊ね続けた。

なんだかんだ文句を言いながら、結局響香ちゃんも嬉しそうに白刃様とのことを話して惚気ててとってもかあいいかつた♡

響香サイド

「てなことがあつてさ、ホント大変だつた……」

「いい思い出が出来たようで何より」

「随分と他人事みたいに言つてくれるじゃん?」

「いやそんなことはないよ。だつて今しか出来ないような過ごし方だろ? 今は恥ずか

」

しいが強いだろうけど、大人になれば『あゝ、高校生の頃にそんなことあつたなゝ』つて思えるし、本当にいい思い出だと思うのだよ』

「白刃つてたまにおじさん染みた」と言うよね』

「昔からよく言われる」

ヤオモモの別荘でお泊り会をしてから数日後。

ウチは白刃の家にお邪魔させてもらって、あの時の愚痴を聞いてもらつて。まあ愚痴つてほどでもないんだけどさ。なんだかんだ喋ったのもウチだし。

今日は焦凍が冷おばさんの実家に家族で顔を見せに行つてるから、珍しく最大の邪魔者がいない。黒刃ちゃんも被身子もウチに気を使つてくれて、こうして二人で過ごせる。

別に何かするつて訳でもなく、ただ白刃の自室で隣り合つて座つてるだけだけど、それだけでウチは幸せ。白刃もウチと同じ気持ちだと嬉しいな。

だからこそ……重い女だつて思われても、白刃がウチと別れて違う人と結ばれるなんて嫌だ。絶対に嫌だ。

「ねえ

「？　どうした？」

「好き」

「え、お、おう」

「好き」

「本当にどうしたの？」

「……伝えないと後悔するから、かな」

正直、自分でも何言つてるのか分からない。

でも気持ちはしつかり伝えないとウチの気が済まないんだよ。

「……なんか不安なの？」

「……そんな感じ。ごめんね、めんどくさい女で」

「響香ちゃん」としか付き合つたことないから、この状況がめんどくさいのかも分からないんだよね、俺」

正直にそんなことを言つて苦笑いする白刃。

それがウチに対する気遣いじやなくて、ウチにちゃんと今の本音を言つてくれてるつて分かつて、余計にウチは好きつて気持ちが膨らんでくる。

「ハグ、してくれない？」

「えらい唐突だな」

「いいじやん。減るもんじやないし」

「甘えん坊な響香ちゃん」

「彼氏に彼女が甘えて何が悪い」「何も」

白刃はそう言うと優しくウチを抱き寄せてくれた。

背中に両手を回して、ウチが苦しくないように、優しく優しく。

それでいて白刃の心臓の音が速いビートを刻んでて、ウチはそれが心地よくて聞き入つてた。

「……白刃」

「ん?」

ウチが見上げれば、必然的にウチの方を向いた白刃の顔が目の前にくる。

お互いの息が当たる距離。いつもは反らすはずの目線も、今は白刃の瞳にホールドされたようになくなつてた。

もういいや。欲張つちやえ。

「……んつ」

「つ!?

「……」

「ん」

「つ……ん……へへへ♡」

ファーストキス、しちやつた！

白刃の心臓の音が更に速いビートを刻んで、ウチとのキスを喜んでくれてるみたいで、気分がアガる。

「……えっと、その、ありがとう」

「なんでお礼？ ウチからお願ひしたのに」

「いや、なんとなく？」

「あはは、何それ……あははは♪」

「ハハハ……」

「愛想笑い下手くそか♡」

「こういうの本当に免疫ないんだよ……」

「顔真っ赤♡ いつもは逆なのに♡」

「…………」

「ねえ」

「……今度は何？」

「そう警戒しないでよ……ただ……」

「ただ？」

「もう一回、キス……したいなって」

「彼女が俺の息の根を止めて来ている件」

「そうなつたら心臓に直接爆音響かせて強制蘇生ね」

「うわお」

「いいからしてよ……ほら、んつ」

「……んつ」

今度は白刃も余裕が出たのか、心臓は穏やかなビートになつてた。

さり気なくウチの腰に手を回して支えてくれてるのも、ウチの頭を優しく支えてくれてるのも、全部全部白刃の優しさが伝わってきて、とても嬉しい。

ウチも最初こそはちょっと強張つてたけど、今はリラックス出来る。

だつて白刃の胸元に両手を置くのをやめて、白刃の首に両手を回せる余裕が出たもん。

「んつ……ん……んうつ」

「つ……んつ……!?」

へへ、ビクツでした。ほらほら、口を開けろ。

「つ……つ……んう!」

いつもリードされっぱは悔しいもんね。というか、白刃の吐息が色っぽくてドキドキするし、いつもカツコいいのに、今はめっちゃかわいい。

「ん～……れるつ……はむつ……♡」

「……つ……はむつ！」

「んむう!？」

舌噛まれた！ あ、待つて……え、白刃の舌がウチの舌に巻き付いて……ウソ、何これナニコレ！ 腰が勝手に動くのに、白刃にガツチリ押さえつけられて……やつば、これ……！」

「んう……はあ、あ……んむう♡」

「はむつ……ちゆるつ、ぢゆるる……んう～……」

「お……ほお……んう♡ んつ、あつ……んんくつ♡」

「ぷはあ……はあはあ、はあ……」

「はーつ、はーつ、はーつ♡」

白刃とのキス、凄い……ヤバッ、飛んだ……。

ウチ、今絶対情けない顔してる。見られたくないけど、体が言うこと聞かない。どつちの涎だか分かんないくらい糸引いて恥ずいし、口の周りベトベトだ……。「ごめん、なんか歯止めが……」

「ううん、ウチこそ……でも全然嫌じやないから♡」「ティッシュ、いる？」

「……いる」

お互いティッシュで口元を拭く。

そうしている内に段々自分が何をしたのか分かつて、顔から火が出るくらい熱くなつた。

「何やつてんだろうね、ウチら……」

「キスだろ……恋人同士の……」

「そ、そうだよね……へへへ♡」

「凄い満たされた感じ……キスって凄いんだな」

「うん……凄かった……♡」

またしたいって言えばしてくれるかな?

変態つて思われないかな?

「また、してもいい?」

「え」

「あ、いや……響香ちゃんとまたキスしたいなつて……思つて……」

「へへへ……ウチもしたい♡」

好き……大好きだよ、白刃♡

これからもずっと……♡

それからウチらは何度も何度もキスをして、気が付いたら夕方になつてた。帰りは白刃がわざわざウチの家の近所まで送つてくれて、外なのに別れのキスまでもしゃつた……でも恥ずかしさよりも、幸せの方が断然上だつた。